六畳の暴君!!
健速
Takehaya
22

六畳間の侵略者!? 22
～黄金の姫と青き騎士～

二千年の時を越え、再び“パルドムシーハ領”へ！

三人が動物に!?
「わ…わふ」
「に…にゃあー」
「みゃお♪みゃおう♪」

「苦労をかけましたね、パルドムシーハ。
少し白髪が増えましたか？」
「おっ、お父様あっ!?」
「やはり
女の子は恋をすると
変わるのだな」

六畳間の侵略者!?22

健速

HJ文庫

口絵・本文イラスト　ポコ

もくじ

十一月二十日（土）
流星の行方 ……007

十一月二十日（土）
一方その頃……028

十一月二十日（土）
父と娘 ……048

十一月二十一日（日）
関所にて ……066

十一月二十四日（水）
仲間たち ……103

十一月二十四日（水）
呉越同舟 ……150

十一月二十四日（水）
白銀の剣 ……249

あとがき ……272

六畳間の侵略者!?
キャラクター勢力図

吉祥春風高校の人々

笠置静香
問答無用に強い、
孝太郎の同級生で
ころな荘の大家さん。

松平賢治
孝太郎の幼なじみで親友。

ころな荘の住人

里見孝太郎
ころな荘一〇六号室の、
いちおうの借主で主人公で青騎士。

桜庭晴海
孝太郎の所属する編み物部の部長で、
一年先輩。ちょっと病弱。

東本願早苗
ころな荘一〇六号室に取り憑く
幽霊少女改め、生霊少女。

幽霊

本体

藍華真希
元ゆりかの敵、
悪の魔法少女【ダークネイビィ】。
今は静香と同居中。

魔法少女

虹野ゆりか
一〇六号室の危機を訴えていたのも昔、
いまや"自称"が取れた魔法少女。

ティアミリス・グレ・フォルトーゼ
皇位継承権のために宇宙からやってきた皇女様。
クーデター軍との全面対決のため、故郷の地へ。

地底人

クラノ＝キリハ
地上侵略を狙うふりをしつつ、
想い出の人を探していた知略の人。

宇宙人

クラリオーサ・ダオラ・フォルトーゼ
ティアと敵対していた宇宙人皇女。
最近は何かと孝太郎に頼りにされている。

ルースカニア・ナイ・パルドムシーハ
ティアの付き人で世話係。
最近は憧れの青騎士のもとで修行中。

ROOM No.106
CORONA-SOU

目次

十一月二十日（土）

流星の行方

十一月二十日（土）

一方その頃

十一月二十日（土）

父と娘

十一月二十一日（日）

関所にて

十一月二十四日（水）

仲間たち

十一月二十四日（水）
呉越同舟
十一月二十四日（水）
白銀の剣
あとがき

流星の行方　十一月二十日（土）

惑星『アライア』はフォルトーゼ星系の第六惑星にあたる。元々は生物が住んでいない不毛の惑星であったが、神聖フォルトーゼ銀河皇国の本格的な宇宙時代到来と共に改造が進められ、今では人間をはじめとする多くの命に満ちた星となった。

だが『アライア』は一番初めに改造と開拓がなされた惑星である為に、多くの部分が非常にシンプルな作りになっている。その傾向が色濃く出ているのが生態系で、この『アライア』に住む動植物は非常に種類が少ない。呼吸可能な空気を作る植物、住民を養う農作物、眺めていて心が休まる景観――そういったものを維持する為の最小限の動植物しか持ち込まれなかったのだ。

結果的に『アライア』の自然環境は、我々がぼんやりと思い出した時の田舎の風景に近い。人の手が入った人工的な自然、つまり全てが里山と言い換える事が出来るだろう。惑星間で人間や荷物の行き来があるので、徐々に本来いない筈の動植物が増えてはいるものの、それでもまだシンプルさは拭えない。恐らく真の意味で生態系が完成するのは、これから千年以上先になるだろう。だがそんなゆっくりとした生態系の歩みを、ほんの僅かに遅らせる者達が現れた。それは空から現れた青い流星だった。

「きゃあぁぁぁ

ガッ、ガガガガガガッ、ザリザリザリザリイイッ

流星は悲鳴を上げながら地面に接触すると、地面そのものと周囲の草木を破壊しながら数十メートル進み、そこでようやく止まった。破壊の範囲はそれ程広くはないが、自然任せなら完全な回復には数年を要するだろう。

そして問題の流星は止まってすぐに青い輝きを失い、その正体を明らかにする。青い流星の正体は、三人の男女だった。

「いててててて……し、死ぬかと思った……」

「コータローや、少し力を緩めておくれ。わらわが本当に死んでしまう」

「おっ、悪い」

「詫びる必要などない。大儀であった」

流星の正体は孝太郎達だった。孝太郎達は宇宙で戦っている時にこの星の引力に捕まってしまい、そのまま大気圏に突入した。非常に危険な状況だったが、三人で力を合わせて何とか地上へ辿り着いたのだった。

「無事か？」

「うむ、そなたが守ってくれた。そなたはどうじゃ？」

「俺も平気だ。怪我はしてない。……鎧の方は無事とは言えないみたいだが」

「ふふ、そなたが無事ならよい。鎧には代わりがある」

「わ、わらしのころも、しんぱいしてくりゃしゃいよう～～～～」

孝太郎とティアは軽く笑い合うと素早く立ち上がり、顔から地面にめり込んでいるゆりかを引っ張り出した。幸い三人とも大きな怪我はなく、一番の重傷はゆりかが鼻を擦りむいたくらい。行動には支障がない程度の軽傷で済んでいた。

「……うっ、ううぅ……怖かったですぅ……死ぬかと思いましたぁ……」

「もう大丈夫だから、落ち着けって」

「嘘ですよぉ。里見さんが大丈夫とか言っても、もう信じませんからぁっ！」

「分かった分かった、分かったからちょっとこっち向け。酷い顔だぞ」

「ふぁい」

どちらかといえばゆりかの精神的な部分が問題だったのだが、孝太郎がゆりかの顔を拭いてやっているうちに徐々にいつもの調子を取り戻していった。

「……それにしても……よくあそこから落ちて無事に済んだのう……」

孝太郎がゆりかの顔を拭き終えるのを待つ間、ティアは手で日光を遮りながら頭上を見上げる。するとティアの声を聞き付け、ゆりかが目だけで彼女の方を見上げた。

「フォルトーゼってぇ、ああいう地獄みたいな場所は多いんですかぁ？」

「だから大気の上層だって言ったろう。人が住む星には大体あるんだよ」

「えぇえぇえぇっ!?　嘘ですよぅっ!!　あんな場所ばかりじゃ、宇宙船なんかバラバラになっちゃうじゃないですかぁっ!?」

「そうならないように頑丈に作ってあるんだよ」

「ホントですかぁ～？」

「厳密に言うと、船体自体はそれほど頑丈に作っておらんぞ。空間歪曲場で守っているだけじゃからのう。それに慣性と重力を制御して飛ぶから、突入時の速度はもっとゆっくりになって、熱はあれほどではないのじゃ」

「ほらぁ～～!!　絶対ここだけですよぉっ、あんなのぉっ!!」

「ティア、話をややこしくするな」

「すまん。ふふふっ」

孝太郎達は宇宙船もなしに軌道上から落ちた。普通なら本物の流れ星のように燃え尽きていただろう。それをちょっとした火傷や怪我だけで済んでいるのだから、三人の力だけでなく運も相当良かったと言えるだろう。ゆりかが『アライア』だけの特別な危険だと思いたくなる程に、本当に危険な状況だったのだ。

「じゃが、より危険なのはここからじゃろうの」

ティアは孝太郎がゆりかの顔を拭き終えるのを見届けると、すぐに笑顔を消して大真面目な顔で二人に語り掛けた。声も同じくらい大真面目で、自然とゆりかや孝太郎の顔も緊張感に包まれた。

「まだ何かあるんですかぁ？」

「敵が来るのじゃ。わらわ達がこのあたりに落ちた事は皇国軍も掴んでいよう。ぼやぼやしておるとあっという間に取り囲まれるぞ」

「えぇぇぇぇぇぇぇぇっ!?」

「大きな声を出すな。敵に聞かれたらどうする」

「すっ、すみませぇん……」

「よし、二人共わらわについてまいれ」

無事に地上に降りられたものの、危険はまだ終わっていない。フォルトーゼ皇国軍が追手を差し向けてくる前に、三人はこの場所を離れる必要があった。

フォルトーゼ星系には太陽とフォルトーゼ本星を除くと、七つの惑星がある。そして七つの惑星は、七つの皇家によって個別に管理されている。いわゆる直轄領なのだ。つまり神聖フォルトーゼ銀河皇国の皇家は、フォルトーゼ本星の領地と、惑星を一つずつ保有しているという事になる。厳密には皇家は他の太陽系や銀河に更に幾つも惑星を保有していたりするのだが、その辺りの事情はここでは割愛する。

この惑星『アライア』はエルファリアの支持が篤い事から分かるように、ティアの生家であるマスティル家の直轄領だ。その為、ティアはこの星に関する情報は豊富に持っている。そうした情報の中には、身を隠すのに向いた場所の情報も含まれていた。

「しばらくここに身を隠すとしよう」

「すぐにぃ、キリハさん達とぉ、合流しなくていいんですかぁ？」

「今は俺達が来た直後で、この近くに皇国軍が集まってきてる。動くと危険なんだ」

誰なのかまでは分からないだろうが、ティア達三人がこの辺りに落ちた事は地上のフォルトーゼ皇国軍も観測している筈だ。当然、違法な入国者を捕まえる為の人員を出している事だろう。その為、しばらくはこの辺りの警戒が厳しくなる。だが時間が経てば皇国軍はティア達の移動を計算に入れて捜索の範囲を広げるので、この辺りの警戒が幾らか緩む。それまでは下手に動かない方が安全なのだった。

だがティアには懸念もあった。

――あの者が報告していたらいつまでも警戒が緩まぬ可能性もある……しかしそれは考えても始まらぬ……。

先程助けた戦闘機のパイロットがティアの事を皇国軍に報告していれば、大量の人員がこの地域に押し寄せるだろう。その場合は非常に危険な状況に陥るが、どのみち今すぐには動けない。それにティアはパイロットを助けた事を後悔していない。だから彼女はその時はその時だと考えていた。

「なるほどぉ……」

「それでティア、ここはどういう場所なんだ？」

孝太郎は首を巡らせて辺りの様子を眺める。ティアが二人を連れて来たのは、森の中に

紛れ込むようにして建つ半地下式の建物だった。この建物は一部が崩れかけており、しかも蔦や苔で覆われていて、使わなくなってから非常に長い年月が経っている事が窺われた。おかげで何の為の建物なのかは見ただけでは分からなかった。

「これは惑星開拓初期に使われていた建物での。この辺りの緑地化を進める為の前線基地だったのじゃ。じゃがこの通り緑地化に成功して使われなくなった。その後、一時期反体制勢力が隠れ家に使っておったらしいが、それも開拓が進むにつれて別の場所へ移っていった」

「緑地化の基地で、山賊の小屋か……この星の歴史を感じさせる場所だな？」

「じゃからこそ、わらわ達はデータとして持っておった訳じゃ」

この地域に関する情報は、惑星の改造と開拓を指揮したマスティル家が一番豊富に持っている。後からやってきた皇国軍以上にだ。ティアはそうした情報の中から幾つか隠れ場所をピックアップし、軍の持つ情報にない場所を選んで逃げ込んだ。賢いやり方と言えるだろう。

「じゃあじゃあ、しばらく安全って事ですよねぇっ!?　お休みですよねぇっ!?」

「そういう事じゃ」

「……ふわぁぁぁ……助かりましたぁ……」

ゆりかは大きなブロックを椅子の代わりにして腰を下ろした。大気圏に突入する前からずっと緊張が続いていたので、疲れ果てた様子で背中を丸めるようにして座り込む。しば

らくは立ち上がれそうにない雰囲気だった。

「安心して休むがよい。この場所なら早々に見付かったりはせん」

この建物は周囲を森に囲まれ、風景に溶け込むようにして建っている。半地下式の構造に加え、絡みついた蔦や苔がカモフラージュしてくれているのだ。しかも軍の地図には載っていない。よほどの不運が連続しない限り、皇国軍がすぐにやってくるような事はない筈だった。

孝太郎達は休憩がてら食事を摂る事にした。といってもそのメニューは質素だ。孝太郎の鎧に付属していたものとスターパープルの残骸から引っ張り出したサバイバルキットの食料なので、高カロリーのブロックタイプの保存食とコーヒーだけだった。

「いっただっきまーす！」

「いただきます」

「いただきますなのじゃ」

しかし孝太郎達三人は別段この質素なメニューに文句はなく、それらを黙々と口に運んでいた。今がどういう時かは分かっているし、色々あってお腹も空いていたのだ。だから孝太郎が気になっていたのは、むしろ別の事だった。

「それにしても……ティア、お前食事の作法は完全に日本風になったな」

孝太郎が気になっていたのは、ティアの食事の作法が日本風になっていた事だった。孝太郎は過去のフォルトーゼにいた事があるので、その違いが分かる。そしてフォルトーゼに戻ってきたのに日本風のままになっているティアを面白いと感じていた。

「……そうかもしれんのう。それだけ長い時間を向こうで過ごした」

その事を指摘されたティアは、自分でも面白いと感じて笑顔を作った。今のティアには自分が変化した自覚がある。その一端を目に見える形で確認できた訳なので、やはりそうなのだという確信を強めていた。

「政治回りの会食とかで日本風の作法が出ないようにしろよ」

「分かっておる。心配なのはむしろそなたじゃ」

「俺？　何でだ？」

急に自分の方に話が向き、孝太郎は目を丸くする。するとまるで楽団の指揮でもするかのように指を振りながら、ティアは孝太郎を見つめた。

「あまりにそれらしく振る舞ってしまうと、青騎士だと気付かれてしまうじゃろ」

秘密にしておきたいが、明かしたい気もしている。ティアの中では常に二つの気持ちがせめぎ合っていた。そんなティアの言葉を聞いて、孝太郎は再び笑い出した。

「お前にそう言われると面白いな」

「何故じゃ？」

「猛特訓したのはお前だろう」

「ふふふ、そうであったのう」

孝太郎に騎士の作法と精神を叩き込んだのは他ならぬティアだ。それを彼女自身が出すなと言うのは奇妙な事だった。ティアの中のせめぎ合う気持ちとも一致しており、彼女自身それがおかしくてならなかった。

「お互い、覚えた事を出さぬようにせんとな」

「ああ。気を付けよう」

そうして二人で笑い合った所で、話題が一段落した。するとどちらからともなく、二人の表情が真剣なものへと変わっていく。二人――正確には三人――には親交を深めてばかりはいられない事情があった。

「それでティア、これからどうする？　エル達と合流するのはもちろんなんだが」

今は、はぐれてしまった仲間達との合流が最優先だ。そうしなければフォルトーゼを守る事は出来ない。真剣にならざるを得ないのは自然な事だろう。

「本来ならまず通信をしたい所じゃが、この状況では自殺行為じゃろうな」

「電波も重力波も駄目、エウレクシスが噛んできているから魔法や霊力も無理だな」

通信をすれば何らかの通信波が出てしまう。そうなると通信波の出所に大量の皇国軍が押し寄せるだろう。

「当然通信が駄目なので、ゲートで合流などもってのほかじゃ」

「俺達が安全に移動出来るゲートが出来る前に、無人機だらけになりそうだな」

似たような理由で、ティア達が『青騎士』と一〇六号室を移動する為に利用している、瞬間移動のゲートも使えない。

人間が安全に移動出来るゲートを作るには一時間はかかるので、その前の段階で発生する通信波や空間の歪みを察知した皇国軍は素早くゲートを作り、無人兵器を大量に送り込

んでくるだろう。無人兵器なら転送に失敗してもやり直せばいいから安全性は無視出来、ゲートは素早く作り出せる。だから孝太郎達は、ゲートを使う前に無人兵器に取り囲まれてしまう可能性が高かった。

この問題はゆりかの魔法で瞬間移動する場合も同じだ。結局は空間が歪む事には変わりないので、敵に見付かってしまうだろう。

「そんな訳で自力で脱出する。出発は夜じゃな」

通信やゲートは無理なので、仲間達の救援（きゅう）は期待出来ない。自力で脱出しなければならない。それがテイアの結論だった。

「急がなくていいのか？」

当然だが、急いで仲間達と合流したい。そこで孝太郎は数時間待って、皇国軍が捜索範囲を広げたタイミングで、移動を開始するべきだろうと考えていた。しかしティアは夜を待つという。そこが孝太郎には疑問だった。

「そうしたいのは山々なのじゃが、恐らく上に人工衛星や無人機が来ておるじゃろう。昼間のうちにその監視の目を掻い潜るのは難しい」

ティアも基本的には孝太郎と考えは一緒なのだが、急ぐに急げない事情があった。それが上空に張り巡らされている筈の監視網だった。恐らく人工衛星や無人機等が上空から監視しており、画像を解析してティア達を見付けようとしている筈だ。その為、通常の光学観測が可能な時間帯に移動するのは危険だった。

「それでカメラには映らなくなる夜って事か」

「うむ……しかしそれでも完全にリスクがなくなる訳ではない」

「どういう事だ？」

「赤外線カメラでは姿が見えてしまうからじゃ」

「熱なら、森の動物も出してるだろ？」

「ここは人工の森じゃから、大型の動物が少ない。熱量の大きい順に、総当たりで調べてくる可能性もある」

「という事は、わざと森の深い辺りを行く必要がある訳か」

「そうなるじゃろう」

夜になれば光学カメラは使えないが、熱の大小を測る赤外線カメラや熱源センサーは使える。とはいえ森には普通、動物が住んでいるのでいきなり見付かってしまう可能性は低い。しかしこの『アライア』の森では少しだけ事情が異なる。この森は人工的に作られたものなので、自然の森よりも動物の数が少なく、特に大型の動物は少ない傾向にある。従って自然の森よりも皇国軍に見付かる可能性が高くなってしまうのだ。

皇国軍に見付かってしまう可能性を下げるのに手っ取り早いのは、木々が生い茂った地域を行く事だ。赤外線カメラも熱源センサーも、障害物の向こう側までは見えないからだっ

た。

「じゃが、それは皇国軍も分かっておる訳じゃから、森の深い辺りには人員なり無人機なりが多めに配置されるじゃろうな」

「……なるほどなぁ……なかなか厄介だな……」

孝太郎はティアの明解な解説に納得しつつも、どうしたものかと頭を悩ませる。このまま無策に移動するよりは、何か一つ保険が欲しい所だった。

「ゆりか」

そんな状況で、孝太郎が最初に思い付いた保険はゆりかだった。

「ほへ？」

急に話を振られたゆりかは、保存食を咥えたまま不思議そうな顔をする。食事に集中していた彼女は、ここまでの話を全く聞いていなかった。

「お前の魔法で俺達の体温を隠せないか？」

「出来なくはないですけどぉ、どれぐらいの時間ですかぁ？」

話の筋は分からないものの、ゆりかには体温を隠す魔法には心当たりがあった。潜入任

務などで多用される魔法なので、ゆりかも教え込まれていた。

「ティア、ここから目的地まではどれぐらいだ？」

「徒歩じゃから……三日か四日という所じゃろうのう」

孝太郎の鎧とシグナルテイン、ティアのコンバットドレスは、ほぼエネルギーを使い切っている。加えてティアは大気圏突入時にスターパープルを切り離しているので、装備の基部となるドレス部分しか残っていない。おかげでエネルギーを大量に消費したり、多くの装備を必要とするような行動が出来なくなってしまっている。もしそうでないなら、ゆりかが顔から着地するような事はなかっただろう。そういった事情から、残念ながら移動手段は徒歩になってしまうのだった。

孝太郎達はさしあたって、エルファリア派の力が強い地域に逃げ込みたい。その境界線上にある町までが直線距離で百キロあまり。全力で移動すれば二日あまりで着く距離だが、緊急事態に備えて体力を温存するなら三日か四日と考えるべきだろう。

「つまり夜の間中って事か。ゆりか、出来るか？」

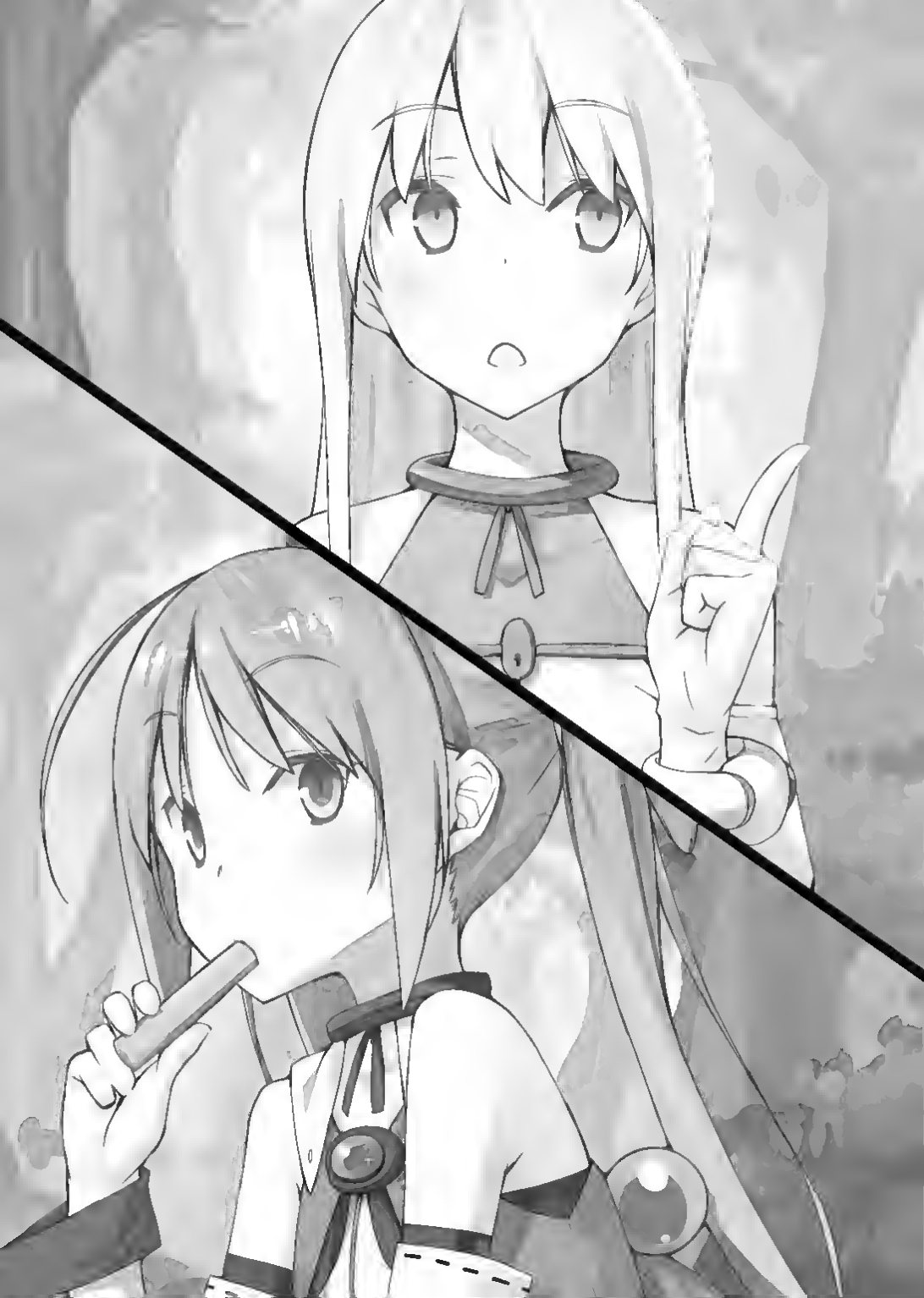
「私一人なら出来るかもしれないんですけれどぉ、三人だと難しいと思いますぅ」

体温を完全に遮断する魔法は中級クラスの魔法なので、長時間の利用には向かない。ゆりかは生まれつき魔力が強いが、それでも数時間にわたって三人の体温を隠し続けるのは簡単な事ではない。

「それにぃ、ダークネスレインボウに見付からないように魔力を隠蔽する魔法も必要です

からぁ、三人だと二時間ももたないんじゃないかとぉ……」

魔法で体温を隠しても、ダークネスレインボウはその魔法に使われている魔力を感知するだろう。そうなると魔力を隠す魔法も必要になるので、おおまかにエネルギーの消耗（しょう）が倍になる。つまり三人分で三倍、魔力の隠蔽で更に倍、合計で六倍の魔力が必要になるという訳だ。結果的にゆりか一人なら半日続けられる事も、六倍のエネルギーが必要なら二時間が精々という事になるのだった。



「一日二時間の移動では、十日はかかってしまうのう。それでは逃げ切れん」

テイアが指折り計算してそう結論する。時間がかかり過ぎると駄目である事もこの問題を更に複雑にしていた。

「すみませぇん……もっとすごい魔法少女だったら良かったんですけど……」

ゆりかは相変わらず話の内容はよく分かっていなかったが、申し訳なさそうに肩を落とした。テイアや孝太郎の様子から、深刻な内容である事は感じ取っていたのだ。

「こまったのう……不安は残るが、魔法なしで行くしかないようじゃの」

「うーん……」

「すみませぇん……ほんとうにぃ……」

結局ここで再び議論が行き詰ってしまった訳だが、意外にもこの状況を打ち破ったのは孝太郎のひらめきだった。

「そうだ!!　ゆりか、ちょっと待て!!」

「ふぇ？」

「完全に体温を隠す必要はないんだ！　人間の体温のように見えなければ！　それでも無理かっ!?」

「その手があったか！　でかしたコータロー！」

テイアはこの時点で孝太郎の意図に気付き、大きな笑顔を覗かせた。ゆりかが二時間ももたないと言ったのはあくまで全ての熱を余さず隠蔽する場合の話だ。どこかの基地に侵入する際などに、防犯装置に引っ掛からない為にはそこまでの正確さが要求されるのだ。だが今回はそうではない。完全な隠蔽は必要なく、不完全なものでいい。森の中に住んでいる動物達と見分けがつかなければいいだけなのだ。すると必要な魔力も低減され、ダークネスレインボウにも感知されにくくなる筈だった。

「どういう事ですかぁ？」

ゆりかは話の前半を聞いていなかったので、ここでも首を傾げる。孝太郎はその両肩を掴んで分かり易く説明してやった。

「皇国軍は夜の間、上空から俺達の熱を探す。恐らく熱が見えるカメラやセンサーを使って森全体の熱の情報を集めて、人間が出す熱の範囲でふるいにかけて、俺達の位置を特定しようとするんだ。ここまでは分かるか？」

「はい、なんとか」

「じゃあ続きをいくぞ。……それでもし、俺達の出す熱が半分だったらどうだ？」

「それは……ふるいにかからない？」

「そうだ！　皇国軍は俺達を、その辺にいる犬や猫だと思うって寸法だ！」

「ああ！」

ぽむ

ゆりかは軽く両手を打ち合わせる。ようやくゆりかにも孝太郎の言葉の意味と、前半部分の会話の内容が分かった。きちんと話を把握すれば、ゆりかにもちゃんと分かる内容だっ

た。

「半分熱が漏れてもいいなら大丈夫だと思いますぅ。念の為、時々休憩はした方がいいかもしれませんけれどぉ」

熱を隠す魔法は、効果が完全に近付く程に加速度的に消費する魔力が大きくなる傾向がある。だから熱が漏れていいなら、魔力の消費量はかなり少なくなる。半分漏れていいなら、相当いい加減な魔法で問題ないだろう。精鋭のアークウィザードであるゆりかなら、半日もたせられる筈だった。

「よし、決まりじゃ！　夜を待って移動するぞ！」

「おう！」

「はいですぅ！」

こうして孝太郎達の脱出案がまとまった。今は孤立していて危険な状態ではあるが、仲間達と合流できる可能性は十分にあった。おかげで三人の表情と声は、落ちてきた当初よりも大分明るいものへと変わっていた。

一方その頃　十一月二十日（土）

オオヒメに乗っている者達にとって痛手だったのは、降下直前に皇国軍に存在を知られてしまった事だった。おかげで隠密裏にする筈だった降下は、不完全なものとなってしまった。結果的に大気圏を突破し減速が終了したタイミングで、皇国軍から攻撃を受ける羽目になってしまっていた。

『緊急警報だホー！　接近する戦闘機を四機捕捉したホー！』

『近くの基地からスクランブル発進した機体だホー！　恐らく周辺の基地からも発進している筈だから、すぐに増えると思うホー！』

「皆っ、何かに掴まれ！　少し荒っぽい操縦になる！」

キリハはそう言うなりオオヒメの推進器を全開にして、操縦桿を大きく倒した。真っ直ぐ飛んでいては狙い撃ちのいい的になる。そうさせない為の回避運動――複雑な軌道を描く飛行が必要だった。

『霊子力フィールド戦闘モードへ！　アクティブ空間歪曲場展開！　迎撃システム起動、電波妨害装置作動！　真希ちゃんも手伝ってくれだホー！』

「分かったわ！　グレーターミラージュ！」

回避運動に合わせて、各種の防御手段が講じられた。霊力と科学のバリアー、ミサイルの誘導を邪魔する妨害電波、ミサイルを撃ち落とす為の機関砲。そして真希は得意の幻覚

の魔法を使ってオオヒメの偽物を作り出した。多くの力で守られたオオヒメの防御は堅固だ。四機の戦闘機が相手でもすぐにやられてしまう心配はなかった。

「早苗、砲撃を頼む！」

「りょーかいっ！　ぎゃらくしー早苗ちゃんバスター、エネルギー充填率百二十ぱーせんと！」

『前と名前が違うホ』

「魂的には同じだからいいのだぁっ!!　いってこおおおおおいいいいいっ!!」

ドギュギュギュウンッ

早苗の気合い一閃、オオヒメは四発のビームを発射した。これはオオヒメの動力である霊子力ジェネレーターが吐き出す霊力と、早苗の霊力が混じり合った、霊力そのものを撃ち出したビームだ。おかげで早苗の意思で弾道を曲げる事が出来る。ビームは大きな弧を描いて、後方から接近してくる皇国軍の戦闘機に向かって飛んでいった。

『なっ、なんだっ!?』

『馬鹿なっ!?』

これに慌てたのが戦闘機のパイロット達だった。何かで反射させたのならともかく、自分から曲がって飛んでくるビームなど聞いた事がない。驚いた彼らは本能に従って大きく

旋回してビームを避けようとした。

「大丈夫だって。まだ当てないからっ♪」

早苗は鼻歌交じりにビームを誘導し、四発のビームで四機の戦闘機を追いかけ始める。その軌道はビームよりもミサイルに近く、そのくせミサイルに対する防御手段が通用しない。追い掛け回される事に業を煮やした戦闘機は、思い切った行動に出た。

「キリハ、焦れて撃ってくるみたい」

「分かった。そのまま続けてくれ」

「ほいほいー」

四機の戦闘機はそれぞれ二発ずつのミサイルを発射した。だがビームに追われながら発射したので、うち三発は見当違いの方向に飛び去っていった。オオヒメを追ってきたのは残りの五発。しかし事前に早苗からの警告があったので、キリハは慌てなかった。

「さて、誘導の方式はどれかな？」

キリハは操縦席のパネルを操作し、オオヒメにフレア――高熱を発する球体――を放出させた。同時に推進器の出力を落としつつ、オオヒメを大きく旋回させる。

「やはり光学誘導だったか」

するとミサイルはフレアを無視して、あくまでオオヒメを追ってきた。この事からキリハはミサイルの誘導方式が光学カメラを使ったものであると判断した。フレアを無視したので熱源誘導ではない。電波は妨害しているし、霊力なら早苗が操るビームに幾らか反応するだろうからだ。

「真希、爆発したふりは出来るだろうか？」

「ええ、その手の工作はした事があるから」

「では盛大にやってくれ」

「分かったわ、任せてちょうだい」

「クラン殿(どの)――」

「あなたの仰(おっしゃ)りたい事は分かっていますわ。お任せなさいな」

「ふふ、では頼む」

オオヒメはしばらくミサイルに追われながら飛び続けたが、最終的には逃げ切れずにミサイルが直撃(ちょくげき)した。

ズドオオオオオオオオオンッ

直撃したミサイルは爆発し、オオヒメの機体を破壊。これにより動力炉が誘爆して、非常に大きな爆発が起こった。遠くからでもそれと分かる、大爆発だった。

「早苗、向こうはどんな様子だ？」

「うまくいってるよ。やっつけたと思ったみたい」

「よし」

もちろんオオヒメの爆発は偽物だ。クランの発明品で本物のオオヒメを透明化させた後に、オオヒメを守っていた幻覚のオオヒメを大爆発させたのだ。

「でも急いでこの場を離れなくては。すぐにバレますわよ」

まだ安心は出来ない。クランが作った透明化の装置は自分が消える為のもので、そもそもここまで大きいものを透明にする事は想定していない。その為に効果は一時的なものでしかなく、しばらくすれば再び姿が現れてしまう。たとえそうでなくても、残骸がない事に気付かれればすぐに追跡が始まるだろう。

「心配ない、一旦あそこへ逃げ込む」

だがキリハの作戦はその問題まできちんと考慮されている。彼女が自信ありげな笑みを浮かべて指さした先には、大きな湖が広がっていた。

オオヒメは厳密には宇宙船ではなく、埴輪達の追加装備の集合体だ。埴輪達が蓄積した戦闘データを活かす為のものなので、彼らが行ける場所には全て行けるように設計されている。つまり宇宙や空中はもちろんの事、地中や水中でも行動が可能なのだ。もちろんその分だけ純粋な戦闘力は抑え気味になるから、同じ大きさの戦闘用兵器と戦うのは避けたい所だ。今回は敵が四機で、しかも増援も予想されていたので、キリハは交戦を避けて早

々に逃げた訳なのだった。

「どんな様子でしょうか？」

オオヒメの動きが止まったので、これまで後部の居住ユニットにいたエルファリアがコックピットへ姿を現した。やはりティアの行方（ゆくえ）が知れない状況では、じっとしてはいられなかった。

「ゆりかちゃん達は？」

エルファリアの横にはナナの姿もあった。彼女の場合は特にゆりかを心配している。事情はエルファリアと同じようなもので、友人でもあり弟子（で）でもある少女の行方は気になる所だった。

「とりあえず皇国軍を振り切って水中に逃れました。残念ながらティア殿達とは連絡が取れていません」

元々の計画では、氷塊のふりをして地上に降下した後、しばらく近くにある湖の中に隠れる事になっていた。皇国軍が怪しんで調査に来ても、彼らはオオヒメのデータを持っていないから、水中に隠れているという発想を持たない。それで逃げ切れる筈だった。

今回は降下前に宇宙船だとバレてしまった訳だが、水中に隠れられる事までは知られていない。キリハは危機に際して柔軟な発想で本来の計画を流用、撃破された幻覚で皇国軍を騙して無事に湖底に隠れる事に成功していた。

「そうですか……無事だといいのですが……」

エルファリアは安堵とも落胆ともつかない微妙な表情で息をつく。その心中は察するに余りある。キリハ達も連絡が取れない三人の事は気になって仕方がないのだ。

「何とか三人の無事を確認できればいいんだけど」

ナナは上を見ながらそう呟く。彼女の視線の先には天井しかないが、その向こう側にある湖、そしてその更に向こう側にいる皇国軍に意識が向いていた。

「……今通信機を使うと、あっという間に皇国軍に発見されてしまいますわね」

恐らく通信をするだけならそう難しくはない。孝太郎達が落下した地点は大まかに分かっ

ているから、指向性の強い電波や重力波を使えばいい。問題はそれをすると皇国軍に見付かってしまうという事だ。見付からないようにどうやって通信するかという事が現時点の課題だった。

「あの、ちょっといいでしょうか」

難しい問題にぶつかり全員が考え込み、一瞬コックピットが静寂に包まれた時、晴海が手を上げて発言を求めた。すると自然に全員の視線が晴海へ向く。普段ならそれで少し気圧されてしまう晴海だが、今は緊急時。強い感情を背景にそのまま発言を続けた。

「シグナルティンから里見君の気配が伝わって来ています。無事なのは確かです」

晴海は微弱な魔力で常にシグナルティンと繋がっている。おかげで特に何もしなくても

シグナルティンの状態を知る事が出来る。現在のシグナルティンは大気圏への突入時に多くの魔力を消耗したものの、通常の防御を行っている。それは孝太郎が無事だという証拠だった。

「それは確かですか、ハルミさん!?」

「はい、陛下。里見君が無事なので、残る二人もそうなんじゃないかと思います」

そして回復の魔力が作動したりもしていないので、残る二人も大きな怪我がないらしい事が分かる。即死していなければ、だが。

「そうですか……ひとまず安心しました」

晴海の言葉を聞き、エルファリアは表情を緩めた。それに前後してコックピットに漂っている空気も僅かに緩む。大きな力を持ってはいても、やはり彼女達は普通の少女。仲間達が無事らしいと分かった事は気分的に大きなプラスだった。

「桜庭先輩、里見君の剣を使って話は出来ないんですか？」

そして安堵した事で頭が働き始める。静香はシグナルテインの魔力を使って、孝太郎と話をすればいいのではないかと考えていた。

「出来る出来ないで言えば出来るんですけど……やっていいかで言うとやらない方がいい気がします」

晴海はもどかしげに首を横に振った。彼女自身、出来るならすぐに連絡をしたい。しかしそれをしてはいけない理由があった。

「それはどうしてなんですか？」

「静香、今シグナルティンの魔力を強くすれば、我々や孝太郎達の位置をダークネスレインボウに伝える事になる。あの男が関与（かん）している以上、その可能性は考慮しなければならない」

キリハが言うあの男とはエウレクシスの事だ。宇宙で遭遇した戦闘機に霊子力センサーが装備されていた以上、エウレクシスの関与は間違いない。そうなると一緒に姿を消したダークネスレインボウがいる可能性は否定出来なかった。

「藍華さん、ダークネスレインボウ、上にやって来てると思う？」

「幹部級ではないかもしれませんけど、魔力を探知出来るくらいの連中は来ていると思いますよ」

晴海とシグナルティンを繋げている魔力は微弱なものなので、これだけならすぐ近くに来られでもしない限りダークネスレインボゥに気付かれる心配はない。だが魔力を強めて双方向の通信を行うと流石に気付かれる。その辺りの問題は電波や重力波の通信と事情は同じだった。

「あたしが行ってこようか？」

電波が駄目、重力波が駄目、魔力も駄目。そうなると残るは霊力だ。早苗は自分が幽体離脱して三人を捜しに行くのが一番手っ取り早いと考えていた。

「いや、それは最後の手段にしよう。汝は霊力が強過ぎる」

しかしこれにもキリハは首を横に振った。霊子力センサーが敵の手にある以上、早苗ほ

どの霊力の持ち主が霊体だけになって空を飛び回れば、察知される可能性が少なくなかった。

「じゃあどうするのキリハ!?　何も出来ないじゃない!!」

「まずは水中を移動してこの場を離れる。近くで皇国軍がうろうろしている状態では何も出来ないからな」

キリハがオオヒメの降下地点をこの湖の傍に設定したのは、湖がとても大きいからでもあった。水中に隠れて移動すれば安全に降下地点から離れられる。孝太郎達が心配なのは山々だが、何をするにしてもまずは皇国軍から完全に逃げ切る事が第一だった。

フォルトーゼ皇国軍は地球において皇帝エルファリアの一派に敗北した。それは装備や戦闘力だけでなく、戦略的な意味においてもだった。

皇国軍を地球へ派遣したヴァンダリオンの考えでは、派兵はエルファリアを捕える事だけが目的ではなく、彼女に反撃させて皇国軍の兵士を殺させる事も目的の一つだった。そ

れによってエルファリアの支持を削ごうというのだ。しかし結果は敵味方双方が被害者ゼロ。これにより予期せずエルファリア派の実力と気高さを証明してしまった格好となり、エルファリアの支持率はむしろ上がっていた。

もちろんヴァンダリオンはこの件に関しても情報操作を試みようとした。だが注目度の高さゆえに口コミでの情報拡散が異常に速く、手遅れの状態だった。またフォルトーゼでは表現の自由が保障されているので、個人個人で共有される情報に対しては情報操作に限界があった。

この結果からすると、あらゆる意味においてエルファリアの完勝で、ヴァンダリオンは彼女の手玉に取られたと言えるだろう。そしてこの結果ゆえに、プライドが高いヴァンダリオンはエウレクシスと手を組むという決断を下した。ヴァンダリオンの心中では激しい怒りが燃え滾っている事は想像に難くない。加えてエウレクシスのような若者に頭を下げる事も屈辱以外の何物でもないだろう。

これは地球に関する情報をリークしたエゥレクシスの目論み通りの展開なのだが、実際に面と向かった時にヴァンダリオンがどのような反応を示すかまでは読み切れていない。その事がヴァンダリオンに呼び出されて会談――あるいは商談――に向かったエゥレクシスにとって最大の懸念事項だった。そして同時に、エゥレクシスを緊張させる原因でもあった。

「よく来てくれたな、エゥレクシス君」

そんなエゥレクシスの思いをよそに、豪華なサロンで彼を出迎えたヴァンダリオンは笑顔だった。その傍には側近のグラナードの姿もある。彼もまたエゥレクシスの登場を歓迎しており、穏やかな笑みを浮かべていた。会談に使われるこのサロンにはヴァンダリオンとグラナードしかいない。その事からエゥレクシスが信用されており、また会談が込み入った内容になる事が窺われた。

「このような若輩者を御自ら歓迎して頂き、大変光栄に思います、ヴァンダリオン卿」

エウレクシスは戸口に立ったまま頭を下げた。エウレクシスもまた笑顔を崩してはいないが、内心では酷く緊張していた。ここでのヴァンダリオンの言動は、エウレクシスの未来を大きく左右するから、あらゆる事に細心の注意が必要だった。

「汝には借りがある。エルファリア派の実力を早々に教えてくれた借りがな」

「そう言って頂けると、お伝えした甲斐がありました」

エウレクシスは世間知らずの呑気な若社長のように笑いながら、ヴァンダリオンの様子や言葉を慎重に吟味する。

――思っていたよりも遥かに恐ろしい人間のようだな……このヴァンダリオンという男は……。

エゥレクシスはこの時点で、ヴァンダリオンを高く評価していた。恐れていると言ってもいいだろう。ヴァンダリオンが馬鹿ではないなら、エゥレクシスが情報をリークした意図に気付いているだろう。ちゃんとした情報を持っていても負けるから、エゥレクシス達と手を組まざるを得ない――そんなエゥレクシスの意図に気付いていながら、ヴァンダリオンは一向に余裕のある態度を崩さない。つまりヴァンダリオンは、自分の感情をきっちりとコントロールし、冷徹に損得勘定が出来る男なのだ。

――期待通りではあるが、易々と思い通りにはさせて貰えないだろうな……油断をしているとどんな目に遭うか……。

エウレクシスは自身の目的の為にヴァンダリオンと手を組もうとしていた。だがヴァンダリオンと直接会った事で、上手く立ち回らないと一方的に利用されて終わるという気がし始めている。そうならないよう、エウレクシスは改めて気持ちを引き締めた。

「そんな所に突っ立っていてはゆっくりと話も出来んだろう。せっかくグラナードが茶の支度をしている事でもあるし、こちらへ参られよ」

「はっ……それでは失礼致します」

ヴァンダリオンの言葉に従い、エウレクシスは用意された席へ向かう。サロンの分厚いカーペットは柔らかく、一歩踏み出すごとに足が軽く沈み込む。

――さて、問題はここからだ……。

しかし今のエウレクシスにはカーペットの柔らかさを感じている余裕はない。友好的に振る舞っているヴァンダリオンとグラナードだが、それはあくまで見かけ上の話でしかない。実際は口を開けた猛獣の前に立っているに等しいだろう。だからエウレクシスは二匹の猛獣の反応を僅かでも見逃さぬよう、全神経を集中させた。

エウレクシスがヴァンダリオンとトップ会談を行っている間に、双方の部下が実務級の協議を行っていた。トップの会談が難航しても、双方にとって意味のある事は多い。単純な情報ラインを確立したり、緊急時の対応を決めたり、共有した方がいい情報や物資のやりとりといったものだ。

そして交渉を行う部下達に紛れて独自の任務に当たっていたのがダークネスレインボウの魔法少女達だった。彼女達は魔法のおかげで変装や情報収集が得意だ。魔法で次々と姿を変えながら本来なら立ち入る事が出来ない場所まであっさりと侵入、ヴァンダリオン側の多くの情報を盗み出した。また盗聴や催眠術、心を直接読む事だって出来る。彼女達はヴァンダリオン側もやっている情報収集をさりげなく邪魔しながら、一方的に大量の情報を持ち帰った。やはり魔法という未知の技術は、ここでも計り知れないアドバンテージを生み出していた。

「それで、ヴァンダリオンとグラナードはどんな感じだったの？」

ダークネスレインボゥを率いて情報収集に当たっていた真耶は、会談を終えたばかりのエゥレクシスに再会すると楽しそうに笑いかけた。彼女は命懸けの任務に当たっていた訳だが、笑う真耶からはそんな雰囲気は微塵も感じられない。まるで遊びに行ってきたと言わんばかりの雰囲気だった。

「いやはや、恐ろしい人達だったよ。少しでも気を抜けば、喰い殺されていたんじゃないかな」

「あなたにそう言わせるとなると、よほどの相手ね」

対するエウレクシスの方は真耶とは正反対だった。真耶の顔を見た途端、それまで隠していた疲労と緊張が表出する。ただ二人の人間と話をしてきただけの筈なのに、エウレクシスは戦場を駆け抜けたかのように疲れ果てていた。もちろんこれには、控室として割り当てられた部屋に二人きりである安心感も影響していたのだが。

「何とか対等の協力態勢は結んで来たつもりだけど……君達が居なかったらと思うとゾッとする。私は幸運だよ」

エウレクシスとヴァンダリオンの会談は平和裏に終了した。今後は両陣営が密に協力し合う事に決まった。条件も対等と言っていいくらいのものを引き出している。ビジネスマンとしての面目躍如だろう。だがエウレクシスは楽観視していない。会談が平和そうだったのも、対等な条件も、恐らくは見た目だけだ。早急に手を打たない事には急激に不利な状況に陥るだろう。その意味においてはダークネスレインボウの存在はとても心強かった。いかにヴァンダリオンといえど、魔法に対する対策はない。実際、今もエウレクシスは魔

法で守られている。おかげでヴァンダリオン側の建物の中にいても、盗聴されたりする心配はなかった。

「妙に持ち上げてくれるわね？」

「正直な感想だよ。君も彼らに会えば分かるだろう」

「随分弱気ね。以前のあなたは一人で彼らと渡り合うつもりでいたんでしょう？」

「今はそうならなくてよかったと思っているよ、本気でね」

エウレクシスはいつになく真剣だった。お世辞でも、わざと持ち上げてからかっている

のでもない。エウレクシスはヴァンダリオンと対等に渡り合う為に本気で真耶とダークネスレインボゥを必要としている。だから真耶は、エウレクシスの様子から間接的にヴァンダリオンの恐ろしさを感じ取っていた。そしてだからこそ、彼女にはエウレクシスに伝えるべき事があった。

「あなたの話を聞くまでは半信半疑だったけれど……多分、間違いないから今のうちに言っておくわ」

「何があったんだい？」

真耶の雰囲気の変化を察して、エウレクシスの表情が鋭さを取り戻す。その顔こそが、真耶が選んだパートナーの顔だ。彼女はそれに満足すると、続きを話し始めた。

「彼らは惑星『アライア』にいるエルファリア派の人々を、周辺の住民ごとまとめて始末するつもりでいるわ」

「なんだってっ!?」

エウレクシスは驚きの余りその場に立ち上がる。エウレクシスはヴァンダリオン達を恐ろしい相手だとは思っていたが、そこまでやるとは思っていなかったのだ。

「ここのコンピューターの中にあったデータと、ヴァンダリオンの部下達の言動から、その可能性が見え隠れしていたのよ。そしてあなたが口にしたヴァンダリオン達の人物像が決め手ね。恐らく間違いないわ」

真耶の表情は厳しい。彼女もまた、そこまでの事はしないだろうと考えていたのだ。し

かしヴァンダリオンの人物像がエゥレクシスの言う通りなら、実行を躊躇ったりはしないだろうというのが真耶の結論だった。

「馬鹿げた事を……」

「連中には美学がないわ。やる事がちぐはぐで、調和が取れていない」

エゥレクシスと真耶は、邪悪な手段を使う事を躊躇わない。しかしそれは無制限に使うという意味ではない。エゥレクシスは理想の社会を実現するという信念に従って行動しているから、住民に対する被害は最小限に留めたいと考えている。真耶もフォルサリアの人間を堂々とフォルトーゼに帰還させる事を考えているので、無人の荒野を作る事は望んでいない。

「結局はタユマの同類という事かしらね……」

「ちょっと違うな。どちらかというと徹底した実利主義者だろうね。放っておくとまずいのは同じだと思うんだが」

理想の社会にも、帰還させる国にも、人間は必要だ。それゆえ二人は、ヴァンダリオン達の考え方を受け入れられない。二人の考えでは、悪には悪なりの咲き方があるのだった。

父と娘　十一月二十日（土）

オオヒメの降下地点の周辺には、近隣の基地からスクランブル発進した皇国軍の戦闘機が集まってきていた。しかしやはり爆発を目くらましにして少し先にある湖の中へ逃げ込んだ事が幸いしており、オオヒメが見付かる事はなかった。宇宙船が水中に逃げるという発想はないし、そもそも爆発したと考えている。仮に爆発が幻だと気付いても、少し離れた場所にある湖の中の捜索はかなり後になるだろう。そしてその頃には既に、オオヒメはそこにはいない。とっくに遠くへ逃げ去っているに違いなかった。

「ねーキリハー、この先どうするの？」

しばらく霊波で敵を見付けるレーダー役をしていた早苗は、だらりとシートに寄りかかっ

て身体から力を抜いた。オオヒメは無事に皇国軍の追手を振り切った。周囲に追っ手の気配は感じられない。ようやく少し気を抜いていい状況になっていた。

「孝太郎達を捜しに行きたい所だが、この状況ではそうもいくまい。予定通りエルファリア派の拠点を目指す」

キリハも少し安堵しているようで、その表情は僅かに緩んでいる。大気圏突入は初めての経験だから、普通はそうなるだろう。

「それでいいの？」

「ああ。こちらを見付けられないのは孝太郎達も同じだ。きっと向こうも手近なエルファリア派の拠点を目指すだろう」

「そうしたら連絡を取って貰えるね」

「そういう事だ」

キリハの考えでは、孝太郎達を見付ける最速の手段は、予定通りにエルファリア派の拠点へ向かう事だった。孝太郎達とは大分距離が離れているので、直接捜しに行ったり、通信をしたりするのは危険だ。皇国軍が警戒態勢を敷いているので、あっという間に取り囲まれてしまうだろうからだ。お互いにそうした手段が使えない以上、次善の策は何処でもいいのでエルファリア派の拠点に合流する事だ。エルファリア派の拠点同士は秘密の通信網で繋がれているので、双方が辿り着ければ無事を確認できる筈だった。

「そういう事でしたら、わたくしの出番ですね」

ここでオペレーター席にいたルースが話に加わってくる。エルファリア派の拠点についてはルースが一番詳しい。フォルトーゼの事なのはもちろんだが、彼女にはもう一つこの場所に詳しい理由があった。

「ようやくルースパパに会えるね！」

「はい。元気でいて下さればいいのですが」

彼女らが向かおうとしているのは、惑星『アライア』におけるエルファリア派最大の拠点だ。この拠点はパルドムシーハ家の領地――これはフォルトーゼ本星にあるものとは別に宇宙時代になってから追加で獲得した飛び地だ――にあるので、内密に大型の拠点を作る事が出来た。その指揮官はルースの父親であるパルドムシーハ卿。つまり拠点に向

かえば、ルースは家族と再会する事が出来るのだった。

「ねえねえ、ルースパパってどんな人なの？」

「そうですね……わたくしと同じで、生真面目なタイプだと思います」

「その辺は遺伝だね？」

「はい。でも年の功でしょうか、柔軟さも持ち合わせています。エルファリア陛下に丸め込まれないくらいに」

パルドムシーハ卿は二千年以上連綿と続く伝統を受け継いだ、典型的なパルドムシーハ

の騎士だった。皇家への高い忠誠、質実剛健、文武両道。フォルトーゼにおいては、青騎士という例外を除けば、騎士の中の騎士とはパルドムシーハの騎士を指す。彼はその中でも傑出して評価が高い人物だった。

「……私は彼が嫌いです」

一緒に話を聞いていたエルファリアが膨れっ面を作る。それは一児の母とは思えない、まるで子供のような顔だった。

実はパルドムシーハ卿の評価が高い理由は、エルファリアに騙されない優れた知性と忍耐力を持っている為だった。女狐と名高いエルファリアの口撃をかわし、注意深く弱点を探して反撃する事が出来るのは、現時点ではパルドムシーハ卿ただ一人。困った時のパルドムシーハが合言葉だった。

「……つまる所、皇帝が嫌いだと公言して何ら問題がない程、信頼されている人物という事か」

「そういう事になりますわね」

キリハは楽しそうに笑う。その横にいるクランも同様だった。

「笑い事ではありませんよ！　まったく……」

パルドムシーハ卿を信頼しているからこそ、エルファリアは『嫌い』だと公言する事が出来る。この辺りは親戚のおじさんに対する感情に近いものだろう。年齢的にもそのような関係だった。こうしたエルファリアとパルドムシーハ卿の関係はメディアを通じて広く

知られており、両者が愛される一因となっていた。

オオヒメは降下した地点から湖へ逃れ、水中を数十キロ進んだ。そこから地上に出て、皇国軍に見付からないよう細心の注意を払いながら更に進む事数十キロ。高い山と深い谷

が幾つも並んでいるあたりに、エルファリア派の拠点があった。拠点は地下に作られており、入り口は入り組んだ渓谷を利用して巧妙に隠されている。よほど正確な情報を持っていない限り、この場所を発見するのは困難だった。

拠点内の作りは『青騎士』とよく似ており、曲線が多用された独特の滑らかなデザインをしている。しかし所々無骨な鋼材が剥き出しになっている部分もあった。これは急ごしらえゆえに、強度的な問題がない部分がそのままになっているのだ。その辺りは通常の皇国軍の施設とは雰囲気が異なる部分だった。

「陛下！　よくぞ御無事で！」

エルファリアがオオヒメから降り立ったのを確認すると、パルドムシーハ卿は全速力で彼女に駆け寄った。まるで母親に駆け寄る子供、あるいは家出した娘を迎える父親のような勢いだった。

「苦労をかけましたね、パルドムシーハ。少し白髪が増えましたか？」

「ははは、こちらでも色々とありましたから。陛下はお変わりないようですな――というよりも以前よりもお元気そうですな？」

「こちらでも色々あったのですよ。詳しい話はまた後で」

エルファリアが元気なのは青騎士をフォルトーゼへ連れ帰ったとか、地球暮らしが思いの外楽しかったとか、様々な要因がある。しかし他人の目が多いこの場所でそれを明かす訳にはいかなかったし、今は気にしなければならない事が他にあった。

「そうですな。聞いた所によるとティアミリス殿下が行方不明とか？」

「まずはその話から始めましょう。おっと、その前にっ」

エルファリアは突然、近くにいた少女の手を思い切り引いて自分の前に立たせ、強引にパルドムシーハ卿と向かい合わせた。

「きゃあぁっ!?　へ、陛下っ!?」

エルファリアに引き寄せられた少女はルースだった。パルドムシーハ卿とルース、ずっと離れ離れだった親娘が至近距離で向かい合っていた。

「一応やるべき事を済ませなさい。お互い気が散って仕方がないでしょう？」

エルファリアは込み入った話になる前に、二人に話をさせてやるつもりだった。ルースが父親を気にしつつも話しかけられずにいる事や、パルドムシーハ卿が立場上ルースとは話せずにいる事に気付いていたのだ。

「相変わらずやり口が強引でいらっしゃいますなぁ……しかし感謝致します」

パルドムシーハ卿とルースは親娘揃って深々と頭を下げた後、改めて向かい合った。

「お父様、ただいま帰りました」

「久しぶりだな、ルース。少し背が伸びたか？」

「少しだけですけれど」

ルースとパルドムシーハ卿の関係は良好だ。おかげでしばらく離れていたギャップをものともせず、普段通りの笑顔で言葉を交わしていた。むしろ離れていた事がその関係を後押ししているようだった。

「そのせいか、少し大人びた顔になったような気がするよ。少しずつ大人の女性になっていくのだな……父親としては寂しいような、嬉しいようなという所か」

パルドムシーハ卿は愛する娘を眩しそうに見つめていた。今のルースは彼の記憶の中にある数ヶ月前のルースとは少しだけ印象が違っている。ルースは大人の女性に向かって、

日々成長しているのだ。だから彼には自分を残して娘だけがどんどん成長していくように感じられ、成長を喜びつつも幼い娘のままでいて欲しいという、父親特有の複雑な感情を抱えていた。

「大人の女性だなんて……まだまだです」

親馬鹿を多分に含むとはいえ、ルースも成長を褒められて悪い気はしない。しかし照れ臭かったし、まだまだ父親に甘えたい年頃でもある。ルースは顔を赤らめつつ、首を横に振った。

「やはり女の子は恋をすると変わるのだな」

パルドムシーハ卿は腕組みをしながら何度となく繰り返し頷く。これで得心が行ったと

言いたげだった。そんな父親の様子に慌(あわ)てたのがルースだった。

「おっ、お父様ぁっ!?」

ルースは顔を真っ赤に染め、いつになく慌てた様子で悲鳴じみた声を上げた。そしてきょろきょろと周囲を見回し、周囲の視線を気にし始める。

「その反応、本当に好きな男がいるんだな」

そんな娘の様子を見て、パルドムシーハ卿はにやりと笑う。実は以前の婚(こん)約騒動の時から、何となく娘には好きになった男がいるのではないかと思っていたのだ。

「し、しまった!?」

「そうかそうか、真面目一辺倒だったお前がなぁ……」

ルースは女性の身でありながら、パルドムシーハの跡取りに相応しく成長した。皇家に固く忠誠を誓い、正義を貫く騎士の中の騎士。しかしそれは一人の女性としては不幸であるかもしれない。真面目過ぎるルースは自分の幸せを追求しようとせず、皇家の盾、パルドムシーハの跡取りとしての役目を果たす事に忠実だった。パルドムシーハ卿はこれまでその事に少なからず心を痛めてきた。不幸な結果に終わったが、エウレクシスとの縁談を進めようとした事も奥手な彼女を思いやっての事だった。

そんなルースがどうやら恋をしたらしい。心配事が解決しそうな気配に、パルドムシーハ卿はすっかり上機嫌だった。普段は鋼の忠誠心と質実剛健が服を着て歩いているような男なのだが、この時ばかりは親馬鹿そのものだった。

「どんな男なんだ？　いやいや、お前が好きになった男なら確かだろうから、交際を止めるつもりはないぞ！　ただ純粋な好奇心だ。それで、どんな男なんだ!?　私くらいに強い男かっ!?」

「そ、そっ、そうじゃなくてぇっ、ええとぉ、そのぉ……そうだっ、こんな場所でいきなりそんな話はしないで下さいっ!!」

対するルースはすっかりペースを乱されてしまっていた。ルースは表裏がない性格をしているが、それでも世間体というものはある。こんな沢山の人が聞いている場所で、好きな男の話などもってのほかだった。

「ふむ……否定はしないのだな？」

「真面目にやって下さい!!」

「ああすまん。ティアミリス皇女殿下の行方が分からないのであったな」

だがルースの厳しい反応に少しだけ冷静さを取り戻したパルドムシーハ卿は、自分を戒めて普段の顔に戻った。皇女の行方については、彼自身とても気になっていた。そんな父親の様子を見たルースも、何とか普段の調子を取り戻した。

「……護衛の騎士が一緒なので、御無事であるらしい事は分かっているのですが」

「確かなのか？」

「はい。誰よりも間違いのないかたです」

ルースは自信を持って太鼓判を押した。どんな状況かは分からないものの、孝太郎がテイアを守っているという一点に関しては絶対の自信があった。

「……なるほどなぁ……その護衛の騎士かぁ……」

するとパルドムシーハ卿は何故か納得したように繰り返し頷いた。

「はい？」

「お前が好きになった男の事だ。妙に誇らしげに言うものだから、ピンときてな」

パルドムシーハ卿はルースの様子から、彼女がその護衛の騎士に対して絶大な信頼を置いている事を感じ取っていた。真面目で頑固なルースがティアを他人に任せて、しかも安心しているという事はただ事ではないのだ。

「考えてみれば、皇家の盾を自認するお前が認めた男だ。お前と同等かそれ以上に信頼できる男でないと殿下を安心して任せられまい。そして同じく、好きにはなるまい。そうかそうか、そういう事だったのか」

「もっ、もういい加減にして下さいっ!!」

「いい男を見付けたなぁ、ルースゥ。うんうん、よかったよかった」

「本当に怒りますよぉっ、お父様ぁっ!!」

父親と再会して以降、ルースのペースは狂いっぱなしだった。そのおかげで遠く離れていた親娘の距離があっという間に縮まった訳なのだが、彼女がその事に気付いた様子はない。ルースがその事に気付くのはもう少し先の事だ。だから彼女はもう少しだけ、居心地の悪い時間を過ごす事になるのだった。

オオヒメから降りた仲間達がルースの災難を微笑ましい気持ちで見つめる中、一人だけそこに目を向けていない少女がいた。かつて悪の魔法少女であった真希だった。

「……ここがフォルトーゼ……真なる故郷……」

オオヒメから降りて拠点の床を踏んだ時、真希は他の少女達とは異なる感情を抱いた。真希が生まれたフォルサリア魔法王国は、いつか真なる故郷――フォルトーゼへ帰還する事を目標にしていた。建国から時間が流れたせいでその感情はかつてほとではないもの

の、その事はフォルサリアの人間の心の底に漠然とした願望として刻まれている。それが遂に果たされた。惑星レベルで見ればフォルトーゼ本星は遠いが、ここは紛れもなく神聖フォルトーゼ銀河皇国だった。

「死なずに来れてしまったわね、ネイ――いいえ、真希さん」

「ナナ……さん……」

だが一人だけ、そんな真希の気持ちが理解できる人物がいた。それは真希と同じくフォルサリア魔法王国出身のナナだった。

「なんだか不思議な感じがします」

「分かる気がするわ。ふふ……」

フォルサリア魔法王国には激しい戦いの最中にしばしば使われる独特の決まり文句がある。それは『死して故郷の地へ帰るがいい』というものだった。かつて真希も孝太郎に向かって投げかけた事がある。意味は『絶対にやっつけてやる』くらいのものだが、そこには真なる故郷への望郷の念が滲んでいる。現実では帰れなくても、死ねば帰れるだろうという意味も込められているのだった。

彼女らはそういう感じ方をしているというのに、実際に真なる故郷へ辿り着いてしまった。憧れるだけだった夢の大地に、本当に立っている。まるで夢の中へ放り込まれたかのような。あるいは夢が現実に現れたかのような。その不思議な感覚を、言葉にするのはとても難しかった。

「真耶達も同じ事を感じているのかしら」

ナナはオオヒメが着陸したデッキを数歩歩き、まだ閉じられていない外へ通じるメインゲートから空を見上げる。そこには太陽の光を浴びて美しく輝く、フォルトーゼ本星の姿があった。

「そう思います。真耶様達はもう、フォルトーゼ本星に行ったでしょうから」

真希もナナの隣へ並び、一緒にフォルトーゼ本星の姿を見上げる。そしてそこにいるであろう真耶を思う。ずっと師事してきた真希だから、今の真耶が何を思っているのかはおぼろげに想像がついていた。

「そしてこれまで以上にやる気になっている、か」

「はい。こちらに基盤を築き勢力を拡大、その後フォルサリアを平定し、改めてフォルトーゼに堂々と帰還する。そういう筋書きを思い描いているのでしょう」

真耶はプライドが非常に高い。だからエウレクシスに保護されてのフォルトーゼ帰還など最初から考えていない。あくまで彼とは対等な関係を保ち、フォルサリアを完全に支配した後に、フォルトーゼの同盟者として堂々と帰還する筈だ。そして帰還の準備段階としてフォルトーゼを訪れ、故郷の大地を踏み締めた今、真耶がその意志を強めたであろう事は想像に難くなかった。

「侮れないわね」

「はい。これまでとは本質的に異なる敵になっていると思います。今の真耶様達は具体的

なゴールを知っているのですから」

ナナがこれまで明示を避けていた敵という言葉。真希はそれを自分から口にしていた。そしてその事はとても大事な事だから、ナナは改めてそれを確認した。

「……敵、でいいのね？」

そんなナナの探るような言葉に、真希はきっぱりと首を縦に振った。

「はい」

真希はもうずっと前にその覚悟を固めていた。

「努力すれば、真耶様達とは分かり合う事が出来るでしょう。一時的に共に歩む事も出来るかもしれません。ですが――」

「――最後の最後で、違う道を選ぶ？」

「はい。私達と真耶様達では、一番大切にしているものが違います。だから一番最後の選択が、どうしても違うものになってしまうんです」

真希が求めているものは人同士の繋がり。それに対してダークネスレインボウは基本的に自由や解放を求めている。究極的には人と人との繋がりやしがらみからも解放を求めるから、どうしても真希とは相容れない。残念ながら調和と自由は、最終的な局面においては両立が難しいのだった。心のままに戦う事を求めるクリムゾンを、友情では繋ぎ止めら

れなかったように。

「辛(つら)い戦いになるわね」

「覚悟の上です。それに……今の私は一人ではありません。ゆりかやみんなが一緒ですから」

「なるほど、そういう訳だったの」

ナナは納得がいったというような雰囲気で笑う。

「何がですか？」

「いえね、この間あなたの戦いぶりを見た時にね、私と戦っていた頃より遥かに強くなっていたものだから、なんでなのかなってずっと不思議だったのよ」

かつての真希は常に諦めのようなものを抱えていた。今の真希にはそれがない。決して諦めない強靭な意志を身に付けていた。魔法とは意志の力に直結しているから、今の真希はかつてよりも遥かに強い。何故そうなったのか――ナナは先程の真希の言葉によってその理由を理解した。

「……守るべきものが手に入ったのね」

「はい、絶対に守り切ります」

真希はきっぱりと頷いた。何を守らねばならないのか、その為に何をすればいいのか、今の真希にははっきりと分かっている。そこには少しの迷いもない。敵が真耶であろうとクリムゾンであろうと、戦い抜く覚悟だった。ナナはそんな真希の決意を感じ取り、どうやら心配する必要などなかったようだと心の中で苦笑した。

「ところで真希さん」

「なんでしょう？」

「この騒ぎが全て終わったら、レインボゥになる気はない？」

「私が!?」

「ええ」

かつての真希は藍色一色の虹だった。しかし成長を遂げた今、真希は多くの色を抱えた本物の虹になった。だからナナは思う。真希ならその美しい虹を守れるだろう、と。

「冗談ですよね？」

「いいえ。今のあなたならきっとなれるわ。ゆりかちゃんに負けないくらい素敵な、虹色の魔法使いに」

「……そうだと、いいんですが……」

二人の視線の先にはフォルトーゼ本星が浮かんでいる。そしてその周りを囲うように、美しい虹がアーチを描いていた。

関所にて　十一月二十一日（日）

オオヒメがエルファリア派の拠点に辿り着いても、孝太郎達は未だに森の中にいた。やはりイレギュラーで森の中へ落ちた事と、徒歩で移動しなければならない事が大きく影響していた。

「ねぇねぇ、里見さぁん」

「なんだ？」

「あそこで何か動きませんでしたかぁ？」

「……またそれか」

「だぁってぇ～～！」

孝太郎とゆりか、ティアの三人が移動に使える時間は夜間に限られる。そして夜の森はゆりかにとって苦手な場所だ。物陰から何かが襲ってくるかもしれない――ゆりかはずっとその事に怯えていた。

「お前、気合いが抜けていると本当に駄目な奴だな」

「そんな事言ったって、怖いものは怖いんですよ！」

「わっ！」

そんなゆりかの背後からティアが大声で脅かす。

「きゃああ――――もがもごもごぉぉっ！」

途端にゆりかが悲鳴を上げはじめ、孝太郎は慌てて彼女の口を塞いだ。

「ティア、状況を考えろ！　敵がいたらどうするんだ！」

「ちゃんと分かっておる、センサーで周囲を調べてからやった。問題はない」

「もごぁぁぁっ、もがっ、もがあぁぁぁぁぁぁぁっ！」

「だからといってこのタイミングでやる事か！」

「多少ショックを与えた方が落ち着くのではないかと思うてな」

「こいつには逆効果だ！」

「も、もが……ふげ……」

「……静かになったようじゃのう」

「わー、ゆりかー!!　息をしろー!!」

ゆりかには災難だが、実は彼女がいつも通りに怯えている事は、孝太郎とテイアの役に

立っている。今は味方から孤立してしまって悪い状況にあるから、ともすれば気持ちが暗くなりがちだ。それをゆりかがどうでもいい事に怯える事で打ち消している。ムードメーカーと言い換えてもいいだろう。ただし三人ともその事に気付いていないのが、ゆりかの不幸だったのだが。

「……二人共お、わたしに対する思い遣りが足りないと思いますぅ！　人が本気で怖がってるっていうのにぃっ！」

騒動が一段落しても、ゆりかの怒りは収まらなかった。だがゆりかは怒り始めた事で恐怖を忘れ、普段通りの調子で歩いている。結果的にティアの目論み通りになったと言えるだろう。

「だから悪かったって。わざとじゃないんだ」

「そう思っているならぁ、もっとしっかり握って下さいぃ」

「分かった分かった、世話が焼ける奴め」

とはいえゆりかの怒りも鎮火傾向にある。お詫びを含めて、孝太郎がゆりかの手を引いてやっている為だった。おかげでゆりかの意識は先程の騒ぎから孝太郎の手の感触に移りつつあった。

「……えへへへえ……」

ゆりかは孝太郎の手を握っていると、先日その頬にキスをした事を思い出す。するとその時の感情が胸に蘇り、怒りはあっという間に覆い隠されていく。怒りの完全消滅は時

間の問題だった。

「……このっ」

ゴンッ

「なんだよ、藪から棒に」

「なんでもない」

「だったら何で蹴ったんだよ？」

「なんでもないと言うておろうが！」

ゴンゴンッ

そしてゆりかが抱えていた怒りは、何故かティアに移りつつある。それに気付いてきちんと対処してやるまで、孝太郎は何度もティアに蹴られる羽目になるのだった。

孝太郎の鎧とティアのコンバットドレスは大気圏への突入でエネルギーの大半と緊急用の推進剤を失ったものの、他の部分は機能している。突入時のダメージで警告が出ているものはあるが、停止しているものはない。おかげで空を飛んだりバリアーを張ったり出来ないという以外は、いつもとあまり変わらない。だから接近してくる敵の存在を教えてくれたのは、鎧とドレスのセンサーだった。

『警告、接近してくる熱源を発見。距離二百メートル。熱量から信頼度七十パーセントで野生の狼の群れであると推定』

この星の生態系は人工のものであるが、多少危険な生き物も存在している。肉食獣が存在していないと草食動物が増えすぎてしまい、結果的に自然が維持出来なくなるからだ。それを避ける為に、意図的に生態系の頂点が用意された。それが狼だった。狼には人里に近付くのは危険だと理解するだけの知能がある。おかげで人間と狼が衝突することはなかったが、それはあくまでお互いが縄張りを守った場合の話だ。孝太郎達は今、狼の縄張りの中にいる。攻撃されても文句は言えない状況にあった。

「ほ、ほらぁ、やっぱり何か居たじゃないですかぁ」

「しがみつくな。動けなくなるだろ」

「こわーい！」

ガッ

「ティア、お前まで何やってんだ！」

「冗談じゃて」

「狼には冗談は通じないぞ」

「分かっておる、分かっておる」

スタッ

「お前も離れろ、ゆりか」

「……ふぁ～い」

狼の存在に気付き最初は少々慌てた孝太郎達だったが、すぐに気を取り直して対策を練り始めた。その辺りは幾つもの戦いを潜り抜けた経験のおかげだろう。

「縄張りを荒らしてるのはこっちだからな……何とかやり過ごせないものかな」

早苗が孝太郎の中に書き込んでくれている霊能力が、狼の放つ殺気を感じ取っている。縄張りを荒らしている孝太郎達に怒っているのだ。孝太郎達はたまたま通りかかっただけで、野生のルールが分からないから結果として縄張りを荒らしてしまったに過ぎない。こ

こは戦いは避けたい所だった。

「どうすればぁ、わたし達を許してくれますかねぇ？」

ゆりかはそう言いながら闇の向こうに目を凝らす。距離があるので彼女の目には映っていないが、視線の先には間違いなく牙を剥いた狼がいる。ゆりかは怯えていた。

「急いで距離を取った方がいいだろうな」

「あまり慌てて逃げると、弱いと思って襲ってくるじゃろう」

「そうか？　どうしてそう思う？」

「わらわが狼ならそうするからじゃ」

「それは間違いないな」

「……そなた、言いたい事があるならはっきりと申せ」

「滅相もない」

「じゃあじゃあ、ゆっくり逃げればいいんですねぇ？」

「基本的にはそうじゃ。例外はあるがの」

「例えばどういう例外ですかぁ？」

「連中の腹が減っている時じゃな」

「ひいいいいいっ!!」

孝太郎達は狼との敵対を避け、ゆっくりと進路を変更した。すると狼達も進路を変更して、距離を置いたまま孝太郎達と並走し始める。すぐに襲い掛かってくる様子はなかったが、立ち去る気もないようだった。

「お互いに様子見という所じゃの」

「隠れたりしてやり過ごせないか？」

「そうしたいのは山々じゃが……相手は感覚に優れる獣じゃからのう」

「どうだ、ゆりか？」

この状況では、やはりゆりかの魔法に頼る事になる。武器を使ったりすればどうしても目立ってしまうからだった。

「やろうと思えばやり過ごす事は出来るんですけれどぉ、そうすると沢山魔力を使う事に

なりますからぁ」

「そうすると今度はダークネスレインボウか」

「この状況では悩(なや)ましい問題じゃの」

狼に追われている状態はすぐに終わりにしたい。しかし下手に魔法を使うとダークネスレインボウを誘(おび)き寄せてしまう。なかなか難しい状況だった。

『ガルルルルルウウウウウッ、ガウガウガウッ!!』

そんな時だった。何故か突然、闇の向こう側にいる狼達が騒ぎ出した。それはまるで喧

嘩でも始めたかのような激しさだった。

「何が起きた!?」

孝太郎は最初、狼達が襲ってきたのだと考えた。この状況では当然だろう。だが狼達の声は一向に近付いて来ない。距離を保ったまま、大騒ぎを続けていた。その答えをくれたのは鎧の人工知能だった。

『警告、敵機接近。信頼度九十五パーセントで小型の偵察用無人機と推定』

狼達が騒ぎ始めたのは、見知らぬ機械の塊が接近してきた為だった。機械の塊――小型の無人偵察機は孝太郎達とは違って、無造作に狼達に接近した。おかげで狼達は近付いてくる気配がない孝太郎達の事を一旦棚上げし、近付いてくる偵察機にターゲットを切り

替えたのだった。

「そうか、それで狼達は――」

「コータロー、ユリカッ、すぐに隠れるぞっ!!」

「分かった！」

「はっ、はいですぅっ!!」

孝太郎達は大慌てで倒木の下に隠れた。そのすぐ後、森の中から無人偵察機が姿を現した。その形はいつもルースが使っている無人戦闘機によく似ている。偵察機はサーチライ

トであたりを照らしながら、徐々に孝太郎達の方へ近付いて来ていた。また、その後ろには狼の群れも見える。狼達は相変わらず大騒ぎを続けていたから、偵察機が見える場所までやってきた事を孝太郎達が見落とす事はなかった。

「……魔法で誤魔化していたのがバレちゃったんでしょうかぁ？」

左右に動くサーチライトの光跡を眺めながら、ゆりかが不安そうに囁く。自分の魔法に不備があって偵察機がやってきた。日頃から不幸に見舞われる事が多いゆりかなので、最初に自分の失敗を疑うのはもはや習慣となっていた。

「……もしそうなら先に我らを調べに来るじゃろう。単なる偶然か、この状況を不審に思ったかのどちらかじゃな」

戦いに詳しいティアの勘では、これはゆりかの失敗ではない筈だった。もしゆりかが失敗したのなら、偵察機はまっしぐらにティア達の所へ来ているだろう。だが偵察機はまず狼の群れに接触した。その事からティアは二つの可能性を考えていた。

一つは偵察機が巡回している時に、たまたま狼の群れと遭遇したというもの。そしてついでに周辺にある熱源を調べているのだろう。

二つ目は狼の群れの動きを不審に思って調べに来たというもの。この惑星『アライア』の森においては、狼は生態系の最上位に近い所にいる。その狼の群れが、たった三匹の小さな動物――孝太郎達の発する熱はゆりかの魔法でそのくらいの規模に抑え込まれている――を襲わずに遠巻きに並走している。それを不思議に思って調べに来た、という可能性だった。

「……って事は、向こうは確信があって調べに来ている訳ではないんだな？」

「……その筈じゃ。向こうはこっちが魔法を使っている前提ではないからのう」

偵察機は偶然狼の群れに遭遇したか、それとも奇妙な動きをしている狼の群れを一応調べに来たか。どちらであるにせよ、孝太郎達がそこにいると思って調べに来ている訳ではないだろう。万が一ぐらいの可能性を、わざわざ潰しに来ただけなのだ。

「……だったらこのまま隠れていましょうよぅ」

「……ユリカよ、珍しくそなたと意見が一致したのう」

「……よし、二人ともう喋るなよ」

三人は口を閉ざし、息を殺して偵察機の様子を窺う。偵察機は相変わらずサーチライトを振りながらゆっくりと近付いて来ている。その速度は決して遅くはない筈だが、隠れている孝太郎達にはそう感じられない。近付いて来るまでのほんの数分間が、まるで一時間以上であるかのように感じられた。時計の針が進む速度がこれほど遅く感じられたのは、三人とも生まれて初めての経験だった。

キュイイイイ、チチチチッ

一時間にも思えるほどの時間をかけて、偵察機が三人のすぐ近くまでやってくる。手を伸ばせば届くような距離だから、小さな作動音が耳まで届いていた。すると無言のまま、ティアとゆりかが孝太郎の手を握り締める。二人共、偵察機のセンサーを誤魔化せているとは思っている。しかし確信はない。この場所で皇国軍に発見されるとどうなるのかが分かっているだけに、その僅かな危険が大きな不安を生み出す。そのどうしようもない不安

を打ち消す為に、他人のぬくもりが必要だった。これはもし一緒にいたのが孝太郎でなくても、きっとそうだっただろう。戦場を何度も経験している孝太郎には、その気持ちがよく分かる。だから孝太郎はしっかりと二人の手を握り返した。

ピー、ピピッ

オペレーターが慎重派だったのか、それとも人工知能を組み上げたプログラマーが几帳面だったのか。偵察機は倒木の下の小さな熱源を調べようと、センサー付きのアームを伸ばした。

――まずい！

孝太郎は偵察機のその動きに気付き、額に汗を滲ませた。テイアとゆりかは思わず孝太

郎の手を握る力を強める。もしアームに熱源以外のセンサーやカメラが付いていたら、それでアウト。孝太郎は覚悟を決め、テイアをどうやって守るかを考え始めた。

だが、その時だった。

「キキキキィッ!!」

孝太郎とゆりかの間を通って、小さな動物が偵察機の方へ飛び出していった。その動物はアームの先端を掠めるようにして偵察機の横をすり抜けていったので、偵察機は動物の姿を追って機体全体を半回転させた。そしてほんの一瞬で姿が捉えられなくなった動物を追ってそのまま移動していった。

――こい、二人共！

その僅かな隙を縫うようにして、孝太郎はティアとゆりかの手を引いて倒木の下を抜け出した。そして偵察機のサーチライトの向きに気を付けながら、既に偵察機が調べ終わった場所にある別の倒木の陰に滑り込む。

ピー、ピピッ

幸い偵察機は孝太郎達のその動きには気付かなかった。偵察機は逃げ去っていく小さな動物の姿を確認すると、再び孝太郎達が最初に隠れていた倒木の前にやってくる。そして気が済むまで倒木の下を調べた後、そのまま何処かへと消えていった。狼の群れは偵察機を追っていったようで、吠え声は徐々に遠ざかっていった。

「……やれやれ、行ってくれたか……」

孝太郎は戦いの緊張よりも、こういうかくれんぼのような緊張が苦手だ。だから偵察機と狼の群れが去ったのを確認すると、倒木に寄りかかってやや大げさに息を吐いた。

「はぁ～～。あの小さい奴には感謝だなぁ……」

「怖かったですぅ～～」

「まったくぅ～～、心臓が止まるかと思うたぞ」

ゆりかは単純に怖がりだから、ティアは孝太郎とよく似た理由から、やはり大きな溜め息をつく。三人共、この十数分間でドッと疲れていた。

「ティア、夜明けまではまだあるが、今日はこの辺にしておこう」

「そうじゃな。無理は禁物じゃ」

「やっと休めますぅ……」

三人の疲労はピークに達している。まだ明るくなるまでは一時間以上あったが、疲れて集中力が落ちている状態で移動を強行しても良い事はない。三人は早々に隠れ場所を探して休む事に決めた。

孝太郎達が森を抜け出したのは、惑星『アライア』に落ちてから四日目の真夜中を過ぎた頃だった。孝太郎達は直線距離で百キロ余りの道程を三日半かけて踏破した事になる。森の中を敵を避けつつ蛇行しながら進んだ事を考えれば、相当早いと言えるだろう。

森を抜けた先には小さな町がある。この町を抜ければパルドムシーハ家が管理する土地

に入るので、かなり楽になる。この『アライア』という星自体がエルファリアに対して好意的だが、忠臣パルドムシーハ家の土地ともなればそれは更に強まる。住民には自分達もパルドムシーハの一員という気概があるのだ。おかげで地元の皇国軍は大半がエルファリア派についていた。

だがこの町を通り抜ける事は簡単ではない。この町自体は領地の境界線上にあり、町を守っている皇国軍はヴァンダリオン卿の支配下にある。従ってこの町をどうやって通り抜けるかが最後の関門だった。

「無理に町を通らず、迂回して通り抜ければいいんじゃないか？」

「谷の狭間にある町じゃから、迂回するには崖を登らねばならぬ。しかも崖は森の生き物が人里に来ないよう様々な防御手段が講じられている」

「びりびりしたりするんですかぁ？」

「最初はそんなものじゃが、徐々にきついものになってゆくはずじゃ」

森と人界を分ける仕掛けは、森の生き物に配慮した作りになっている。最初はちょっとした仕掛けで森の生き物に警告を与え、徐々にきつくしていく。すると身の危険を感じて森の生き物は途中で引き返すという訳だった。

「魔法で飛んでいくのはどうだ？」

「飛んで侵入は魔法のお約束ですからぁ、普通は最初に対策するのはそれなんですぅ」

「なるほど……考える事はみんな同じか」

魔法を使った空からの侵入は避けた方がいいというのが、魔法の使い手であるゆりかの判断だった。魔法は戦術と併せて日々進歩しているので、当然魔法を使った侵入は体系化されており、またそれに対する対策も存在していた。その中では、対空魔法監視は基本中の基本だった。

また空を飛んで町を出入りするものは、地上で出入りするものよりも圧倒的に少ないので、全てを厳しくチェックする事が可能だった。より厳しくするなら、許可外の飛行物体を全て撃ち落とすのでも構わない。

「そうなってくると正面から魔法を使わずに突破する方が、魔法に対しては強い訳か」

基本的に魔法による隠密行動は、隠密の魔法と感知の魔法の力比べだ。隠密行動をする側は、姿を隠し、音を消し、魔力の痕跡を消す。対して阻止側はそれらを何としても感知しようとする訳だ。だから魔法を使わないという手法が、魔法による感知を掻い潜る効果的な選択となる。

とはいえ魔法を使わなければ使わないで、単純に町の入り口にある門の所にいる皇国軍の監視に引っ掛かる可能性があった。テイアは有名人なので特にその危険が高い。変装をすればいいかもしれないが、今はその為の道具がない。厳しい選択と言えるだろう。

「それか全く逆に、大きな魔法を瞬間的に使って突破する、じゃろうのぅ」

魔法による監視は常時行う必要があるものなので、きちんとした準備がある場合を除くと効果に限界がある。従ってほんの短い時間、全力で魔法を使って隠密行動を行えば、監

視の目を掻い潜る事が出来るかもしれない。フォルサリアでは不可能なやり口だが、魔法が皇国軍に行き渡っていない今のフォルトーゼであれば、その可能性は決して小さくはなかった。

「という事は……ゆりか、魔法で俺達を犬や猫に変身させた上で、その魔力を隠すとすると、どのぐらいの時間維持できる？」

孝太郎が町を突破する為に選択したのは後者、瞬間的な魔法の利用だった。有名人のテイアが一緒なので、魔法を使わない突破は難しい。そして魔法を使う場合、別人に変装するよりも小動物の方がいいだろう。小動物なら兵士によるチェックを受ける事がないからだった。しかし顔を変えて別人に変装するよりも魔力の消耗が激しいのも確かなので、リスクは少なからず存在していた。

「そうですねぇ……変身の目標三倍化でぇ、魔力隠蔽の領域拡大なんだからぁ……え

えとぉ……十分、ぐらいかなぁ……？」

ゆりかは指折り計算して、十分ぐらいならもつだろうと結論した。人間を全く別の生き物に変身させるのは、かなり高度な魔法だった。それを三人分維持して、しかもその痕跡を消す場合、一人を変身させる場合の何倍も魔力が要る。ゆりかの実力をもってしても、十分ぐらいが限度だった。

「絶対の自信があるのはどこまでだ？」

「五分なら絶対大丈夫ですぅ」

「幻覚の魔法の方がいいのではないかのう？」

この五分という数字に不安を覚えたのがテイアだった。今隠れている場所から町まではそれなりに距離があるから、テイアは五分では時間的にギリギリになってしまうのではないかと考えた。加えて町の門の向こう側の状況が分からない事も不安要素の一つだろう。そこでテイアはより消費の少ない幻覚にするべきではないかと提案したのだった。

「その場合、門の所にある監視装置が問題だな。全部騙すなら結局変身と変わらないんじゃないか？」

「そんな気がしますぅ」

「ふぅむ、厄介じゃのう……」

幻覚にも幻覚の問題があった。幻覚は人間を騙す事は出来ても、機械類を騙す事は出来ない。機械類を騙すにはまた別の魔法が必要になる。重量センサー、エックス線透過、熱源、音声など、予想される監視装置は多い。それら全てを個別に騙していった場合、結局必要な魔力は変身と大差ない可能性が高かった。

「だったらぁ、途中までは幻覚で近付いてぇ、そこから変身するのがいいんじゃないですかねぇ～？」

意外な事に、この問題の解決策を示したのはゆりかだった。日頃は知的な言動が少ない彼女なので、孝太郎とテイアは思わず顔を見合わせていた。

「お前、今日は珍しく冴えてるなぁ」

「うむ、確かにそのやり方であれば変身の五分間を最大限に活用出来るじゃろう」

監視装置が厳重なのは町の近くだ。つまり町に近付くまでは幻覚などの大雑把な魔法で構わない。そして町の近くからは変身というのが一番効率的な魔法の使い方だった。

「えへへへ～、少ないおこづかいのやりくりなら得意なんですぅ～」

限られた魔力でどう門を突破するかは、少ないおこづかいで一ヶ月をどうしのぐのかとよく似ている。昼食の値段を下げて漫画を買うなど、ゆりかはこの局面で役立つ豊富なノウハウを持っていたのだ。

「……まるっきり自慢にならん技術だな」

「これコータロー、たまに役に立った時ぐらいは褒めてやらぬか」

「……えらい、えらい」

「里見さぁん、あとでご飯を奢ってくれてもいいんですよぉ～♪」

「お前は不思議な奴だな」

「魔法少女ですからぁ」

「そりゃそうじゃの」

こうして孝太郎達の侵入プランが決まった。動物に変身しての正面突破。だが動物に変身して侵入する場合、どの動物に変身するのかが問題だった。それぞれの動物には良い面と悪い面が存在していたのだ。

「……ゆりかは馬の後ろ脚でいいだろ」

「嫌ですよぅ!!」

「お前、得意だったじゃないか」

「確かに得意でしたけどぉっ、なんでわざわざ後ろ半分なんですかぁっ!?　明らかにおか

しいじゃないですかぁっ!!」

小さい動物の方が怪しまれないで済むだろうが、小さ過ぎると足が短くて移動に時間がかかる。逆に大きいと足は速いが、兵士達が止めようとするだろう。鳥になれば小さくて移動も速いが、今度はわざわざ門をくぐるのがおかしい。兵士達が不審がらず、それでいて足が遅過ぎない動物を選ぶ必要があった。

――ゆりかに馬になって欲しいと願うのは、俺の感傷かな……。

この時の孝太郎は、かつて出会ったある魔法使いの少女が、馬に変身していた事を思い出していた。だから状況を分かっていながら、思わずゆりかに馬になる事を勧めてしまった。そして自分が無理筋の話をしている自覚があったから、孝太郎は早々にその意見を引っ込めたのだった。

「分かった分かった、悪かったって」

「里見さんはぁ、すぐそうやってわたしに意地悪言うんですからぁ～もぉ～」

「現実的には犬や猫あたりが適切じゃろうのう」

人間の身近にいて、町の門を通ってもおかしくない動物となると、やはりペットとして普通に町を行き来している動物になる。フォルトーゼにも犬や猫はいるので、ゆりかにもイメージし易いだろう。

「里見さんは犬、テイアちゃんは猫、それでわたしはぁ――――」

「ポニーでどうだ？」

「さとみさぁんっ!!　もうっ!!」

「分かってるって。ニワトリぐらいにしとけ」

「嫌ですぅ!!　わたしも猫ちゃんにしますぅっ!!」

最終的に孝太郎は犬、ティアとゆりかは猫に決まった。あとは町を出入りする人間の横を何食わぬ顔で歩き、一緒に門を通り抜ければいい。兵士達はきっと勝手に、横を歩く人間のペットだと考えるに違いなかった。

これまでは夜間に行動してきた孝太郎達だが、人の出入りが少ない時間帯は目立ってしまうので、町へ入るのは昼間にする事に決めた。幸い森の中とは違って周囲に人間が多くなっているので、上空からの監視で発見される可能性は低い。

予定の時間が来ると、三人はまず幻覚で別人に変装して町へ近付いた。そして物陰で動物に変身し、改めて町へ向かう。幸いこの間には問題は起こらず、周囲には孝太郎達に注目する人間はいなかった。

「わんっ、わんわんっ」

「にゃー」

「ふぎゅう」

先頭は犬になった孝太郎。つぶらな瞳（ひとみ）が印象的な柴（しば）犬だった。それに続くのが、金色の美しい毛並みを持つペルシャ猫になったティア。最後のゆりかはピンクを基調とした妙（みょう）に

ポップな見た目の猫で、漫画のような猫という表現がぴったりだった。

フォルトーゼにも犬や猫は存在している。厳密に言うと違う生き物なのだが、ほぼ見た目が同じ動物がペットとして飼われているという意味では、存在していると言っていいだろう。おかげで孝太郎達が町の門に近付いても、誰も不審に思ったりはしない。動物好きが軽く目を留めるぐらいだった。

「わう」

「にゃーん」

しかし当の孝太郎とティアは焦っていた。当たり前だが、二人が動物になるのは初めての経験だ。そのせいで二人共上手く歩けていない。四本足で歩くのが思いの外に難しいの

だ。運動が得意なので辛うじて何とかなっている状態だった。だから周囲を歩いている人達が自分達の動きをおかしく思わないか、それがずっと気になっていた。

「みゃおみゃおぅ♪」

そんな中、華麗なステップを披露していたのがゆりかだった。ゆりかが四本足で歩く姿は見事だった。軽やかでしなやか、本物に近い自然な動きだった。これはゆりかの馬の後ろ脚の演技が達人レベルに達している事に影響を受けている。馬と猫の歩き方は違うのだが、それでもゆりかには四本の足を使って歩くという事に対する明確なイメージがある。それがこの華麗なステップを可能にしていた。

「みゃみゃ～♪」

「わふ」

「にゅー」

この状況は普段とは正反対だった。いつもはゆりかが足を引っ張るのに、今はその心配はない。むしろ孝太郎やティアが足を引っ張る可能性があった。その事に気を良くしたゆりかは、先頭に立って歩き始める。ゆりかは意図してやった訳ではないが、結果的にこれが上手い方向に働いた。上機嫌で歩くゆりかと、その後ろをぎこちない足取りでついていく二人は、見る者達にワンマンボスとそれに嫌々ついていく部下達の姿を思わせた。おかげで人々は不自然な印象を持たず、ユーモラスな印象だけを持った。全体としては成功していると言えるだろう。

「にゃ！」

だが流石に町の門の手前まで来ると三人に緊張が走った。門は開放されているが、五人の兵士によって守られている。門の左右に一人ずつ、中央に一人、近くに建てられた小さな建物の中に更に二人だ。門の左右の兵士は武器を手に周囲を警戒するのが仕事だ。中央にいる兵士は門を出入りする住民達の身分証を確認している。そして建物の中の二人は、休憩を兼ねて監視装置が警報を出さないかを確認していた。

この五人の兵士達に見咎められずに通り抜けられるかどうか、それが問題だった。動物に変身していても、兵士達が必ず通してくれるとは限らない。単純に追い払われてしまったり、性格が悪い兵士なら撃ち殺されたりする可能性もあるだろう。どうしても不安は残り、緊張は隠せなかった。特にゆりかは臆病な性格で、かつ先頭に居たので、緊張のあまり思わず立ち止まってしまっていた。

「わう、わうわう」

「にやうぅ、にやうぅ！」

孝太郎が後ろからグイグイ押しても、ゆりかは一向に前に進もうとしない。完全に怖気づいてしまっていた。

「わん」

「にゃー」

仕方なく、孝太郎とティアはゆりかを置いて先に行ってしまう事にした。残り時間は少ない。酷なようだが、立ち止まっている暇はないのだった。

「みゃ～～～みゃうみゃうぅっ！」

孝太郎達が先に行ってしまうと、心細くなったゆりかは大慌てでその後を追う。兵士達は怖かったが、この場所に一人で残されるのはもっと怖かった。

「わふ」

「にゅ」

ゆりかが追ってきたのを確認すると、孝太郎とティアは顔を見合わせて声を掛け合う。ゆりかを置いてきたのは、こうすれば動くと分かっていたからだ。彼女の性格を知り尽くした孝太郎達ならではの対応だった。

「わう」

「にゃー」

「……にゅ、にゅうう」

だが孝太郎とティアにもゆりかの気持ちはよく分かる。犬や猫の視点だと、人間は非常に大きく感じられる。身長数メートルの巨人と向かい合っている感覚なので、その威圧感は半端なものではないのだ。そしてその感覚は、近付けば近付く程増していく。おかげで目の前にやってきた時には、三人共緊張で心臓が早鐘のように打ち鳴らされていた。踏み潰されるかもしれない、そんな考えさえ脳裏をよぎった。

「お帰りかい、ワンちゃん達」

だがその緊張も門を守っていた兵士の一声でグッと和らいだ。

「見た事のない連中だな。しかも珍しい種類だ」

「他の門から外へ出て、たまたまこっちへ回ってきたんじゃねーか？」

幸いな事に、この場所の兵士達は犬や猫に対して寛容だった。口ぶりからすると、この場所を通る犬や猫は少なくないのだろう。おかげで見慣れない犬や猫であっても、特に不思議には思っていないようだった。

「わう」

「おう、礼儀正しい奴だな。通れ通れ」

「にゃー」

「ふぎゅう」

孝太郎達は内心で胸を撫で下ろしつつ、問題の門を潜った。すると安堵した分だけ喜びが湧き上がってくる。ここまで苦労してきた事もあって、小躍りしたい気分だった。しかし今そうしてしまうと全て台無しになる。兵士達が見えなくなるまでは、喜びをグッと抑えて進み続ける必要があった。

「珍しい種類だってっ!?　どこだっ!?」

しかしここで突然、予期せぬ問題が持ち上がった。

「ほら、あそこだ。角の手前の」

「本当だ！　猫も犬も見た事がない種類だ！　ちょっと行ってくる！」

「おい、待てよ！　任務中だぞ！」

「ちょっとだけ、ちょっとだけだって！」

予期せぬ問題とは、小屋の中にいた兵士のうちの一人が、孝太郎達を追ってきてしまった事だった。この兵士は犬や猫が大好きで、門の所にいる仲間の話を聞き付けて飛び出してきた。そしてこれまで見た事がない種類の犬猫――孝太郎達はゆりかの知識で変身したので地球の犬猫なのだ――に大興奮、思わずその後を追って走り出したという訳なのだった。

「まってくれー！　えさをあげるぞー！　わんわーん、にゃんにゃーん！」

「わうっ!?」

「ふにゃー！」

「にゃうぅぅっ、にゃうぅぅぅっ!!」

真っ先に逃げ出したのはゆりかだった。こういう事の判断は早い。しかし単純な足の速さでは孝太郎やティアの方が上だ。すぐに追い抜かれ、あっという間にゆりかは最後尾になってしまう。そして三人は孝太郎、ティア、ゆりかの順で手近な路地に飛び込んだ。

「にゅわぁあぁぁぁっ、にゃにゃにゃあぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」

「暴れるんじゃない、仲良くなりたいだけだってば」

だがそこで兵士に追い付かれた。そして最後尾を走っていたゆりかが兵士に捕まってし

まう。ゆりかは逃げ出そうと必死になって暴れたが、人間と猫の体格差は如何ともしがたく、あっけなく抱き上げられてしまった。

「妙な柄の……って、この毛は地毛か？　随分派手だな……」

「ガルルルウウウウウウツ」

「怒るなよ。いじめてないだろ」

孝太郎は唸り声をあげ、兵士を威嚇する。だが兵士はゆりかを離そうとしない。やはり小さな柴犬の姿で威嚇しても怖くもなんともないのだ。

「にゃうぅっ!!」

威嚇が通じない事に業を煮やしたティアは直接的な行動に出た。ゆりかを捕まえている兵士の袖に噛み付いてぶら下がる。

「わあっ!?」

「……ぷぎゅうっ！」

兵士はティアがぶら下がったショックでゆりかを取り落とした。そのゆりかは猫にあるまじきどんくささで着地に失敗、顔から地面に落下した。

「お前ら仲間思いなんだなぁ」

「うにゃぁぁあぁぁっ!?」

ゆりかは何とか逃げ出す事が出来たが、今度はティアが捕まってしまった。兵士の服の袖に牙が引っ掛かって、すぐに逃げる事が出来なかったのだ。

「にゃあぁぁっ、にゃあにゃあぁぁあっ!!」

「お前は元気だなぁ……それにさっきのよりもっと珍しい種類だな。ちょっとよく見せてみろ」

ティアはゆりかよりも激しく暴れたが、それでも脱出には至らない。やはり人間と猫では体格差が激し過ぎる。最初の頃に感じた、巨人を相手にしているような感覚は、間違っていなかった。

「わう！」

非常にまずい状況だった。これに危機感を持った孝太郎は、不利を承知で兵士に向かっていく。一刻も早くティアを取り返さなければならなかった。しかし――

ぼむっ

「うわっ、なっ、なんだぁっ!?」

孝太郎が兵士に飛びかかろうとした、まさにその時。突如として孝太郎達の身体が白い煙に包み込まれた。そしてその煙が晴れた時、孝太郎達は本来の姿に戻っていた。兵士に捕まった事で時間を浪費してしまい、孝太郎達にかかっていた変身の魔法が解けてしまったのだった。

煙が晴れた時、兵士はまず自分が抱きあげた猫が人間の少女に変化した事に驚いた。あり得ない出来事を前にして、彼はただ驚愕した。

「ねこっ、ねこがひとにぃっ!?　なっ、何が起きたあぁあぁあっ!?」

兵士は自分が目にした事が信じられない。触っても分からなかったのだから、立体映像を被せていた訳ではない。では何か別の科学技術を使ったのかという話になるが、彼が知っているどんな科学技術を使っても、猫が人になったりはしない。

「おっ、お前達っ、なんだっ、一体何者なん――はっ!?」

だが彼の混乱は、新たな驚きによって一旦終息した。この新たな驚きは、猫が少女に変身した以上だった。

――ティアミリス皇女殿下っ!?　まさかそんなっ!?

驚きの余り声が出ない。金色の髪、整った顔立ち、強い力を感じさせる瞳。兵士には、猫が変じた少女に見覚えがあった。彼が住む神聖フォルトーゼ銀河皇国の第七皇女、ティアミリス・グレ・フォルトーゼその人だった。

――本物なのかっ!?　それとも俺がどうかしちまったのか!?

第六惑星の地上勤務である自分が、ティアミリス皇女と出会うなど予想の外にある出来事だ。そして猫が人間になった驚きと比べると、リアリティがある分だけ驚きが深い。混

乱は終息したものの、今度は自分の正気を疑い始めていた。

――だが待て、もし本物なのだとしたら、どうしてここに？　そうかっ、数日前に報告があった密入国者か!!

しかし彼が知っていた幾つかの情報が、目の前の少女がティアミリス皇女その人であると裏付けていた。

数日前に所属不明の宇宙船が『アライア』に降下した。そしてその仲間の一部がこの町に隣接する森の奥に降下した可能性があるらしい。おかげで町に配置されている皇国軍の多くが、その捜索に向かっていた。門の番をしている自分達にも出入りを厳しくチェックしろという命令が来ている。そして目の前には、手配中のティアミリス皇女と思われる少女。

所属不明の宇宙船がエルファリア派のもので、何らかの事情でティアミリス皇女がそこからはぐれて森へ降下。それを捕まえる為に、多くの兵が動員された。ティアミリス皇女はその包囲網を潜り抜け、自分の目の前にいる。彼女達がどうやって猫に変じていたのかは分からないが、分からないからこそ皇家を守る技術として相応しいだろうし、包囲を抜けられた説明もつく。

そんな風に考えた兵士は、目の前の少女がティアミリス皇女本人で間違いないと確信した。それがこの状況を説明する、一番自然な話の流れだった。

――まずい……。

ティアミリス皇女の護衛の騎士が、反射的に剣の柄に手をかける。それはもし兵士がこのままティアミリス皇女を拘束すれば、困った事になるからだった。

「いやー、珍しい種類の猫もいるもんだなぁ……毛の長い、金色の猫とは」

しかし兵士は皇女を拘束しようとはしなかった。まるで猫に対するかのような口調で語り掛け、ゆっくりと彼女を地面に下ろして解放した。

「……そなた、どういうつもりなのじゃ……？」

これに驚いたのは皇女の方だった。ここはまだ敵地。兵士達は皇女を捕まえるように命令を受けている筈。兵士達にも守るべき家族があるから、そうした命令に逆らうのは難しい。なのに兵士はティアミリス皇女を解放したのだ。

「虐めて悪かったな、猫ちゃん達。俺は猫や犬を愛する自分に誇りを持っているんだ」

そして兵士は戸惑うティアミリス皇女に向かって片膝を突き、胸に手を当てて深く一礼する。言葉は猫や犬に向けられたものだったが、その振る舞いは間違いなく皇女に対して向けられたものだった。

「……ありがとう。そなたの忠誠は生涯忘れぬ……」

兵士は自分の皇家への忠誠がゆるぎない事、そしてその事に誇りを持っている事、そうした事を猫に対する言葉に置き換えて口にした。それに気付いたティアミリス皇女は、いつになく優しい声で感謝の思いを伝えた。

「ほら、ぼやぼやしてないで行けって。町の北側に猫の溜まり場があるっていう噂だから、

そっちへ行くといいぞ」

「うむ。世話になった！」

ティアミリス皇女は瞳に滲んだ涙を拭うと、兵士に背を向けた。そして様子を見守っている護衛の者達に駆け寄っていった。護衛の騎士は既に剣の柄から手を放しており、笑顔で走ってくるティアミリス皇女と、その背後にいる兵士に対して、どこか懐かしげな眼差しを送っていた。

「……また助けてくれたな、オライエン。ありがとう」

背を向ける直前、騎士はそんな言葉を兵士に投げかけた。そして彼は皇女達を連れて去っていく。兵士は皇女達の姿が見えなくなるまで、その場で見送った。

「おい、いつまで遊んでんだ」

「ん？　ああ、すまん、珍しい猫だったからつい、な」

皇女達の姿が見えなくなったのと、上官に怒られる事を心配した仲間の兵士が呼びに来たのはほぼ同時だった。動物好きの兵士は最後にもう一度だけ皇女達が去っていった方向に視線を送ると、仲間と一緒に持ち場の門の方へ戻っていく。

――あの騎士は、どうして俺の名前を知っていたんだろう……？

動物好きの兵士は持ち場へ戻るまでの間、護衛の騎士がどうして自分の名前を知っていたのかを考え続けた。しかしどれだけ考えても、その理由が分からない。分からないが、不思議と心が躍る。だから彼は自分の決断に満足しているのだった。

仲間たち　十一月二十四日（水）

動物好きの兵士は町の北側に猫の溜まり場があるらしいと言った。孝太郎達はそれを、町の北側にエルファリア派の秘密基地があるらしいという意味だと考えた。立場上あくまで猫に会っただけという事にしたい兵士だから、そういう風に伝えるのが精一杯だったに違いないのだ。そんな訳で、孝太郎達は町の北側へやってきていた。

「案外簡単にこれましたねぇ～」

幸いな事に、町の門からこの場所までは苦労せずにやってくる事が出来た。これまでと比べると上手く行き過ぎているように感じて、ゆりかは多少不安を感じていた。

「町中を兵士がうろうろしている訳がなかろう。地球流に言えば、近代国家で先進国なのじゃぞ」

「それにここの兵士は大半が森に行ってるだろうしな」

文明化されて長い時間が経った国家では、町中を兵士が歩き回っている事は滅多にないのが普通だ。これは戦争の形態が変化したのが原因だ。剣や槍で戦争をやっていた頃は人口全体の数パーセントが軍属である例が少なくなかったが、時が流れて武器が変化するにつれて兵士の数は大きく減じた。騎士や武勲が尊ばれるフォルトーゼでさえ、兵士の数は人口全体の〇・二パーセントを超えない。その為、普通に町を歩いていて兵士に遭遇する可能性は低い。これに加えてティア達を捕まえる為に多くの兵士が森に行っているので、結果的に町の中で警備にあたる兵士の数は少ないのだった。

「それは分かりましたけどぉ、どうやって味方の人達と会うんですかぁ？」

「お前、全然話を聞いてなかったな？」

「えへ、えへへへへぇ～～」

「安心せい、連絡員同士が接触する方法を知らされておる」

エルファリア派は現時点では非合法組織扱いなので、その拠点や支部の存在は秘密にしなければならない。当然、仲間同士で接触する場合にも細心の注意を払う。堂々と名乗り合うのは危険なので、その為の手順が決められていた。テイア達はちゃんとその為の方法を知らされているので、接触は難しくなかった。

「コータロー、今日はどういう感じじゃ？」

「今日の符丁は、持ち物と合言葉みたいだな」

他所から来た連絡員は、決められた場所と時間に、特定の持ち物を持って立つ。すると地元のエルファリア派の人間が偶然を装って通りかかり、合言葉を投げかける。それにきちんと答えられれば仲間と判断して貰える――というのがこの日の接触方法だった。

ちなみに接触の方法は他にも多数存在しており、その中で更に日時毎に違いがある。これなら一つが漏洩しても、他には影響がないという寸法だった。

公園の中央にある時計が取り付けられた大きな柱の下に、午後一時四十分に黄色い花束を持って立つ事。それがこの日に定められた接触方法の最初の手順だった。

「……上手くいくといいんだが……」

時刻は一時三十五分。柱の下に立っているのは孝太郎一人きり。孝太郎は現地の服を身に着け、手に黄色い花束を抱えていた。ちなみにティアとゆりかは、別の場所に隠れている。孝太郎が無事にエルファリア派と接触出来た後に、ティア達を呼び寄せる手筈になっているのだ。最大限ティアを守る為の工夫だった。

「そろそろ時間か」

手順通りにやっていても、現地のエルファリア派と無事に接触出来る保証はない。情報が漏れていたり、酷い場合は支部自体が壊滅している場合もある。そういう場合はやってくるのは皇国軍だ。孝太郎は大丈夫だろうとは思いつつも、不安が拭えないのが正直な所だった。そして時計の針が回り、指定の時間が近付く程に、本当に大丈夫なのかという気持ちが強くなっていく。そうやって孝太郎が落ち着かない時間を過ごしていると、やがて時計の針が四十分を回った。

トントンッ、トトンッ

すると孝太郎の足元に、スポーツ用のものと思われるボールが転がってきた。サイズといい素材といい、サッカーボールによく似たものだった。孝太郎が反射的にそれを拾い上げると、スポーツ用と思われる動き易そうな服を身に着けた少女が、ボールを追うようにしてやってきた。

「君のかい？」

「ありがとう、お兄さん。『あら、花束って事は、これからデート？』」

驚いた事に、少女は合言葉を口にした。どうやらこの少女こそが、この町のエルフアリア派の人間だったようだ。活動的な少女の姿が地下組織のイメージと繋(つな)がらず多少面食らっ

た孝太郎だったが、考えてみれば公園に現れて不審ではないのはスポーツをやる人間だろう。気を取り直した孝太郎は定められた答えを口にした。

「『そのつもりだったんだけど、すっぽかされたみたいでね。君が貰ってくれると助かるんだが』」

「はぁ……仕事抜きで言われてみたいわ、そんな台詞」

「俺も言ってみたいです」

「あははは、ようこそ、ゴルトラック支部へ」

合言葉を確認すると、少女は歓迎の笑顔を浮かべる。しかし孝太郎はまだ警戒を解かない。少女が本当に味方かどうか、もう一つ保証が欲しかったのだ。他ならぬティアの命がかかっているのだから。

「早速ですけど、俺の仲間達が何か言ってきていませんか？」

「ああ、ちょっと待ってね」

孝太郎の求めに応じ、少女はポケットに手を入れて小さな紙片を取り出した。そしてそこに書き込まれている文章を読み上げていく。

「ええと……『アトラス、ユーカサス、ヘラクレス。カブトンガーチャージアップ』だって。なんなの、コレ？」

「向こうが無事にやってるっていう合図です」

孝太郎は少女が読み上げた文章を聞いて、ようやく警戒を解いた。実は少女が読み上げた文章は、孝太郎達の間で事前に決めた暗号の一つだった。これは仲間達の無事を知らせる為のものであると共に、目の前にいる人物の信頼性を高める為のものでもあった。

とても残念な事ではあるが、エルファリア派の人々が常に信用できるとは限らない。人質を取られていたりするケースは常に存在しているからだ。また、先回りした敵が入れ替わっているケースもあるだろう。そんな状況下で孝太郎達が別行動を行う場合などには、支援に当たるエルファリア派の人々が信用できるかどうかを探る方法があった方がいい。それがこの暗号だ。念には念をという、キリハのアイデアだった。

もし支援に当たるエルファリア派が孝太郎達が定めた独自の暗号を知っていれば、完全とは言えないがかなり安心だ。たった今、目の前の少女が口にした暗号の内容は、仲間達が元気だと伝えるもの。そしてそれを彼女が口にしたという事は、彼女がきちんとオオヒメ側と繋がっていると考えられる。つまり接触方法が漏(ろう)えいして、敵が入れ替わっていたりするリスクは小さい訳だ。孝太郎が警戒を解いたのはそれ故(ゆえ)だった。

無事に地元のエルファリア派と接触出来た孝太郎は、ティア達と合流した後、エルファリア派の秘密基地へ向かった。だが秘密基地と言っても町中にあるものなので、規模はさほど大きくはない。事務所に毛が生えた程度で、基地のイメージとは程遠い。その中にいる人間も十人を超えない。そこは支部という言葉がぴったりと当て嵌まる地味なたたずまいだった。

「このようなむさくるしい場所で申し訳ありません。もっと過ごし易い場所にお招き出来れば良かったのですが」

この町でエルファリア派の支部長を務める老人も、この場所があまりいい環境ではない事を自覚している。特に神聖フォルトーゼ銀河皇国の皇女を迎える場所としては不適切極まりないと感じていた。

「よい。そなたらの都合を無視して訪問したのはわれらの方じゃ。それにこの数日、森の中を彷徨っておった。屋根があるだけマシというものじゃ」

ティアの方は気にした風はなく、むしろ楽しげだった。そんなティアの横顔を見た孝太郎は、彼女が何を思っているのかピンと来た。

――あの顔……あいつめ、こないだ見た映画みたいだと思ってやがるな……。

先日ティアと一緒に見た戦争映画で、レジスタンスの拠点が丁度こんな雰囲気だった。孝太郎の勘だと、ティアはその時の事を思い出している筈だった。実際ティアは部屋の様子をぐるっと見回した後、孝太郎に一瞬視線を送ってきた。状況と立場ゆえに、そうした事が口に出来ないでいるだけなのだ。

「そう仰って頂けると救われます」

支部長はそんなティアの様子を寛大さや優しさが表れたものだと考えたようで、安堵して微笑んでいる。結果的に問題はないと言えるだろう。

――むしろ問題は……。

孝太郎がティアの事よりも気にしていたのはゆりかの事だった。数日間強いストレスに晒されたゆりかは、魔法を使い続けた疲労とも相まって、部屋に入った途端に緊張と意識の糸が切れてしまった。今は部屋の隅にあるソファーで眠っていた。

――ゆっくり休め、ゆりか。よく頑張ってくれたな……。

ゆりかは元々争い事に向かない性格をしているので、この数日間は精神的にきつかっただろう事は孝太郎にも容易に想像がつく。にもかかわらず魔法でティアを守るという仕事は最後まできっちりとやり抜いた。褒める事は沢山あるが、文句など何もない。孝太郎はゆりかには堂々と寝ている権利があると思っていた。

「それはさておき、早速本題に入ろう」

「確かに今は一刻を争う状況です」

孝太郎がゆりかを見ている間にティア達の挨拶は終わったようで、二人の話題は新しいものへと移った。

「わらわ達が森に落ちてから今日で五日目。その間に何が起こったのかを知りたい」

孝太郎達がオオヒメからはぐれ、惑星『アライア』の森へ落ちたのは五日前の事だ。それから今日までの間は世の中から隔絶されていた。だから孝太郎達は新たな行動に移る前に、その間に起きた事を知っておく必要があった。

「……結論から申しますと、既に開戦しております」

支部長は重々しく答えた。やはり自国で戦争が始まったという事を、楽しそうに話せる人間は少ないだろう。それはもちろんティアも同様だ。席を立って机に手を突くようにして身を乗り出した。

「まことかっ!?　詳(くわ)しく申せっ!!」

「はっ、実は――」

そして支部長はティアの求めに応じて、孝太郎達が森へ落ちてから今日までに起こった出来事を、順を追って話し始めた。

オオヒメの『アライア』への降下は、当初は密入国者の船として扱われていた。ヴァンダリオン卿はエゥレクシスからの情報でそこにエルファリアが乗っている事を掴んでいたにもかかわらず、だ。エルファリアとティアの身柄を押さえられる可能性があったので、ヴァンダリオン卿は味方にさえその事を秘密にし、後々優位に立とうとしたのだ。

しかし皇国軍がオオヒメを取り逃がした事で状況が変わった。ヴァンダリオン卿はエルファリアが皇国軍の追跡を振り切って帰国した事を発表。エルファリア派に対して降伏とエルファリアの身柄引き渡しを迫った。

エルファリアは既に多額の公金横領と複数の殺人の主犯として告発されているので、本

来はエルファリア派はその要求に従わねばならない。だがエルファリア派を率いるパルドムシーハ卿はその要求を敢然と拒否した。捏造された偽の証拠を採用した裁判が開かれると分かっていて皇帝を引き渡せる筈がない、というのがパルドムシーハ卿の主張だった。つまり犯罪を犯しているのはエルファリアではなく、軍部の指導層であると暗に指摘したのだ。

これにより世論は大きく割れた。基本はエルファリアを支持する者、軍を支持する者、判断を保留している者の三つだ。割合は四対四対二といった所。態度を保留している者達は白黒はあくまで裁判で付けるべきという声が強く、結果的に世論はややエルファリアが不利な方向に展開していた。

こうして軍は世論を後ろ盾にして、エルファリアを匿い裁判を妨害するエルファリア派を反政府組織やテロ組織に指定し、武力行使に踏み切った。世論は武力行使には否定的だったが、裁判の為にはやむを得ないと消極的に支持している。これはかねてよりヴァンダリオン卿が狙っていた通りの展開だった。

話が進むにつれてティアの表情は徐々に険しくなっていった。母親が謂れのない罪を着せられて皇帝の地位を追われ、愛する祖国フォルトーゼが悪漢に奪われようとしているのだから、そうもなるだろう。話が終わる頃にはティアは激怒していた。

「おのれヴァンダリオンめぇっ！　貴様の思う通りにはさせんぞっ！」

ガンッ

怒りのやり場がないティアは、その可憐な拳で机を殴りつける。身体は華奢でも理に適った殴り方なので、机はまるで驚いたかのようにその場で飛び跳ねた。

「お、落ち着いて下さいませ皇女殿下！」

「これが落ち着いていられるかっ！」

激しい怒りに囚われたティアは、我を忘れて怒鳴り散らしていた。エルフアリア派の支部長を務める老人の声も耳に届かない。劫火の如き怒りがティアの内で燃え盛り、周囲を焼き尽くさんばかりだった。

「殿下っ！　ここはお怒りをお収め下され！」

「われらがどんな思いで長きに亘ってフォルトーゼを守ってきたか！　それを――」

「落ち着け、ティア！」

ゴッ

そんなティアを我に返らせたのは、その脳天に直撃した孝太郎の拳だった。

「いたっ!?」

その激しい衝撃のおかげで、ティアの怒りは一瞬で鎮火した。

「支部長さんに当たるんじゃない!!　お前の敵は誰だっ!?」

「うるさいうるさいっ、何も知らん癖にいっ!!」

だが一度は鎮火した筈の怒りの炎は、直後に一層激しく燃え上がった。そしてその半分

が孝太郎へ向かう。ティアの拳は孝太郎の頬に向かって突き出された。

ガンッ

孝太郎はその拳を避けず、真正面から受け止めた。そして一歩も下がらず、真っ直ぐにティアを見つめる。

「……それは本気で言っているのか、ティア？」

続いて孝太郎の口から飛び出したその一言が、ティアの心を激しく揺さぶった。おかげで彼女はほんの少しだけ冷静さを取り戻した。

「あっ……」

少しだけ冷静になったおかげで、ティアは自分の拳の先にある体温を感じ始めた。そしてその体温の持ち主は、フォルトーゼにとってどんな意味を持つ人間であるのか、その事を思い出す。何も知らない筈はない。むしろティアと同等か、それ以上に、この事件の当事者である人物だった。

「すまぬ、コータロー。暴言を正式に謝罪する。それと八つ当たりで殴って悪かった」

ティアはここで完全に自分の心の手綱を取り戻した。そして自分がどれだけ馬鹿な事を言ったのかを悟り、恥ずかしくなる。今回に限っては、甘えや笑いでは誤魔化せない失敗だった。

「いいって、気持ちは分かる。それに……よく考えると俺がちゃんと決着を付けられなかったせいでもあるんだ。この事に関しては、お前は俺に文句を言う権利があるよ」

孝太郎は自嘲気味に微笑んだ。孝太郎がマクスファーンとの決着を付けられなかったせいで、フォルサリア魔法王国と大地の民が生まれた。その両者の力を得たワアンダリオン卿が好き放題やっているなら、その台頭は孝太郎の責任でもある。また二十年前にフォルトーゼを放り出して故郷へ帰ってしまったという意味での責任も存在していた。だから孝太郎は自分にはティアを責められないだろうと感じていた。

「バカ者っ、そこまでそなたに甘えられるものかっ！　われらマスティル家はいつまでもそなたに守られているだけではないぞ！」

「……仰せのままに、マイプリンセス」

「うぬぅ……まったく、いつまで経っても融通が利かぬ騎士なのじゃからッ！」

一人の少女としては、ただただ仲のいい男の子に叱って欲しいタイミングなのだが、孝太郎は自分の立場を決して忘れず皇国の守護者である事を貫いている。それは少女としては残念である反面、皇女としてはとても嬉しい事だから、ティアとしてはもどかしい限りだった。

「支部長さんにはちゃんと謝っておけよ」

「わかっておるわっ！」

「んー」

ティアがいつもの調子を取り戻したのを確認すると、孝太郎は彼女に背を向けてゆりかに近付いていく。ティアが普段通りに戻ったのならば、孝太郎の心配事はゆりかだけだった。それを多少不満げに見送った後、ティアは一度深呼吸。そして改めて支部長と向かい合った。

「……取り乱して済まなかった。未熟者ゆえの過ちじゃ」

「いいえ、皇女殿下も人間であらせられますから、常に完全ではありますまい」

「そう言って貰えると助かる」

「それに国民としましては、国の為に怒る皇女殿下のお姿は心強いものであります」

幸い支部長は怒ったりはしていなかった。彼はティアの怒りが国やエルファリア、そして国民を思い遣ってのものである事をよく理解している。驚きはしたものの、言葉通りに頼もしく思っていた。

「それよりも殿下、あの騎士様は何処の御家中のお方なのでしょう？」

「コータローか？　何か気になる事でもあるのかの？」

「今時珍しいタイプの騎士様なので……失礼を承知で申し上げますが、皇女殿下の間違いを真正面から正せる騎士など、今の時分に一体何人いるだろうかと。それゆえ、興味を持ったのでございます」

支部長の知る限り、皇族が間違いを犯した時に堂々と叱れる人間はそう多くはない。五人もいればいい方だろう。パルドムシーハ卿は有名だし、ウェンラインカー卿もここぞという時には命を懸けて叱るだろう。他にも幾人か心当たりはあったが、どこも現状では味方ではない。

そうなるとティアを叱った騎士――孝太郎の事だ――は、パルドムシーハ騎士団かウェンラインカー騎士団の従騎士あたりが妥当な線になるが、腰に下げた二本の剣の紋章がそのどちらでもなかった。だから支部長はその正体が気になっていたのだ。

「そうじゃろ!?　そう思うじゃろ!?」

ティアは支部長の言葉に目を輝かせ、とても嬉しそうな笑顔を作る。それはまるで自分

が褒められたかのようだった。

「あやつはのう、馬鹿が付くほど騎士の中の騎士なのじゃ！　皇家にとっては絶対の守護者であり、騎士にとっては最高の手本なのじゃが、それゆえわらわの言う事を聞かぬ事もある！　とても厄介な男なのじゃっ!!」

そしてティアは大きな身振り手振りを交え、孝太郎がどんな人間なのかを解説する。それもまた、自分自身の事を自慢しているかのようだった。

「それはますます気になります。差し支えなければどちらの御家中の方なのか、お教え願えませんでしょうか？」

ティアが連れてきた風変わりな騎士は、自慢気に話すティアの様子も含めて、支部長に

はとても気になる人物だった。

「残念じゃがまだ話せぬ。少しばかり立場が難しい男でのう、今その出自を明らかにすると困った事になるのじゃ。いずれ折を見て明らかにするつもりではおるがの」

孝太郎が地球で生き延びたフォルトーゼ人の子孫であり、青騎士その人であると公表してしまうと、フォルトーゼには激震が走る。それはクーデターの真っ最中にやる事ではないし、やればかえって信憑性に疑問が付いてしまう可能性が高い。公表する場合には、まずはヴァンダリオン卿を倒し、クーデターを終わらせる必要があった。

「左様でございますか。それではその時を楽しみに待つと致しましょう」

支部長は孝太郎の正体が気になっていたが、皇女が言えないと言っているのだから、そ

れ以上は追及のしようがない。それに支部長が知りたい事の半分ぐらいは既に分かっていたから。

「ふふん、きっと目玉が飛び出るほど驚くぞ」

「おや、それではこの老骨の心臓が止まってしまうかもしれませんな」

「蘇生キットを用意しておくがよい。ふふふっ」

「ははははっ、そう致します」

垣間見たテイアと孝太郎の関係、そして二本の剣に刻まれたアライアの紋章と、テイア

自身の紋章。そうした事から支部長には、孝太郎が非常に特殊な出自の騎士である事は想像がついていた。そして恐らくティア自身の思い人である事も。つまりティアの結婚式まで待てば、自動的に孝太郎が何者なのかは分かる。急がずともいずれ謎は解けるだろう、支部長はそんな風に考えていた。

孝太郎達とオオヒメの仲間達との連絡がついたのは、エルファリア派の秘密基地へやってきてから幾らか経ってからの事だった。電子メール程度ならともかく、直接顔を合わせての通信の場合は、安全を確保する為に様々な手を打つ必要がある。おかげですぐに連絡をとる事が出来なかったのだ。

「ルース、元気にしておったか？」

『殿下！　おやかたさま！』

一番最初に姿を見せたのはルースだった。彼女の場合はティアとの付き合いが長く、主君と家臣という繋がりもあって、単純に幼馴染を心配する以上の感情がある。おかげで元気そうなティアの表情を見て、思わず涙を零していた。

「泣くような事か」

ティアは通信装置が投影したルースの立体映像に笑いかける。立体映像は精巧で、頬を伝う涙の一つ一つがはっきりと映し出されていた。

『泣くような事でございます！　まったくもうっ、無茶ばかりなさって！』

「心配かけてすまぬ、ルース」

ティアの方は事前にオオヒメが無事に到着したという話を聞いていたので、ルースのように泣いてしまうような事はなかった。しかし実際に無事だった幼馴染の顔を見ると、深い安堵の気持ちが湧き上がる。だから素直に心配をかけた事を詫びておく事にしたティア

だった。

『御無事で何よりです、テイア殿下』

ようやく気持ちが落ち着いたのか、立体映像のルースは涙を拭いながら微笑んだ。そして顔から手が離れるかどうかというタイミングで、ほんの一瞬だけルースの視線がティアから外れた。

「……これ、こっちへ来ぬか」

「おおっ？」

ルースの僅かな動きを敏感に察知したティアは、近くにいた孝太郎の腕を引っ張って、強引に通信機の傍に立たせた。これでルースの側にはティアと孝太郎、両方の顔が大きく表示されている筈だった。

「ホレ、そなたも何か言うてやれ」

「俺も？」

ティアはルースが孝太郎を気にしていたので、話をさせてやりたかった。しかし孝太郎の方は二人で通信機の前に立つと窮屈だし、緊急時なので長くなっても困るから、通信はティアに任せるつもりでいた。おかげで『なんで？』という顔で間近にあるティアの顔を見つめていた。

「バカ者っ！」

ゴンッ

「いてっ」

相変わらず女心を理解しない孝太郎に苛立ち、ティアは鉄拳制裁する。拳には思わず強い力が込められていた。

「別に長々と話せという訳ではない！　ただ、そなたの元気そうな顔を見せて、声を聞かせてやれと言っておるのじゃ！」

「分かったよ。そんなに怒らなくていいだろ」

どうやら女の子特有の心理が問題になっているらしい事を理解した孝太郎は、ティアの言う通りにする事に決めた。そしてティアに代わって席に着くと、立体映像のルースに向かって話し掛けた。

「……俺も無事です。ルースさん達は大丈夫ですか？」

『はい、おやかたさま。皆様大変元気にしていらっしゃいます』

「それはそれで心配ですけど」

『まぁ……ふふふっ』

ルースの顔に明るい笑顔が浮かぶ。情報としては無事だと分かっていても、実際に顔を合わせるまではしっくりこない。ルースはこの時にようやく、孝太郎の無事を納得する事が出来たのだった。

「うむ、それでよいのじゃ」

ティアは孝太郎の背中に抱き着くようにして肩から顔を出し、したり顔で頷く。丁度早苗がいつもやっているような格好だった。すると立体映像の撮影範囲外から、その早苗の声が聞こえてきた。

『孝太郎孝太郎、みてみて！　変なトカゲ捕まえた！』

『きゃあっ!?』

ルースの鼻先に見慣れない姿をした小型の爬虫類がにゅっと突き出される。突然の事に驚いたルースが仰け反ると、爬虫類を突き出した張本人、早苗が立体映像の撮影範囲に入ってきた。

『すごいでしょ!?』

「大物だな、どこで捕まえたんだ？」

『外の森。変なのがいっぱいいたけど、これが一番変だったから捕まえてきたの』

「そっちに行ったら見たいから、餌やっておいてくれ」

『わかったー！』

『グギャー』

早苗の元気な返事とトカゲの鳴き声を最後に、早苗が映像から姿を消す。その代わりに現れたのは真希とナナ。オオヒメ側の少女達は、少しずつ元気そうな様子を孝太郎達に見せるつもりでいるようだった。

『里見君、ゆりかの具合はどう？』

「ずっと緊張してたのと、魔法を使い続けたせいで疲れたみたいでね。今は向こうで寝てるよ」

『里見さん、出来ればゆりかちゃんの姿を見せて貰えないかしら？』

フォルサリア出身の二人は、ゆりかの事を心配していた。無事だという話は聞いていたが、寝込んでいるという部分がずっと気になっていたのだ。

「分かりました。……えーと」

ゆりかが心配な気持ちはよく分かるから、孝太郎はゆりかの様子をナナ達に見せてやり

たかった。しかし通信装置の操作方法が分からず、一瞬動きが止まる。

「こんな所でどうじゃろか」

孝太郎が困っているのを感じ、肩から顔を出しているティアが手を伸ばして通信装置を操作した。すると予備のカメラが動き出し、眠っているゆりかの姿を撮影し始めた。

「……うぇっへっへっへ、あげませんよぉ、これはわらしのやきいもれすぅ……」

ゆりかは口を半開きにし、毛布を蹴飛ばし、剥き出しのお腹を掻きながら豪快に眠っていた。何事か寝言を呟いていたが、通信機までは届いていない。しかしゆりかの様子からすると、それがどういう内容なのかは誰にでも簡単に想像がついた。

『……あ～～～、えーとぉ……』

『ゆりかちゃんらしいわね』

そんなゆりかの様子を見て真希とナナは苦笑する。寝込んでいると聞かされて、真剣に心配していた二人。しかし想像していたゆりかの姿と、実際の姿には大きな落差があり、二人は感情のやり場に困ってしまった。本当に疲れて眠っているだけで、それ以外には全く問題がなさそうなのは一目瞭然だった。

『……ともかく、ゆりかちゃんが無事みたいで安心したわ』

『みんなで元気に戻って来て下さいね』

「ありがとう。気を付けるよ」

「ユリカにも伝えておくぞ」

真希とナナは笑顔(え)とも苦笑ともつかない、何とも言えない表情で姿を消した。その気持ちは孝太郎とティアにもよく分かる。そして何故(なぜ)か妙(みょう)に申し訳ない気分だった。

『里見君、ティアミリスさん』

真希達に続いて姿を現したのは晴海(はるみ)だった。

「桜庭先輩、お久しぶりです」

『何日も森の中を彷徨ったって聞きましたけど、大丈夫でしたか？』

「俺もティアも体力にだけは自信がありますから」

「……コータロー、わらわは体力以外にも自信があるぞ？」

「言葉のあやだって。お前がぶさいくとか、頭が悪いとかいう意味じゃない」

「ならよい」

『あはは、元気そうで安心しました』

「桜庭先輩は大丈夫ですか？　慣れない生活だと思いますけど」

孝太郎からしてみると、一番争い事から遠い存在は晴海だろう。性格上の問題だけならゆりかの方が争い事に向かないだろうが、健康問題や戦士としての修行を積んでいない事などまで合わせると、晴海が一番心配だった。

『こういう時はアライア様の記憶が助けて下さいます』

「なるほどのう、道理で落ち着いている訳じゃ」

しかし幸い、晴海はアライアの記憶を持っている。こういう局面を何度も乗り切ったアライアの記憶は、晴海の大きな助けとなっていたのだ。

「お前もそろそろ落ち着けよ」

「言葉に棘があるぞ！」

『ふふふっ』

晴海は孝太郎とティアのやりとりを聞いて楽しそうに笑うと、映像から消える。その代わりにやってきたのは不機嫌そうなクランだった。

『……早速わたくしを置き去りにしましたわね、ベルトリオン』

「いきなりなんだよ」

『必要だと仰ったくせにっ』

「これは不可抗力だろう」

『大方、今後もずっと不可抗力が続くんでしょうよっ』

クランは孝太郎の相棒を自認しているのに、置き去りにされた事が不満な様子だった。表示されている彼女の立体映像は、恨みがましい視線を送って来ている。そんな彼女の様子を見て苦笑したのがティアだった。

「クランや、素直に心配していましたと言った方が良いぞ。そなた自身の為に」

『わたくしは――』

「心配してくれておったのじゃろう？」

『そんな事ありませんわ！』

『嘘だ』

そんな時、クランの横にキリハが顔を出した。

『クラン殿はここ数日、落ち着かない様子で通信所のあたりをうろうろしていた。クラン殿の姿が見えなかった時の孝太郎と同じだ』

そしてキリハはいつもの悪戯心満載の笑顔でクランの本音を暴露してしまう。

『キイ!?　う、う、嘘ですわっ、そんな事っ!!』

クランは顔を赤くしてキリハに抗議する。

『本当に？』

『そ、そういうあなただって、ずっとあのカードとにらめっこしていたじゃありませんのっ！』

『ほう……「あなただって」？』

『ウグッ』

だがキリハはどこ吹く風。実に楽しそうにクランを追い詰めていた。

「そんな所じゃろうの。コータロー、何か言ってやるがよい」

「あいつめ……」

幸か不幸か、孝太郎にはクランの気持ちがよく分かる。仕方なく孝太郎は自分の方が折れる事にした。

「クラン、心配かけて悪かったな。みんな元気でやってる。次はちゃんと連れて行くから勘弁してくれ」

『……約束ですわよ』

クランは憮然とした表情で立体映像の撮影範囲から出て行ってしまう。だがその心中は顔程には悪くない。孝太郎に当たるのは、三人を心配していた反動なのだ。そんなクランの姿を笑顔で見送ると、キリハは改めて孝太郎の方を見た。

『ところで、我には何か言う事はないのか？』

キリハの悪戯心は今度は孝太郎に向けられた。キリハは以前、孝太郎に共に生きると告げた。そのキリハを置き去りにした孝太郎には、彼女も不満を抱えていた。

「今ここで言った方がいいか？」

だが孝太郎は、キリハの悪戯心が本当に重要な局面では発揮されない事をよく知っている。だからこれが見かけだけの悪戯心であり、無事でよかったという言葉を置き換えただ

けのものである事は分かっていた。だから孝太郎は動じる事なく笑顔を返した。

『いや、二人だけの時に』

「また後でな」

『うむ』

結局孝太郎の思っていた通りに、キリハは特に絡んだりはせずに姿を消した。しかしそれは同時に、いずれ散々甘えたりからかったりするぞという意思表示でもある。それが多少恐ろしくもある孝太郎だった。

『聞いてよー、ティアちゃーん、里見くーん！』

そんな時、やってきたのが静香だった。彼女は何故か半泣きになっていて、久しぶりに再会したティアと孝太郎を、潤んだ瞳で見つめていた。

「お久しぶりです、大家さん」

「何があったのじゃ？」

『荷物運びの手伝いをしてたら、床板を踏み抜いちゃったのよー！』

静香が泣いていたのは、彼女の体重が原因だった。大気圏に突入する際、アルウナイアが大量に魔力を消費した為、静香の体重は百五十キロを超えていた。体重計に乗ったりしなければバレたりはしないので、今回は彼女も気にしていなかったのだが、そこに落とし穴があった。床板として張られていた木材が、彼女と荷物の合計重量に耐え兼ね、下の階に落ちてしまうという悲劇が起こったのだ。

『それ以降、なんだかこの基地の人に重い女だって思われてるみたいなのぉ～～～』

一緒に荷物運びをしていた者達は大丈夫で、静香だけが落ちた。助け上げる時もなんだか重かった。おかげで彼女の体重に関する噂がまことしやかに囁かれるようになった。見た目の百倍重い女。果たして重いのは体重だけなのか――静香にとっては悪夢のような状況だった。

『もうお嫁に行けない～～～!!』

「まあまあ、落ち着いて大家さん。別に大家さんが重い訳じゃないじゃありませんか」

『そんなのここの人には分からないわよぉ～～～!!　もう死んでしまいたい!!』

「体重なぞ、相手の考え方次第じゃろう」

『儂もそう言ったんだがなあ……ずっとこの調子で』

『おじさま達にモテても仕方ないのよ！』

「あは、あはははっ」

孝太郎は何とも言えず、誤魔化し笑いをするのが精一杯だった。こういう時の女性が非常に危険な生き物である事は孝太郎もこの一年半ほどで学習していた。

『こうなったら里見君がお嫁に貰って!!』

「心配しなくても、地球に帰れば大丈夫ですよ、大家さんなら」

『本当に？』

「ええ」

『駄目（だ）だったら面倒（めん）見てくれる？』

「駄目だったらで良ければ」

『ふぅん、約束だからね？』

「はい」

ここで静香はようやく落ち着きを取り戻した。そんな彼女の様子に、孝太郎は胸を撫で下ろす。苦労人の静香なので、いつも明るく元気でいて欲しかったのだ。

『それじゃ、みんなで早くこっちに戻ってきてね？　待ってるから』

「はい、また後で」

「またの」

そして静香は笑顔で通信機の前から去っていった。それを見送った後、ティアはすぐ近くにある孝太郎の顔をじっと見つめる。

「……」

「なんだ？」

「いや、なんでもない」

もし地球に帰った後、静香が意図的に男性を遠ざけたら、一体どうなるのだろう？

ティアは孝太郎が静香と何気なく交わした約束が、非常に重要な意味を持つ事に気付いていたが、それを孝太郎に伝えようとはしない。それは、別段誰かが損をするような話ではないからだった。

『ティア、レイオス様』

そして最後に姿を見せたのは、ティアの母親のエルファリアだった。彼女の場合は再会を喜び合うだけでなく、今後の話もしなければならない。それであえてこのタイミングでやってきたのだった。

「母上！　お久しぶりです！」

「お前も無事でよかったな、エル。それで早速だが……お前は大丈夫なのか？」

挨拶もそこそこに孝太郎は本題に入る。その瞬間、孝太郎の表情から少女達と話をしていた時の明るい雰囲気が消え失せる。それは伝説の英雄、青騎士の顔だった。

――このお顔をさせたくないが為に頑張ってきた……ならば……！

エルファリアは自身も皇帝の顔に戻ると、孝太郎の求めに応じて現状と今後の事を話し始める。今は一刻も早く問題解決に向かうべき時だった。

『残念ながらあまり大丈夫とはいい難い状況です。支持率では負けておりませんが、消極的に軍部の行動を支持する声が多くなってしまっております』

この辺りの事は孝太郎も知らされていた。支部長の老人が教えてくれた内容だった。エルファリア派と軍部とでは、支持率はほぼ互角。だが態度を決めかねている層が裁判で決着を付けろと求めるので、結果的に裁判に出たくないエルファリア派が不利という状況だった。

「裁判に出れば作られた証拠で負けてしまう。出なければ軍部に武力行使の正当性を与えてしまう、か」

『既に各地で小競り合いが起こっております』

軍部は十分な証拠を捏造してから事を起こしている。従って無策で裁判に出れば確実に負けてしまうだろう。軍部はそうやってエルファリアが裁判に出られない状況を作った上で、堂々と武力行使をしている。完全に向こうの計画通りに進行している状態だった。

戦闘は既に各地で始まっている。これは軍部の支配が弱い外宇宙の植民星が主で、フォルトーゼ星系内でも幾つか起こっている。星系内ではやはりこの『アライア』が抵抗活動の中心地だった。

「確かここへ戻れれば手はあると言っていたよな？」

『はい。こちらが裁判に出られない原因は軍部が作った証拠です。その尻尾は掴んでいますから、そこを突き崩します』

「しかし向こうもそれは警戒しているだろう？」

『その筈です。こちらの動きを封じるべく、大攻勢を仕掛けてくるかと。国民へ訴えかけて支持を集め、軍部の動きを封じねばなりません』

以前エルファリアが捕まった時、軍部は内部で混乱を起こした。エルファリアという大き過ぎる戦果を持て余したのだ。その時にエルファリア派が収集した情報の中に、軍部が証拠の捏造をした事に繋がる、断片的な情報が含まれていた。エルファリア派はそうした情報を分析して、少しずつ核心に迫りつつある。だが当然、軍部はエルファリア派が核心に至る前に鎮圧しようと兵力を送ってくるだろう。

その対策として、エルファリアの帰国が必要だった。エルファリア自らが国民へ訴えかけて支持を集める事で、軍部の動きをけん制する事が出来る。そうやって正当性を主張し軍部との対決姿勢が明確になれば、味方も増えるだろうし、陰謀の核心へ至る時間も稼げる。エルファリアが地球に居たままでは出来ない事だった。

『私は遠からず国民に向かって演説をする事になるでしょう。今はその為の準備が進行中です』

「難しい戦いだな。今にして思えば、マクスファーンとの戦いは単純だったよ。あいつは分かり易い悪党だった」

孝太郎は両腕を組み、難しい顔で考え込む。二千年前の戦いにおいては、マクスファーンは誰にでもそれと分かるクーデターを起こした。だからマクスファーンを倒せば問題は解決すると誰もが知っていた。しかし今回の戦いはそうではない。水面下で静かに進行してきたクーデターであり、国民は誰が黒幕なのかを知らずにいる。ただヴァンダリオンを倒しただけでは何も解決しない。全く性質の違う戦いが進行していた。

『レイオス様はただ英雄でいらっしゃれば良かったのですものね』

「今回は裏方だ。……ティアの事は任せろ。絶対無事にそっちへ届ける」

『お願い致します』

エルファリアのアキレス腱は娘のティアだ。エルファリアは不退転の覚悟で事に臨んでいるが、ティアの命が危険に晒された時にも冷静な判断が出来るかどうかは分からない。孝太郎がティアを守り切れるかどうかは今後を大きく左右する問題だった。

「それと俺がそっちへ着いた後はどうなる？」

『高い確率でヴァンダリオン卿が差し向けてくる皇国軍と、対決する事になるかと思います』

エルファリアが国民に対して訴える前に制圧、というのがヴァンダリオン側の最善の手段となるだろう。またエルファリアの演説を阻止出来なくても、各騎士団が世論に押されてエルファリアに付くまでは多少時間がかかる。その前に決着を付けられれば結果は同じだ。ヴァンダリオン卿は確実に攻勢に出て来る筈だった。

「……分かった。そっちのみんなにもその準備をさせておいてくれ」

孝太郎がこの言葉を発した時の覚悟は重い。一番戦いから遠ざけておきたい人々に、戦いをしろと言っているからだ。究極的にはそれが一番みんなが平和に暮らせる方法だという事は分かっているのだが、それは言い訳にはならないだろう。孝太郎はこの戦いに勝つ為に、少女達の命を使うのだ。全てが終わった後には、少女達にそれを強いた責任を負う必要があるだろう――孝太郎はそんな風に考えていた。

その時だった。

「コータロー」

孝太郎の背中に乗っていたティアが、不意に抱き付く力を強めた。そして孝太郎の耳元に口を寄せ、小声で囁く。

「その責任はわらわと母上が一緒に背負う。一人きりで背負う事はない」

ティアの囁きは強い意志と深い優しさを感じさせた。

勝つも負けるも共に。

ティアはそう覚悟を決めていた。

「……ああ、そうだったな」

そして孝太郎も覚悟を決める。

ティアやエルファリア、そして多くの仲間達と共に、必ずこの戦いに勝利する、と。

エルファリアの話は、そこから実務レベルの話題に移っていった。そうなると孝太郎よりはティア、そして支部長が話の中心となる。ティアをどのように安全に移送するか、そういう話が続いていた。孝太郎は戦いや大まかな戦略ならともかく、現代ソォルトーゼの事情に関しては詳しくない。意見を求められた時に返事をする以外は、話を聞きながら眠り続けるゆりかの世話を焼いていた。

「うぇふぇふぇ、ふぇふぇふぇ～」

「……お前、一応皇女殿下のお連れ様なんだから、ちゃんとしろよもう……」

孝太郎はゆりかの口元をハンカチで拭う。ゆりかは食事の夢を見ているようなので、孝太郎の経験上、起きたら間違いなく食べ物を要求する。そこで枕元には既に、軽食とドリンクのボトルが用意されていた。ゆりかを知り尽くした孝太郎ならではのお世話と言えるだろう。

「母上、補給をして貰えた訳ですから、わらわ達が自力でそちらへ向かう方が良いのではありませぬか？　護衛を付ければ、ここの兵力が減ってしまいます」

『ティア、気持ちは分かりますが……ヴァンダリオン側にあなたたちだけで行動してい

ると分かってしまう事が危険なのです。あなた達だけでは目立ち過ぎます。それで戦いが起こってしまえば、護衛を付けなかった意味がなくなってしまうでしょう？』

「皇女殿下、ここは私共の車両をご利用下され。それが一番誰(だれ)の為にもなるかと」

「……分かった、そうしよう」

今後の孝太郎達は、エルファリア派が用意した乗り物を使って、オオヒメ組との合流を行う事に決まった。孝太郎の鎧(よろい)とティアのコンバットドレスには補給が済んでいるので、自力で移動する事も可能なのだが、大局的な観点からエルファリア派の人達の世話になる事にした。移動一つとっても有機的な問題が生じるのが、戦争というものの難しさだろう。

「ふ、ふげ……しゃ、とみしゃん……？」

「おう、起きたかゆりか」

「あれ？　ここは……？」

ティア達の話が終盤に差し掛かった頃、支部へやってきてからずっと眠っていたゆりかが目を覚ました。眠っていたせいで状況が全く理解できない彼女は、不思議そうに周囲の様子を眺めていた。

「ここはエルファリア派の秘密基地の一つだ。お前、ここへ着くなり安心して倒れちまったんだ。覚えてないか？」

「えと……ああ、なんかそんなような事があった気がしますう」

孝太郎の言葉を呼び水にして、ゆりかの寝ぼけ気味の頭が働き出す。ここへやってきた所までの記憶は辛うじて残っていた。そして頭が働き始めた事で、ゆりかには一つだけ心配事があった事を思い出した。

「里見さんっ、皆さんは無事ですかぁ!?」

「安心しろ、向こうと連絡が取れた。みんな無事だ」

「そうなんですかぁ？」

「ホラ、あそこでティアがお母さんと話してるだろ？」

「あっ、良かったですぅ～～」

ゆりかも仲間の事はずっと心配していた。だから無事だと聞かされただけではすぐには喜べなかったのだが、ティアがエルファリアと話している姿を見た事で実感が湧いた。おかげでゆりかは大きく安堵し、いつもの笑顔を浮かべた。

ぐぅ～

同時にゆりかのお腹も安堵したようだった。

「え〜、え〜〜〜〜〜」

「お前は何処まで行ってもゆりかのままだな。ホレ、これを食え」

「ありがとうございますぅ、えへ、えへへへへ」

流石のゆりかもこのタイミングでお腹が鳴ったのは恥ずかしかったので、孝太郎から食事を受け取った後も誤魔化し笑いを続けていた。しかし食べ物の誘惑には逆らえず、幾らもしないうちに食事を始めた。

「いっただっきまーす！　はぐっ」

ドンッ

「おじいちゃんっ！」

ゆりかがフォルトーゼ式のサンドイッチにかぶりついた、まさにその時。勢いよく秘密基地の入り口のドアが開き、一人の少女が飛び込んできた。孝太郎達をこの場所へ連れて来てくれた、あの少女だった。

「ふぐぅっ!?　ふぐぐんぐんっ、ぐぐぐぐんっ!!」

これに驚いたのがゆりかだった。そしてかぶりついたばかりのサンドイッチが喉（のど）に詰まり、苦しみ始める。

「ホレ、これを飲め」

だが孝太郎も慣れたもの。何となくゆりかが食べ物を喉に詰める予感がしていたので、慌てず騒がず、あらかじめ手に持っていた飲み物を彼女に差し出した。

「んくんくんく……ぷはぁ～～死ぬかと思いましたぁ～～」

おかげでゆりかは事なきを得た。そして彼女は食事を再開しつつ、飛び込んできた少女の姿を眺め始めた。これは孝太郎も同じだった。

「一大事よ、おじいちゃんっ!!」

「これ、落ち着きなさい。陛下と殿下の御前であるぞ？」

「で、でも本当に一大事なのよ！」

「よい、話してみよ」

本来はティアやエルファリアに挨拶がいる状況だ。特に彼女はエルファリア派の支部長の孫娘であるから、礼儀はきちんと弁えている。その彼女が挨拶を忘れている状況に、ティアは本当に重要な話であると感じ取り、手順を飛ばして先を促した。

「皇国軍――じゃなくて、クーデター軍がトレーラーで兵器を運搬するみたいなの！私達と戦う為の新兵器らしいんだけど、まだ組み立て前みたいで！　だから今のうちにト

レーラーを攻撃しようって、他の支部から連絡が！」

少女が掴んできたのは、ヴァンダリオン側の新兵器輸送の情報だった。極秘で開発された機動兵器を複数のブロックに分解して運び込み、極秘で組み立ててエルファリア派側の拠点を急襲する。エルファリア派が事前に察知したから良かったものの、そうでなければ新兵器による奇襲を受けた筈だった。

「ティア！」

「有り得る！　先手を打たねば大変な事になるぞ！」

新兵器と聞いて、孝太郎とティアが真っ先に思い出したのがエウレクシスだった。

――この間のウォーロードⅡと、改良されたモーターナイトの群れだったら……準備ができていないエルファリア派は崩壊するぞ！

エウレクシスが作った機動兵器は、孝太郎達を何度も危機に陥れてきた。それが戦線に投入されるというだけでも危険なのに、彼らは今、魔法と霊子力技術まで携えている。それがどんな結果をもたらすのか、考えるだけで恐ろしかった。

「母上、ＤＫＩの新兵器です！　すぐに攻撃を！　放置すると危険です！」

『ＤＫＩ……分かりました、兵を出します』

「わらわとコータローも向かいます！」

『お待ちなさい、ティア。あなたは予定通りこちらへ向かいなさい』

「しかし！」

『組み立て前ならあなた達が出る必要はありません。むしろあなた達を誘き寄せる罠かもしれないのですよ』

「ですが、相手は――」

「落ち着いて下さい、ティアミリス皇女殿下。皇帝陛下のお言葉は正しいかと」

「コータロー……」

孝太郎の言葉が敬語だった事で、ティアは少し冷静になった。青騎士の判断なら、耳を傾けざるを得なかった。孝太郎はティアの目の前までやってくると、そう判断した理由を話し始めた。

「タイミングが良過ぎます。私達を捕まえられなかったこのタイミングで、この近辺に流れている情報なのです」

孝太郎とエルファリアが心配していたのが、これが森へ降下した三人を捕まえる為の罠であるという事だった。ヴァンダリオン側は三人のうちにティアが含まれているかどうかは別としても、その重要な仲間である事までは知っている可能性が高い。それはつまりティアとエルファリアに対する強いカードとなる訳なので、身柄を押さえる為に手を打って

来る場合が考えられた。それを考慮に入れると、このタイミングでこの地域に流れている新兵器輸送の噂が罠である可能性は十分にあった。孝太郎達が飛び抜けた強さを持っている以上、噂を聞けばやってくるかもしれないのだ。

「輸送用のトレーラーを攻撃するだけなら長距離攻撃で済みます。もしそれを防がれるようなら元から罠という事。その場合は即座に撤退命令を出します」

別に軍隊を襲撃しようという訳ではない。一般車両のふりをして新兵器を輸送しているトレーラーを攻撃するだけなので、大型砲やミサイル、無人機で足りる。トレーラーにそれを防ぐだけの十分な準備があるなら、高確率で罠なので撤退すればいい。孝太郎の考えでは、どちらにしろティア達がわざわざ出なくてもいい問題だった。むしろティア達が向かうと、リスクだけが高まるように思われた。

「……分かった。コータロー、恐らくそなたの言う通りじゃろう。我らは母上達との合

流を優先する」

孝太郎の考えは筋が通っている。ティアは自分が出ていきたい気持ちをぐっと堪え、エルファリア達との合流を決めた。孝太郎は小さく微笑むと、その肩に手を置き、ティアにだけ聞こえるように小声で囁いた。

「……お前の気持ちはよく分かる。兵士達に、国民達にだけ危険な事をさせたくないんだろう？」

「……うむ」

「……だったら急いでエル達の所へ行こう。でないとヴァンダリオン達はこういう手を次から次へと打って来るぞ」

目先の問題に囚われていては、むしろ被害は広がる。国民を傷付けたくないなら、早々にこの地域を抜け出す事が重要だった。

「すまんな、目の前しか見えぬ愚かな皇女で」

孝太郎の言葉でようやく気持ちの整理がついたティアは、ここで笑顔を覗かせた。それはどちらかというと恥ずかし気で、自嘲気味の笑顔だった。その笑顔を見た孝太郎は、ティアから離れて青騎士の顔に戻った。

「血筋でしょう。マスティル家の方々は、昔からそのような傾向がございます」

アライア、シャルル、エルファリア、テイア。孝太郎が知る限り、その全員が国民をどう守るかで心を痛めた。時には目の前の国民を救えず、涙する事もあった。

「しかしだからこそ、我ら騎士はマスティル家の家臣である事を誇りに思うのです。きっと国民も同じ気持ちでありましょう」

国民一人一人を思う皇族であればこそ、命をかける意味がある。二千年前の世界においては、そうやって多くの国民が立ち上がった。騎士であろうが、平民であろうが、その点に限れば同じだった。そしてそれはきっと、今も同じであるに違いない――孝太郎はそんな風に思っていた。

「ありがとう、コータロー」

「そのお言葉は、いずれ民達に」

「そうじゃな、そなたの言う通りじゃ」

ティアの笑顔が花のように美しいものへと変わる。この支部にいたエルソァリア派の人間の誰もが、この皇女の家臣で良かったと思う程に。

――本当に、この若者は何者なのだ？　一体どのような経験を積めば、このような見事な騎士たり得るのだ？

そして同時に、心身共に皇女を守る青い鎧の騎士の存在を、誰もが不思議に思った。

呉越同舟　十一月二十四日（水）

分解された新型兵器を運ぶトレーラーは、孝太郎達がいる地域を通って大きめの都市へ向かうらしい。その都市にはエルファリア派に付いた軍事基地があるので、そこを奇襲するのが狙いだと思われた。

「どうして基地を直接空爆しないんだ？」

「市街地に近過ぎるのじゃ。爆撃機による空爆や、戦艦による対地砲撃では、事前に通告せねば民間人に多数の死者が出る」

「通告すると基地側に対策されちまうな。だからといって通告なしでやれば世論は反発必至と」

「そうじゃ。更に言うと、民間に被害が出るという事は、市街地への対地攻撃がなされたという事。銀河条約の交戦規定にも違反する」

「正義は我にありとは言えなくなっちまうのか」

「もう少し時間が経っていればメディアや通信を完全に掌握して、平気で対地攻撃してくるかもしれんが、現状では現実的ではない」

「なるほどな、それで新しく開発した強力な機動兵器で奇襲って話になる訳か」

孝太郎達はトレーラーを攻撃する部隊と一緒に移動していた。トレーラーへの攻撃は、近隣の地域から集められた兵力によって行われる。その合流地点の手前までは道が同じなので、部隊と一緒に移動していたのだ。

「という事は、お前以前から結構ギリギリの事やってたんだな？」

「ギリギリとは？」

「会ったばかりの頃に『青騎士』の大砲でころな荘吹っ飛ばそうとしたろ」

「真希ちゃんの事もぉ、れーざーほーだったかで撃ってましたよねぇ～」

「しーっ、しーっ！　だまれっ、あれは若気の至りじゃっ！」

ちなみに孝太郎達が移動に使っているのは輸送用のトラックだ。トラックといっても地球のそれとは違い、タイヤを廃して空中に浮遊して走行するタイプだ。おかげで走行音は殆どなく、車内の会話が妨げられるような事はなかった。

「止めてくれたルースさんに感謝しろよ」

「しておる！　わらわがアホだった頃の話はもうよせ！」

「あははは……そういえばぁ、みんなの所にはいつごろ着くんですかぁ？」

「んん？　ええと、移動する距離自体は森を歩いた距離の倍くらいじゃが、二時間もかかるまい」

移動距離は二百キロ余りと、森を移動した距離の倍程度だった。三人を乗せたトラックが全速力で走れば一時間もかからないだろう。だが目立ちたくないので商業用の車両と同じような速度で走っているから、二時間程度になる予定だった。

「あれの倍が二時間かぁ……なんだか切ない気がしますねぇ」

「そんなもんだ。アライア陛下の旅も、この時代の乗り物ならあっという間なんだ」

「旅の概念そのものが変わってしまったからのう」

惑星『アライア』はまだ継続的な開発が続いていて、人口はそれほど多くない。おかげで町と町の間には無人の荒野や広大な森が広がっている。孝太郎達を乗せたトラックは、そこを走る細い道を滑るように進んでいく。森に比べると、その道程はとても速く、しかも穏やかだ。ゆりかが切なくなるのも当たり前だった。

道を走る事およそ一時間、三人を乗せたトラックは一旦道路脇に停車した。この場所で道が大きく二つに分かれる。孝太郎達はここでエルファリア派の兵士達を乗せたトラックと別れ、彼らとは違う道を行く事になっていた。

「皆、無事で帰るのじゃぞ……」

ティアは車外に出て、走り去る兵士達のトラックを見送っていた。本当は兵士達と一緒に行って戦いたい。しかしそうもいかない事情があった。個々の戦闘だけに注目していては勝てないのが、戦争というものなのだった。

「……のう、コータロー。やはりアライア陛下も、このような時には悩まれたのじゃろうか？」

そういうもどかしい思いを、伝説の皇帝はどう乗り越えたのか。ティアの隣にはその答えを知る人物がいた。

「それはお前も良く知っているだろう？」

「そなたの口から聞きたいのじゃ。実際にその姿を見聞きした、そなたの口からな」

「……戦えば兵が死ぬ。民が苦しむ。もしマクスファーンが善政を敷くなら、自分が正義を成す事は独善かもしれない。アライア陛下はそう考えて、一時は兵を挙げない事をお考えになっていた」

孝太郎はよく覚えている。二千年前のフォルトーゼの、収穫祭の夜。アライアは国民の為にマクスファーンの討伐を諦めようとしていた。アライアにとってマクスファーンは父母を殺した男で、国を簒奪しようとする明らかな敵だ。それでも国民の為なら、マクスファーンと戦うべきではないかもしれないと考えていたのだ。

「それでも最後は戦う事を決心された。マクスファーンを放っておいたら、国民が幸せになれないと思ったからだ」

平和を愛するアライアが戦いを決意した意味は重い。国民に一時の苦難を強いてでも、マクスファーンを討ち果たさねばならなかったのだ。マクスファーンが善政を敷く事が、期待できなかったから。

「そのおかげで今のフォルトーゼがある。長い歴史と伝統は、あの時に陛下が戦いを決意された結果なんだ」

「うむ……そうであったな」

分かっていた事ではある。だが改めて孝太郎から聞かされた事で、思いを新たにする。ここまで国や軍を私物化しているヴァンダリオンが善政を敷くとは思えない。戦わねばならない局面だった。

「……わらわと共に戦っておくれ、兵士達よ……武運をな……」

それでも、もどかしい思いは消えない。だが消えてしまえば暴君の始まりだ。だからその複雑な思いを抱えたまま、テイアは戦うのだろう。その果てにこそ、正しい未来が広がっていると信じて。

孝太郎達が一旦停止したのは、偵察兵を先行させる為でもあった。多くの味方から離れて移動する事になるので、警戒は必要なのだ。その為、孝太郎達が再出発したのはトレーラーを攻撃する兵士達と別れた数分後の事だった。

偵察兵を先行させると言っても、この場所は既にパルドムシーハ家が管理する地域なので、突然攻撃を受ける可能性はそれほど高くはない。それにこの場所にティアがいるという情報を敵が持っている可能性も低い。これはあくまでも念の為の処置だった。おかげで移動は先程までと変わらず静かだった。

だが、その静寂はトラックを運転するエルファリア派の兵士の声によって破られた。

『皇女殿下、先行する偵察兵が高速で飛行して接近する物体を捕捉！　前方十一時半方向です！』

兵士の声は緊張で張り詰めている。皇女を乗せての任務なので、彼にとって何者かの接近は通常のそれよりも遥かに深刻な事態だった。

「物体とは何じゃ!?　敵か!?」

『分かりません！　飛行物体なのは間違いないのですが、各種センサーでは上手く判別出来ません！　大きな鳥か、ステルスタイプの小型無人機か、ともかく通常の兵器とは異なるものです！』

先行した偵察兵が警告のメッセージを送って来ていた。偵察兵の小型車に搭載されたセ

ンサーが上空から接近しつつある飛行物体をキャッチしたのだ。だが目標の大きさが小さく、詳細な分析が出来ない。幾つかのデータから、一メートル以上二メートル以下の物体であるという推測は出来ていた。

「コータロー！」

「……この感じだと、相手は多分人間だ！　意志の力が感じられる！」

まだ距離はあったが、孝太郎は接近してくる物体が人間である事を感じ取っていた。孝太郎には早苗が与えてくれている霊能力がある。それが飛行物体の発する霊波を孝太郎に伝えていた。

「敵か!?」

「よく分からない。警戒や焦りはあるみたいだが……明確な敵意はない。向こうの斥候かもしれない」

孝太郎は接近中の人間を敵か味方か判別出来ずにいた。何らかの攻撃任務を負った人物であれば、そういう意思が感じられる筈だった。だがその気配はない。その場合、目的なしに飛んでいると考えるよりは偵察が目的と考える方がしっくりくる。

「……いえ、これは敵です」

だが、孝太郎のこの推測はすぐに否定された。それは先程までの柔和な雰囲気が嘘のように、大真面目な顔をしたゆりかの言葉によるものだった。

「ダークネスレインボゥが向かって来ているんです！」

ゆりかは接近する物体から魔力を感じ取った。孝太郎がそれを人間だという以上、接近してくるのはダークネスレインボゥの魔法少女。そしてそうである以上、ゆりかは戦わねばならない。今のゆりかはその表情も、瞳の輝きも、声の調子も、紛れもなく愛と勇気の魔法少女だった。

「トラックを止めて下さい！」

「どうするつもりじゃ!?」

「迎え撃ちます！　この状況では、こちらの位置はバレている筈です！」

ゆりかの考えでは、敵は彼女達の位置を大まかに掴んでいる筈だった。それが単純な情報収集によるものなのか、それとも予知の魔法によるものなのかは分からないが、高確率でこの辺りに居ると分かっているからこそ、魔法を使ってこれみよがしに飛んでいる。ヴァンダリオンへの優位性を確保する為に、ダークネスレインボウは魔法の力を可能な限り隠しておくだろうから、広い範囲を飛び回っているとは考え辛いのだ。

「分かった、止めるのじゃ！」

『仰せのままにマイプリンセス！』

「行きます！」

トラックが止まるなり、ゆりかは先頭に立って外へ飛び出していく。普段の彼女からは想像できない素早い動きだった。

「ゆりか待て！　一人で行くな！」

孝太郎もすぐにゆりかを追って飛び出していく。

――まったくゆりかときたら、魔法が絡むとすぐこれだっ！

今のゆりかの姿は魔法少女としては正しいものだが、一人の女の子としては間違っている。だからゆりかを戦いに駆り立てる問題を早々に取り除く為に、孝太郎は腰から二本の剣を引き抜いた。

「ブラストファイヤーボール・モディファー・ハイコンセントレートレーション」

孝太郎が剣を構えた時には、既にゆりかは魔法の詠唱に入っていた。今回彼女が使った魔法は、爆発する火球の魔法だ。今回はそれを極限まで圧縮し、破滅的な破壊力を秘めた攻撃魔法に変貌させた。この超高温の火球は大きな爆発力を持つので、直接命中させる必要がない。高速で飛ぶ敵に向かって放つには有効な魔法と言えるだろう。

「どんな様子じゃ!?」

やや遅れてティアも姿を見せる。彼女が遅れたのはコンバットドレスに武装を取り付ける為だ。コンバットドレスにはアサルトレッドとほぼ同じ武装が取り付けられていた。

「もうすぐ見える。前のカーブのあたりから出てくるぞ」

孝太郎は剣を両手に構え、ティアは大型砲の砲口を前方へ向ける。ゆりかの魔法は詠唱が終わり、発射を待つばかり。敵がやってくるよりも早く、迎撃態勢は整っていた。

「来るぞ！」

孝太郎が声を上げた直後、前方二百メートル程の位置にある森の木々を飛び越えるようにして何かが姿を現した。そしてそれは、予想された通りに魔法使いの少女だった。

「レインボゥ!!　やっと見付けたっ!!」

「クリムゾンさんっ!?」

向かって来ていたのはダーククリムゾン。暗い色相の赤で染め上げられた独特の衣装、そして燃えるような赤い髪。ダークネスレインボゥの幹部の中では、最強の攻撃力を誇る紅蓮の魔法使いだった。

「あいつか！　道理で真正面から来る訳だ！」

「一番厄介なのがきよった！」

得意な魔法が単純な攻撃魔法であるが故に、先制攻撃を許せば大変な被害が出る。だから孝太郎達は早々に彼女を攻撃する事に決めた。クリムゾンが呪文の詠唱を始める前に倒

さねばならなかった。

「待ってっ、戦う気はないわっ!!　あんた達に伝えたい事があるのよ!!」

だがここでクリムゾンは驚くべき行動に出た。戦いが全てだと公言しているクリムゾンが、戦う気はないと宣言し、手にしていた魔法の杖を投げ捨てたのだ。そして彼女は両手を空にしたまま、無防備に向かってくる。魔法の呪文を詠唱するような事もなかった。

「ユリカ、どうじゃ？」

「魔法を使う気はないようですが……」

「あいつ、今も敵意がないままだ。真意は分からんが、戦う気がないのは本当らしい」

孝太郎は今もクリムゾンに敵意がない事を確認すると、二本の剣を鞘に戻した。ティアも孝太郎の判断に従って武器を下ろす。ゆりかはそのまましばらく接近してくるクリムゾンに杖を向けたままだったが、クリムゾンが攻撃の兆候を見せないまま減速を始めた時点で杖を下ろした。

「疑り深いわねぇ、レインボゥ！」

「あなたが戦わないという理由が想像出来ないだけです」

「そりゃそうだわね！」

クリムゾンは苦笑しながら孝太郎達の前に降り立った。相変わらず戦うつもりはないようで、両手は空っぽ。愛用の杖は数十メートル後方に転がっていた。

「それだけ急ぐ話なのよ!!」

クリムゾンはやってくるなり本題に入った。彼女に与えられた時間は少ない。いつも楽しそうにしているのに、この時ばかりは焦っていた。

「あんた達の仲間は、罠に嵌まろうとしてるわ!!　すぐに呼び戻して!!」

「なにぃっ!?」

孝太郎は驚きに目を剥く。それは本来敵であるクリムゾンの口から出てくるような言葉ではない。戦いが全ての彼女の場合は特にそうだった。

「どういう事ですかっ!?」

ゆりかの声は厳しい。孝太郎と同じく、クリムゾンの言葉には懐疑的だった。

「皇国軍が運んでいるのは機動兵器じゃなくて、ウイルス兵器！　ヴァンダリオン達はそれをあんた達の仲間に破壊させようとしているのよ！」

それがクリムゾンがここにいる理由だった。彼女はヴァンダリオンの思惑を阻止する為に、孝太郎達を捜しにやってきたのだ。

「偽情報に踊らされているのよ！　エルファリア派は自らの手でウィルスを撒き散らして基地を壊滅させ、巻き添えで周辺の住民を虐殺してしまう！」

ヴァンダリオンの策略は非常に計画的だった。この惑星『アライア』も開拓初期には多くの反政府勢力が拠点を構えていた。今は使われていないそうした拠点の廃墟からは、時折その頃の武器が発見される事がある。そうした武器の一つとして、ウィルス兵器が発見された――事にするのがヴァンダリオンの策の出発点だった。実際はそんなものはなく、ウィルス兵器はヴァンダリオン自身が持ち込んだ物だ。続いて『廃墟から発見されたウィルス兵器を処分する為に、処分が可能な施設を持つ基地へ輸送する』という命令を出す。盗まれたりしては困るので、ウィルス兵器を運ぶルートや時間を公表する筈もなく、これは当然極秘扱いになる。それを利用して、極秘に機動兵器が運搬されるという情報を複数のルートを使って流す。また実際に新しい機動兵器も『アライア』へ搬入して情報に信憑性を持たせる。だが、実際に運搬されるのはウィルス兵器なのだ。直前までは機動兵器を運搬しているので、これを見破るのは難しい。

機動兵器で奇襲されるのは困るし、分解して運搬中なら成果を挙げやすい手頃な目標なので、エルファリア派はこの策略に引っ掛かってしまった。このまま放置すればエルファリア派はウィルス兵器を載せたトレーラーを攻撃し、自らの手でこの星にウィルス兵器を撒き散らす事になる。近くにあるエルファリア派側の基地はもちろん、近隣の住民がどうなるのかは火を見るより明らかだろう。

「当然、ヴァンダリオンはその事実を利用して世論を動かすわ!!　別件を取材中のメディアが偶然現場を撮影する事になるのよ!!　エルファリア派はこの一件で大きく支持を落とす!!」

そしてメディアに報道させた上で、徹底的に批判する所までがヴァンダリオンの策略だ。処分の為にトレーラーで輸送していたウィルス兵器を、エルファリア派が攻撃して拡散させた。最低限のモラルは持っていると思っていたのに、結局エルファリア派はテロリストなのか。こういう風に批判されてしまえば、多くの犠牲が出てしまっている以上、エルファリア派が何を言っても無駄になるだろう。これはテロではありません、誰にでもあるちょっとしたミスです――そんな事を言う皇帝を、一体誰が支持するだろう？

ヴァンダリオン側も帰国したエルファリアの次の手は予想している。それが実行される前に、あるいは実行されたとしても、この策略を使えばエルファリアの支持を大きく奪う事が出来る。しかもエルファリア派が策略に引っ掛からなくても腹は痛まないのだから、ヴァンダリオンはその実行を躊躇う筈もなかった。

「……言っている事は分かりますけれど、私達はそれを鵜呑みに出来ません」

ゆりかにもクリムゾンの言葉は筋が通っていると感じられた。そういう可能性は否定出来ないだろう。だがそれでもすぐに信じる訳にはいかない。クリムゾンは違う道を行く敵なのだから。

「そんなの分かってるわ！　だからこのアタシが来たのよ！」

クリムゾンの方もその辺りの事情はよく分かっている。立場が逆なら、当然言葉を疑う状況なのだ。だからクリムゾンは苦手な言葉を尽くして、懸命に訴え続けた。

「よく考えて!!　戦う敵ごといなくなったらアタシが困るのよ!!」

クリムゾンが来たのは、彼女が伝えるのが一番説得力があるからだった。クリムゾンにとっては戦いこそが全て。裏返しの意味になるが、策略やウイルスで敵がいなくなる事を

最も望まない人間は他ならぬ彼女なのだ。

――本心だな……彼女は嘘をついていない……。

孝太郎も早苗ほどではないが霊能力で他人の感情が読める。孝太郎の霊能力は彼女が嘘をついていないと言っていた。飛んできた以外には魔法を使っていないから、魔法で誤魔化している可能性もない。そしてそれらを抜きにしても、孝太郎には彼女が本当の事を言っているように思えた。

「……お前の事は信じよう。だが、エウレクシスは何故止めようとしているんだ？」

だがそれでも孝太郎は最後の一歩が踏み出せない。それはエウレクシスの思惑が分からないからだ。クリムゾンが嘘を言っていないにせよ、送り込んできたのは厳密にはエウレ

クシスだ。エゥレクシスはヴァンダリオン側に付いたのだから、エゥレクシスがエルファリア派のプラスになる様な行動をとるのは不自然だった。

「あいつもアタシ達も、善人を名乗ろうなんて思っちゃいない！　それでも全ての手段を許容する訳じゃないわ！」

クリムゾンが戦う相手が居なくなっては困るように、エゥレクシスにも多くの死者が出ては困る事情があった。

エゥレクシスがエルファリア打倒を考えたのは、エルファリアの治世では理想の社会が実現しないと考えての事だ。エゥレクシスは世の中を良くしたいという考えの持ち主で、実際以前から寄付を始めとする多くの社会貢献に熱心だった。ヴァンダリオン側に付いたのはその為の手段であり、ゴールではない。いずれはヴァンダリオンに成り代わってフォルトーゼを変革するという大望を抱えていたのだ。

エウレクシスはそういう考えの持ち主なので、一般市民に無用な犠牲が出る事は望んでいない。彼が理想とする社会にも人間は必要なのだ。これは商売人としてもそうで、客を減らすのは愚かしい行為と言えるだろう。

エウレクシスは世界を変える為には犠牲が必要だと考えているし、必要な犠牲なら躊躇うつもりはない。だが今回の策略はそうではない。効果的ではあるが、余りにも短絡的で無駄な犠牲が大き過ぎる。無秩序な力の行使はエウレクシスが嫌うものだ。秩序だった悪は構わないが、混沌とした悪は許せないのだ。

「……そういえば、妙に義理堅い男だったな……」

クリムゾンの言葉を聞いて、孝太郎はエウレクシスの事を思い出していた。孝太郎達と

戦う時も、可能な限り犠牲は抑えようとしていた。それにエウレクシスは、戦いの最中に口にした服を進呈するという約束を、律儀に果たした事もある。そうした事から、エウレクシスは悪でありながらも、彼なりのルールを持っている事が窺われた。今回の件はそれが故に孝太郎達に明かされたと考えると、それほど奇妙には感じなかった。

「それに、このタイミングでヴァンダリオン側の勝利が確定してしまうと、こっちは色々と困るのよ。エウレクシスはまだ権力構造に入り込み切れていないから、アタシ達がその協力者としてこの国へ帰還するプランが崩れる」

エウレクシスはヴァンダリオンに協力していく事で、その後の発言力を強めようとしている。だがもしこのタイミングで大勢が決してしまえば、ヴァンダリオンがエウレクシスの協力を必要としなくなってしまう。それはつまりエウレクシスが権力を得る見込みが低くなるという事であり、同時にフォルサリア魔法王国が新しいフォルトーゼのパートナーとして帰還する可能性も低くなるという事になるのだ。総合するとこの局面はエウレクシスとダークネスレインボウにとって、立ち位置を失いかねない重要な局面と言える。孝太

郎達に協力する必然はあった。

「どう思う、コータロー？」

「……信じよう」

「大丈夫ですかねぇ？」

「これまでもこいつらが時折見せてきた潔さ、そこは信じても良いと思う」

最終的に孝太郎はクリムゾンの言葉を信じる事にした。これまでの彼女達の振る舞いからすると、これが罠である可能性は低いように思われた。そして彼女の警告を無視してし

まった場合、もし真実であったならリスクが高過ぎる。信じていいだろうし、信じないとまずい。それが孝太郎の結論だった。

「そなたがそう言うなら、わらわもそれでよい」

「納得した訳ではありませんけど、私もそれで構いません」

ティアとゆりかは孝太郎の言葉を支持した。感情的には受け入れにくい面もあるが、論理的には正しいだろうと感じていたのだ。

「助かったわ!!　あんた達の協力がないと、エルファリア派を止める手段がなかったもの!!」

孝太郎の答えに、クリムゾンは思わず胸を撫で下ろした。彼女がここへ来た最後の理由は、ただ情報を流しただけではエルファリア派を止められないからだ。止める為には、ある程度以上の地位にある人間に情報を伝えて、そこから命令を出して貰うしかない。つまり彼女達は、話を信じてくれそうで、なおかつ地位が高い、孝太郎達と接触する以外になかったのだった。

エルファリア派は皇国軍が計画している奇襲攻撃を阻止する為に、先手を打って奇襲攻撃をしようとしている。そしてそれを相手に気付かれてはいけないという考えから、エルファリア派は通信の封鎖を行っていた。おかげで呼び掛けても気付いて貰えない可能性があったし、説得にティアが必要という時点で安易な通信は出来なかった。ティアの居場所が敵に伝わってはまずいのだ。

そこで孝太郎達はエルファリア派の攻撃部隊を追う事にした。だが時間的な制約があってこれまで乗ってきたトラックは使えない。代わりに孝太郎達は自分達の力で空を飛んで移動していた。鎧やコンバットドレス、魔法の箒といったものでだ。その速度は速い。今回に限っては魔力を感知される心配をしなくていいので、魔法で姿を隠しながら全力で移動する事が可能だ。おかげで攻撃開始の予定時刻には間に合いそうだった。

「もし、何かの事情で予定時刻に間に合わなかったら……その時は賭けになるじゃろうが、全帯域で攻撃中止を呼びかけようと思うておる」

「そうなったら守ってやる。心配するな」

「それはこちらの台詞じゃ。足を引っ張るでないぞ」

「はいはい、仰せのままに」

テイアと孝太郎はいつものように軽口を叩き合っていたが、その内容とは反対に表情には楽しげな様子はない。どちらかと言えば気持ちを落ち着かせる為に言葉を交わしている状態なのだ。

「あの二人、どういう関係なの？　ただの主従には見えないけど」

そんな二人の様子を不思議に思っていたのがクリムゾンだった。フォルトーゼの身分制度については既に知識として持っている。だが目の前の二人からはそのような雰囲気が感じられない。それが不思議でならず、クリムゾンは厳密には敵同士だという事を重々分かった上で、あえてゆりかに訊ねていた。

「……最初は仲が悪かったんです。それが色々あって仲良くなって、それから里見さんが家臣になったんです」

ゆりかもクリムゾンが敵である事は十分に理解しているから、慎重に言葉を選んで孝太郎達の関係をクリムゾンに伝えた。

「敵だった頃からの感じを今も引き摺ってるのね」

「そうなると思います」

「……真希もそう？」

「あっ……」

ゆりかはここでクリムゾンの真意を悟った。

――クリムゾンさんは、真希ちゃんの事を……。

クリムゾンは真希を心配していたから、孝太郎とティアの関係に興味があった。真希は元ダークネスレインボウという枷から解放されたのか、それとも未だにその枷に囚われているのか。敵同士となった今でも、クリムゾンは真希の事を気にしていた。

「……えと、大丈夫です。私達の中には、真希ちゃんの経歴を非難する人はいません。そもそも、最初はみんな敵同士でしたから」

「そう……」

クリムゾンはそこで小さく微笑んだ。その笑顔がとても嬉しそうに見えたから、ゆりかは目の前の少女が悪の魔法少女である事を僅かな間だけ忘れていた。

「でも、真希の方はまだこだわっているんでしょうね」

「はい。真希ちゃんは時々、誰も自分の罪を問わない事に悩んでいるようです」

「そんな必要はないのに」

「真希ちゃんは真面目ですから」

「あの男が真希を強引に自分の女にすれば、話は簡単なのよ」

「それは根本的な解決ではありません」

「……真希がそういう風に言ってくれる人達の輪の中に入れた事を、今は単純に喜んでおく事にするわ」

「クリムゾンさん、あなたは……」

ダークネスレインボウの中にあって、戦いだけを求める鬼神と言われる、ダーククリムゾン。彼女が普通の少女の顔を見せるのは非常に珍しい事だ。だからゆりかは、彼女がそれだけ真希を大事に思っているのだろうと感じていた。そして同時に、それでなお彼女が真希を選ばなかった事を、残念に思った。

「……そろそろね」

だが、ここで不意にクリムゾンの顔が普段のそれに戻る。

「えっ？」

「ほら、援軍が来たわ」

驚いているゆりかに、クリムゾンがゆりかの背後の方を指し示す。ゆりかがそちらを向くと、高速で接近してくる一団が目に入った。それはカラフルな衣装に身を包んだ五人の少女、そして五人よりも少し年上の男女。ゆりかにはその一団に見覚えがあった。

「里見さん！　ダークネスレインボウです！」

「分かってる。だが敵意は感じられない」

「飛び方も攻撃するつもりのそれではないようじゃ。今の所は、じゃがな」

これまでの経緯もあって、孝太郎達は反射的に警戒を強める。

「心配いらないわ、あれは味方よ」

「分かっているつもりなんだがな」

頭ではクリムゾンの言う通りだと分かっている。しかし孝太郎達はどうしても、武器に

手がかかってしまう。もしこれが罠ならティアの命に関わるからだ。

「今は争うつもりはないぞ、コータロー君！」

孝太郎達の雰囲気を察し、近くまでやってきた段階でエウレクシスは空っぽの両手を挙げた。彼が着ている機械式の装甲服には多くの武器が装備されているが、その全てが上を向いている。エウレクシスはそうやって敵意がない事を示していた。

「そうよ、あなた達がいないとエルファリア派に攻撃を止めるよう説得できないもの」

そんなエウレクシスの隣で、真耶が肩を竦める。その表情はどこか不満気だ。こういう状況でなければ手なんか組みたくない、そういう感情の表れだった。

「分かってる！　急に予想外の状況に陥って、戸惑ってるだけだ」

孝太郎はここでようやく剣の柄から手を放した。ティアとゆりかもそれに倣う。未だに警戒は解いていないが、今の所は戦うべき相手ではない事を三人共理解していた。

「……妙な成り行きになった」

孝太郎はため息交じりに呟く。するとエウレクシスは我が意を得たりとばかりに大きく頷いた。

「それはこちらも同じだよ。ヴァンダリオン派がここまでの事をやらかすとは予想していなかった」

この状況に戸惑っているのはエゥレクシス達も同じだった。エゥレクシスは軍部に協力する事でフォルトーゼの帝政を終わらせ、その過程で得た発言力を使って新しい政治体制をコントロールして自身の理想の世界を作ろうと考えていた。だがヴァンダリオンが今回のような暴挙に及んでしまうと、戦後の政治体制が完全に軍事独裁、しかも恐怖政治になる可能性が高い。それではエゥレクシスがコントロールしたとしても、理想の世界は作れないだろう。

「お前がマクス――いや、ヴァンダリオンをつっつき過ぎたんじゃないか？」

「つっつく？　どういう意味だい？」

「お前が手際よく自分を売り込んだせいで、危機感を持たれたって事さ」

「なるほど、それで強引に決着を急いだっていう流れか。ありそうな線だね」

孝太郎の指摘はエウレクシスにも自覚があったので、納得した様子で頷く。それは真耶も感じていた事だったが、反応は逆で呆れていた。

「エウル、あなたは効率的過ぎるのよ。もう少し大人になるべきだわ」

「分かった分かった、気を付けるよ。雰囲気作りに気を遣えって事だろう？」

「……まったく……男って生き物はもう……」

この時の真耶とエウレクシスのやりとりには、どこか孝太郎と少女達のやり取りを思わせる雰囲気があった。これを演技でやっているとしたら相当なものだから。孝太郎は遠回りにだが彼らを信用しつつあった。今回に限っては、だが。

「ただコータロー君、危機感を煽ったという意味では、君も私と同罪だぞ」

「……かもしれないな」

孝太郎は素直に同意する。襲撃してきたヴァンダリオン側の兵士達を孝太郎達が一方的に退治してしまったので、彼らが危機感を覚えたとも言えるかもしれない。エウレクシスだけでなく、孝太郎達の失策でもあるのだろう。

「しかし、これで君にも分かったんじゃないか？」

「何の話だ？」

「私がエルファリア陛下の治世では駄目だと考えた理由だよ」

エルファリアの治世では、軍部の増長を防げない。その結果、ウィルス兵器の使用という暴挙が行われようとしている。フォルトーゼの皇家は長きに亘って国を守ってきたが、それでも長い時間に亘って積み重ねられた人の業は抑えきれない。統治システム全体を一から刷新するべき時期が来ている――それがエウレクシスの考えだった。

「……理解はするが、共感は出来ない」

エゥレクシスの考え方は分かった。孝太郎も一理あると思っている。だが受け入れられるかどうかという話になると、それは難しい。エゥレクシスは二千年続いた事を続き過ぎたと解釈するが、孝太郎は二千年続くだけの理由があったと解釈する。孝太郎はその原因を国民性や風土と相性がいいのだろうと考えていた。だから刷新するべき点はあるだろうが、帝政そのものを終わらせる必要はないというのが孝太郎の考えだった。

「今はそれで十分だよ、コータロー君」

人の意見を変えるのは難しい。最初の一歩は話を聞いて貰う事。商売人でもあるエゥレクシスには、それが何よりよく分かっていた。そして今は、孝太郎を説得する時間が足りないという事も。

「ねー、ぼっちゃまー、御歓談中申し訳ないんだけどぉ、そろそろ準備した方がいいんじゃ

なーい？」

そんな時、ダークオレンジが孝太郎とエゥレクシスの前に回り込んできた。彼女もエゥレクシスと同様に時間を気にしていたのだ。だがそこは可愛い事が大好きなダークオレンジ。口調といい仕草といい妙に可愛らしく、深刻さは感じられなかった。

「そうだね、そうしよう」

「……お前、ぼっちゃまなんて呼ばれてるのか？」

「何度言っても直してくれないんだよ、あの子は」

「不本意だが、その気持ちはよく分かる」

「ハハハッ」

エゥレクシスは楽しそうに笑いながらダークネスレインボゥの少女達に手で合図を送った。すると少女達は一斉に杖を構える。だがそれは孝太郎達を攻撃する為ではない。魔力は自分達に向けられていた。

「何をする気なんだ？」

「私達が私達だとバレると色々と問題があるのでね。変装する事にしたよ」

エウレクシスは身に着けている装甲服のヘルメットを被った。彼の装甲服は孝太郎の鎧と同じような機能を備えている。そしてヘルメットを被る事で装甲服が戦闘(せん)モードに切り替わり、空を飛ぶ為の装置以外の、戦闘用の装備にもエネルギーが伝達され始めた。

「変装だって？」

「ああ。今日の我々は――」

ぽむっ、ぽぽむっ

そんな時、ダークネスレインボウの少女達の身体(からだ)が白い煙(けむり)に包まれる。変装の為の魔法が発動したのだ。

「――サトミ騎士団なのさ！」

煙が晴れた時、ダークネスレインボゥの少女達の姿が変わった。彼女達はこの場所にはいないキリハ達の姿に変身していた。またエゥレクシスの装甲服は自社製だが、外装を皇国軍の標準装備のものに変更してある。これが意味するのは、エゥレクシスとダークネスレインボゥは今日、この場所には来ていないという事。彼らはこの場所にいるのは全てエルファリア派に属する人間という建前で行動するつもりなのだった。

孝太郎達三人と偽サトミ騎士団の八人は、攻撃開始予定時刻の直前にエルファリア派の部隊に追い付いた。彼らは森に隠れて問題のトレーラーが目の前の道を通りかかるのを待っているので、その姿を直接見る事は出来ない。しかし巧妙にカモフラージュされた通信用のアンテナが予定通りの場所に立っているので、そこにいるのは間違いなかった。

「……やれやれ、どうやら間に合ったみたいね。いつまでもトレーラーが攻撃される予知が消えないから、ヒヤヒヤものだったわ」

アンテナを発見して安堵の溜め息をついているのは、クランの格好をしているグリーン

だった。予知能力がある彼女は、この作戦の結果を幾つか知っている。おかげで彼女が抱えていた危機感だけは、他の面々のそれよりもずっと現実味があった。

「お姫様、連絡した方がいいんじゃない？」

「そうしようと思っておった所じゃ」

早苗の格好をしたダークオレンジに促され、ティアがコンバットドレスに通信するように命じる。当初、オレンジとティアは反目していた。フォルサリアで戦った経験がそうさせたのだ。だが双方に共通する目的意識が、二人の反目を解いた。個人的にもめている状況ではない事は、お互いによく分かっていたのだ。

「こちらはティアミリスじゃ！　聞こえておるか？」

『皇女殿下っ!?　何故こちらへ!?』

通信装置からは、攻撃部隊の指揮官を務める男の声が鮮明に聞こえて来ている。ティアが使っているのは見えない色のレーザー光線を使った通信機で、簡単に言うとレーザー光を糸の代わりに使う糸電話のようなものだ。直進するレーザー光線を使った単純な通信なので、見えない場所や離れた場所との通信には向かないし、映像を送ったりするのも得意ではない。しかしその反面、妨害されたり傍受されたりというリスクが少ないという優れた特徴を持っている。今は通信用のアンテナが見えているので、これが一番安全で確実な連絡方法だった。

「わらわの事はいい!!　それよりも即刻攻撃を中止せよ!!　これはヴァンダリオンの罠じゃ!!　トレーラーの荷物は機動兵器ではなくウィルス兵器なのじゃ!!」

『なんですってっ!?』

ティアの言葉は僅かだったが、指揮官はこの時点で今がどういう状況なのかをきちんと理解した。指揮官に相応(ふさわ)しく、頭の回転が速い男だった。

『……おい、全部隊に攻撃中止を通達！　絶対に撃つんじゃないぞ！』

指揮官はティアとの話を中断する手間も惜しんで、部下達に命令を与える。不敬ではあるが、この状況ではその方が望ましい。ティアは頭を撫でてやりたい気分だった。

「間に合ったか？」

『御安心下さい、皇女殿下。攻撃の予定時刻まではまだ五分ほど余裕があります。誤って攻撃するような事はありません』

「……そうか……それは良かった……」

ティアは緊張を解き、大きく安堵の息を吐いた。やはり多くの人間の命がかかっている

と緊張は大きく、その分だけ安堵も深い。だがまだ終わりではない。この場所へ来てしまったエルファリア派の部隊を、皇国軍に見付からないように撤退させなければならない。気を取り直したティアは、再び指揮官に呼び掛けた。

「ともかくわらわもすぐにそちらへ――」

ティアはこのままエルファリア派の部隊の撤退を支援するつもりだった。

「ちょっと待って！　おかしいわ！」

だがそんなティアを遮るようにしてグリーンが声を上げる。突然の大声に驚き、彼女のすぐ横にいたイエローは晴海の顔で眉をひそめた。

「きゃっ!?　……って、何がなの？」

「トレーラーが攻撃されてウィルスが拡散する予知が消えないのよ！」

グリーンの未来予知は、実現し易い未来ほどはっきりと見える。逆に実現する可能性が希薄になれば、未来も希薄になって見えなくなっていく。つまり指揮官が攻撃中止を命じた時点で、トレーラーが爆発する未来は見えなくなる筈。なのにそれがまだ見えている。グリーンが混乱するのも無理はなかった。

「トレーラーの運転手が事故でも起こして、エルファリア派がいるあたりに突っ込むのかしら？　それでやむなく攻撃して爆発させてしまうとか……」

ルースの顔をしたブルーが自分なりの解釈を付ける。ブルーは口数が少ないが、その分よく考えて発言する。状況としてはなくはない解釈だった。しかしグリーンは首を横に振った。

「中止命令を出したのに、確率そのものが殆ど下がっていないようなの!!　その理由じゃないわ!!」

事故の結果として爆発が起こる場合、事故が起きる未来と起こらない未来が存在するので、中止命令を出した瞬間に大きく未来の像がぼやける。それが起こらなかったという事は、偶発的な原因ではないのだ。

――爆発は偶発的なものではなく、起こるべくして起こる。そして既に中止命令が出ている訳だから、エルファリア派の攻撃ではない。という事は……そうかっ!!

その時だった。パープルの脳裏にこの予知の答えが閃いた。パープルは変装しているキリハと同じく、ダークネスレインボゥでは一番冷静な頭脳の持ち主だった。

「私達と同じだわ！　エルファリア派に変装したヴァンダリオンの子飼いの部隊が、トレーラーを攻撃するのよ！」

ヴァンダリオンとしては確実な罠を用意したい。だがそこには小さな懸念があった。ウィルス兵器は運ぶ上で細心の注意を払う必要がある。当然コンテナは頑丈で、格納容器自体もしっかりとしたつくりをしている。だからどうしても、攻撃を受けてもウィルスが漏洩しないという可能性が拭えなかった。

もし動力を破壊されて道路脇に止まっただけだったら？

もしコンテナは壊れたけれど格納容器が壊れなかったら？

そういう不確定要素を排除する為には、兵士達にエルファリア派のふりをさせて攻撃させるのが一番確実だろう。ヴァンダリオンには、どの程度の攻撃をすれば容器を破壊できるのかが分かっているのだから。

「そういう事か!!　グリーンツ、ヴァンダリオンの手下は何処じゃっ!?」

勝負事に限ればティアも頭が回る。素早く事情を悟ったティアは、コンバットドレスのジェネレーターの出力を上げた。

「多分だけど、あの森の向こう！　今通信に使っているアンテナから十時の方向よ！」

「ゆくぞ、コータロー、ユリカ！」

「分かった！」

「は、はいっ！」

「それと万が一の事態に備えて、装備の設定を宇宙用に変えておくのじゃ！　なにせ相手はウィルスじゃ！」

手掛かりはグリーンの未来予知だけ。非常にあやふやな手掛かりだが、今はそれを信じて行動するより手がない。本当にヴァンダリオンの手の者が入り込んでいたら、取り返し

のつかない結末を迎える事になるのだ。孝太郎達はグリーンの予知が外れてヴァンダリオンが兵を配置していない事を願いたい。その逆に、グリーンの予知が当たって予知通りの場所に兵が居て欲しくもある。ヴァンダリオンの兵は居たが、その居場所だけ予知が外れているケースが一番恐ろしい。そうした複雑な気持ちを抱えた孝太郎達は、グリーンが示した場所へ向かって全速力で空を駆けて行った。

「エゥル、私達も行きましょう！」

「ああ！　こういう時には手と目は多い方がいい！」

エゥレクシスと真耶、そしてダークネスレインボゥの幹部六人も孝太郎達を追う。彼らの目的を果たす為にも、ヴァンダリオンの暴挙は許す訳にはいかなかった。

今回のトレーラー襲撃は事前に詳細な作戦が立てられた。おかげで周辺の地形に合わせてきちんと兵が配置されている。その作戦の資料によると、グリーンが示した辺りにはエルファリア派の兵士は配置されていない。つまりもし居ない筈の場所にエルファリア派の兵士が居たなら、それはヴァンダリオンが配置した偽の兵士という事になる。早々に排除すべき対象だった。

「ティア、見付けたぞ！」

「確かか!?」

「多分な！　すぐにデータを送る！」

孝太郎の霊能力が人の気配を感じ取っていた。人間は知能が高い分だけ、他の動物とは違う独特の霊波を持つ。その人間特有の霊波が、幾つも折り重なるようにして森の中から感じられていた。孝太郎は鎧のセンサーで大まかにその辺りを調べると、ティアのコンバットドレスのコンピューターにデータを送信した。

「この座標か……むっ、こちらのセンサーに反応が出た！　間違いない！」

孝太郎が送ってきたデータを参考にして、ティアはヴァンダリオンの兵がいると思われる方向にコンバットドレスのセンサーを向けた。するとセンサーはそこに人がいると応えた。ティアのコンバットドレスは完全な戦闘用なので、孝太郎の鎧より若干高性能のセンサーを備えているのだ。

「里見さんっ、大変ですっ！　向こうからトレーラーが！」

孝太郎達がヴァンダリオン側の伏兵を見付けたのに前後して、大型のトレーラーが道に姿を現した。上空から見えるようになっただけなのでまだ遠いが、このままではすぐにやってくるだろう。何とかトレーラーと伏兵を分断しなければならなかった。

「ティア、エルファリア派の兵士達でトレーラーを止めさせろ！　同時に俺達で偽兵士を排除する！」

孝太郎は素早く判断を下すと、連絡をティアに任せて自身は偽兵士がいると思われる場所へ突っ込んでいく。

「しばし頼む！　わらわもすぐに参る！」

ティアは通信をする分だけ僅かに出遅れる。その分だけ孝太郎が危険になる訳だが、心配はいらない。きちんと孝太郎に続く者があった。

「我々はコータロー君の援護だ！」

「みんな、正体がバレないようにやり過ぎに注意なさい!!　アナタに言っているのよ、クリムゾン!!」

「分かってるわよ、真耶！」

エゥレクシスと真耶、そしてダークネスレインボゥの六人が孝太郎を追う。この八人が孝太郎を援護するならティアも安心だ。彼らがどれだけ強いかは、身をもって経験していたから。

それに対して、一人別行動を決めたのがゆりかだった。

「里見さん、ティアちゃん、私はトレーラーの方に行きます。何か予想外の事があったら

困りますから」

トレーラーにはエルファリア派の部隊が向かっているが、これがヴァンダリオンの罠である以上、何が起こるか分からない。その用心として回す人員なら、能力の柔軟性が高いゆりかが行くのがベスト。孝太郎もこれには賛成だった。

「頼む、行ってくれ！」

「はいっ！」

ゆりかは孝太郎から離れ、大きく弧を描くようにしてトレーラーの方へ飛んでいった。孝太郎はそれを見送ると、腰に下がっている二本の剣に手をかける。すると丁度そこにエウレクシスが追い付いてきた。

「助太刀するよ、コータロー君」

エウレクシスは楽しそうに笑うと両手でライフルを構える。彼はこのライフルで孝太郎の援護に回るつもりだった。

「今回は素直に礼を言っておく」

「こう見えて射撃は得意なんだ。任せてくれたまえ」

「……よろしく頼む」

「後悔はさせないよ。今回はね」

そうやって二人が戦いの準備を終えた時、森の木々の向こう側にエルファリア派の兵士達の姿が見えた。だがもちろんこれは偽物だ。彼らはボディーアーマーや部隊のマークを偽装した、ヴァンダリオン側の兵士達だった。

「君の戦い方は分かっている！　いつも通り過激にやってくれたまえ！」

「任せろ！　お前は正確に狙い過ぎるなよ！　いつもの悪い癖だ！」

孝太郎の目の前には味方の偽物、一緒に戦ってくれるのは偽物の味方。どちらも本物ではないという奇妙な戦場だが、これまで戦うばかりであったエウレクシス達と手を組んで

いる事は紛れもない事実だ。それが一時的なものである事は重々承知しているが、孝太郎はそれを素直に喜ぼうと思った。

皇国軍とエルファリア派とでは、基本的に見た目の違いはない。エルファリア派の兵士

は元々皇国軍の兵士なので、同じ装備なのだ。違いは服や装備の各部に記されたマークぐらいだろう。おかげで成りすましも簡単で、マークの貼り替えだけで済む。元々利用されやすい状況だったと言えるだろう。

そうやって見分けにくい両者だが、今回はエルファリア派ではないと断言できる一つの理由があった。それは部隊に配備されている機動兵器だった。

「機動兵器がいる!!　エウレクシス、あれについて何か知らないか!?」

飛んで接近すれば狙い撃ちになる。そこで孝太郎はまず地上に降り、それから数十人の皇国軍部隊に向かって突っ込んでいった。すると皇国軍との距離がつまり、兵士達の姿以外にも配備された小型の機動兵器の姿が見えるようになる。だがそれは孝太郎が知っている機動兵器ではなかったから、エウレクシスに助言を求めたのだ。

「知ってるよ。うちの製品だからね」

エウレクシスは皇国軍が設置した通信アンテナを狙い撃ちにしながら、事もなげにそう答えた。これに驚いたのは孝太郎だった。

「お前んとこのなのかっ!?」

「そうだよ。先月から納品している機体だね」

機体の側面にはエウレクシスが保有する企業、ＤＫＩのマークが刻まれている。この機動兵器はＤＫＩ、ドラゴンナイトインダストリーが開発した最新のモデルだった。

「弱点はないのか!?」

孝太郎は通常の機動兵器になら勝つ自信があったが、ＤＫＩ製と聞かされると不安になってくる。エウレクシスの機動兵器には、何度も苦労させられてきたからだった。

「ない。君達との戦いのデータをフィードバックして作ったものだから、核心技術は投入していないものの、半端な出来ではないものでね」

皇国軍が導入したＤＫＩ製の新型機動兵器は、従来の物と比べた時、デザインや役割には大きな変化はない。相変わらず戦闘機と戦車の中間のようなデザインと役割を担う。では何も変わっていないのかと言われると、そんな事はない。大きな変化は中身で起こっていたのだ。

この機体にはエウレクシスが度重なる孝太郎達との交戦で蓄積したデータや、使用した技術がそのまま使われている。魔法や霊能力のような特殊な技術は投入されていないが、孝太郎を倒す為に開発した進歩的な技術が多数導入されているのだ。その結果、基本的な性能が大きく向上しており、従来型の機動兵器とは一線を画す機体だった。

「ウォーロードⅡとモーターナイトの組み合わせ程には強くないが、並の機動兵器と混同しているとしっぺ返しを喰らうよ」

「簡単に言ってくれるなぁ……」

「ああ！　一つだけ弱点があったよ、コータロー君！」

「なんだ、早く教えろ！」

「単独ではランニングコストが悪いのが弱点だった。沢山導入して運用コストを下げるのがベターだろうね。ああいう風に」

「それは弱点じゃねー!!」

エウレクシスが通信用のアンテナを破壊した事で、機動兵器の一機が孝太郎達の接近に気付いた。すると一糸乱れぬ動きで全ての機動兵器が同時に動き始める。その数は実に八機に及ぶ。それが整然と連携して襲ってくるのだから、恐ろしい敵だった。しかも今回は孝太郎達のデータが入っているだろうから、最初から強攻してくるのは明らかだった。

『目標に高エネルギー反応！　レーザー砲に同期攻撃の兆候！』

鎧の人工知能が悲鳴を上げていた。孝太郎の姿を確認し、危険視した機動兵器が攻撃の兆候を見せていたのだ。高速で移動する孝太郎を一撃で倒す為に、弾速が最速のレーザーで完全な同時攻撃を行うつもりらしい。それはエウレクシスがかつて使っていた人型機動兵器ウォーロードⅡと、その随行機械兵モーターナイトの得意技だった。

「厄介な物を作りやがって！」

「あっはっは、我ながら芸術品を作ってしまったねぇ！」

「笑ってる場合か！」

「分かっているさ。オレンジ、グリーン、頼むよ」

「お任せ、ぼっちゃま！」

「……全く、緊急停止のコマンドぐらい用意しなさい……もう……」

オレンジとグリーンがそれぞれに魔法の呪文を唱え始める。

「ティンクルスターダスト！」

オレンジが発動させた魔法は、空気を変質させて光が乱反射するキラキラした物質を作り出すものだ。これは派手好きなオレンジが好んで使う演出用の魔法なのだが、幸か不幸

かレーザーを急激に減衰させる事にも使える。

「パーフェクトイリュージョン・モディファー・エリアエフェクト・ラージ！」

グリーンが不満げな顔をしながら発動させたのは、広い範囲を覆いつく幻影の魔法だった。グリーンは情報を操る魔法が得意なので、こうした幻影の魔法も得意だ。彼女の実力なら、機械を騙せるほどの幻覚も作り出せる。今はそれを使って孝太郎達の位置を実際よりも数メートルずらした。

『警告、レーザー砲が攻撃を開始！』

鎧の人工知能が警告した直後、八機の機動兵器のレーザー砲が殆ど同時に火を噴いた。レーザーは音もなく即座に目標へ命中する。目標はやはり、攻防共に一番危険と目される

孝太郎だった。

『空間歪曲場上部に被弾、エネルギー損耗は中程度』

しかし幸い、孝太郎には被害はなかった。オレンジの魔法が大きく威力を削ぎ、グリーンの魔法が狙いをいい加減にしてくれているので、孝太郎を倒すまでには至らない。八発全てが完全な形で命中したならあっという間に倒されていただろうが、流れ弾が一発では身を守っているバリアーのエネルギーを削り取るだけで精々だった。

「危ない危ない……」

とはいえ自分を一撃で倒せる攻撃に狙われればいい気分はしない。そこで孝太郎はスピードを更に上げて先行する。早急に距離を詰めて同時攻撃を封じる必要があった。

「付き合うわ、孝太郎」

そんな孝太郎の動きにクリムゾンが追従する。そうしながら、彼女は静香の顔で笑っていた。戦い方や雰囲気が似ているからか、孝太郎には不思議とその笑顔が自然に感じられた。そしてその笑顔が、孝太郎に遠くにいる仲間達に会いたいと思わせた。

「行くぞ、クリムゾン！」

「守ってあげるわ、真希の友達だから！」

孝太郎はずっと後になって気付いた。クリムゾンはこの時『真希の友達だから』と言っ

た。それは単純に孝太郎の事を指しているのか、それともクリムゾン自身の事を指しているのか、その違いはとても大きな意味を持つ。そして孝太郎は、それを訊きそびれてしまった事を残念に思った。

孝太郎達がヴァンダリオンが隠した伏兵との交戦を開始した頃。ゆりかはトレーラーの目前まで迫っていた。トレーラーがこれ以上孝太郎達の方へ行かないようにするのが、彼女とエルファリア派の部隊の役割だった。

「……トレーラーってこんなに大きかったんですね……」

だがゆりかはトレーラーを目の前にして少々戸惑っていた。トレーラーという言葉から想像していたよりもずっと大きかったのだ。

これはゆりかというか、地球の人間の感覚で言うと、トレーラーよりも地上を走る輸送船のイメージに近い。タイヤを使わない浮上式なので、そのイメージは特に強い。あえて地球のトレーラーに換算するなら、縦横高さがそれぞれ三倍以上の大きさがあった。

冷静になって考えればトレーラーが大きいのは当たり前だ。分解状態とはいえ、秘密裏に開発された大型の兵器が運ばれている事になっているので、それなりの大きさのトレーラーになる。また開発が進行中の『アライア』では大型の輸送車が必要不可欠だった。

「……これじゃあ簡単には止められない……かといって大火力で攻めたらウイルスの容器を壊しちゃうんじゃ……」

大型のトレーラーなので、多少攻撃をしたところで足は止まらないだろう。止められるほどの火力を使えば、運搬中のコンテナや中身の格納容器が危ない。だから攻撃をする前に、どうしてもやらねばならない事があった。

――確か前に、やらなきゃいけない事を後回しにすると大変な事になるって、里見さんが言ってた！

ゆりかはすぐにやるべき事をやる事に決め、身に着けていた腕輪を操作して、エルファリア派の指揮官に連絡を取った。

『なんでしょうか、ユリカ殿？』

ゆりかの役職は、ティアが直接指揮を執っているサトミ騎士団に所属している従騎士という事になっている。従って指揮官の返事は騎士扱いの敬語だった。

「私がトレーラーに乗り移って、ウィルス兵器の場所を特定します！　それまで大きな攻撃は控えて下さい！」

現状ではウィルス兵器の数や位置が分からない。トレーラーを止める為に攻撃をするな

ら、コンテナの中がどうなっているのかを確認するのが先決だった。

『こちらからも何人か人を出します！　お一人では危険です！』

「お願いします！　何が何でも防がないと！」

いつものゆりかであれば、ここでの援助は断っただろう。一人で戦う方が犠牲が少なくて済むからだ。だが今回に限ってはそうではない。ウィルス兵器を見付けられなければ大きな被害が出る。ゆりか一人で探すのは賢いやり方ではなかった。

「行きます！　乗り移ったら周辺の安全を確保しますから、私が乗った場所から続いて下さい！」

『助かります！　ご武運を！』

「ありがとう！」

短い連絡を終えると、箒に乗ったゆりかはエルファリア派の兵士達の頭を掠めるようにしてトレーラーに向かって飛んでいく。兵士達はその背中を見送りながら、口々に垣間見たゆりかについて語り合った。

「随分可愛い感じの騎士様だったが……なかなかどうして肝が据わってるな」

「しかも謙虚だったな。言葉は丁寧だったし、最後にありがとうって」

「流石はティア殿下の騎士団、って所かね？」

「俺達だってティア殿下とエルファリア陛下の軍隊だ！　負けてらんねえぞ！」

ゆりかの背中はとても小さい。だが今の彼女の背中には、七色に輝く愛と勇気が溢れている。そしてその輝く虹の光に導かれ、兵士達は力強く進んでいった。

サトミ騎士団のふりをしている以上、エウレクシス達はその方針に従って戦う必要がある。つまり可能な限り犠牲者を出さないという、アライアから連綿と受け継がれてきた皇家の方針だ。悪の巨大企業の御曹司と悪の魔法少女の組み合わせなので、一見そういう事は苦手なように感じられるが、実はそうではなかった。

「お前達、レインボゥハートでもやっていけるんじゃないか!?」

皇国軍の兵士を殺さないように器用に排除していくクリムゾンの姿を、孝太郎は意外に感じていた。すると次なるターゲットの兵士に拳を向けながら、彼女はにやりと口の端を

持ち上げた。

「ただ敵を薙ぎ倒すだけじゃ、政権打倒を目論む秘密組織は務まらないわ。暗殺だけの悪の組織なんて聞いた事ないでしょう？」

魔法を用いて陰謀を張り巡らせ、世の中を動かすのがダークネスレインボウ。むしろ直接的な武力行使の方が少ないのだ。とはいえクリムゾンはその中では不器用な方なので、敵を殺さずに戦う為の道具や武器を、仲間達に作って貰う事が多かった。彼女が身に着けているグローブがまさにそれで、殴った相手を気絶させる魔力が込められていた。

「戦いの絶対数はそっちの方が多いだろうが、割合だけで言えばゆりか達の方が暴力的って訳か」

「ま、アタシ達の取り締まりが仕事なんだから、自然とそうなるわね。皮肉ねえ」

「お前らが暴れなきゃ、ゆりか達は暴力的ではなくなるだろう」

「ごめんだわっ、その逆が望みなんだから！　こんな風にねっ！」

正面の兵士を排除すると、クリムゾンは両手で杖を構えた。すると杖の先端からは煌々と燃え盛る火球が発射される。次の標的は後方から砲撃を続けている機動兵器。思う存分魔法を使って吹き飛ばしていい相手だった。

「今は助かる！」

「それも皮肉よねっ！」

クリムゾンの火球を追うようにして、孝太郎が前進する。孝太郎の場合はＧＯＬが兵士の接近を防いでくれるから、機動兵器との戦いに集中する方が都合が良い。そして孝太郎は火球を受けた直後でバリアーに負荷がかかっている機動兵器に斬りかかっていった。

バンッ

「なんだ!?」

しかし孝太郎が繰り出したシグナルティンの一撃は、唐突に機動兵器の目の前に現れた光り輝く棒状の何かによって受け止められてしまう。これに驚いている孝太郎に向けて、接近戦用のビーム砲が火を噴いた。

「くうッ!?」

孝太郎は反射的に身体を捻った。早苗の霊力が神経信号の伝達速度を引き上げているので、この動きで辛うじて直撃は避けられた。だが至近距離で砲撃を受けたのは紛れもない事実。ＧＯＬのバリアーはその一撃で大半のエネルギーを奪い去られていた。しかもそこに例の光り輝く棒状の何かが突き出されてくる。幸いその動きを警戒していたので、孝太郎はこの攻撃はかわす事に成功した。

「危ない危ない！　エウレクシス、何なんだこれはっ!?」

「君のその剣を防ぐ為に作った、極端に小さく狭く収束させた空間歪曲場だ。接近状態で攻撃と防御双方に使うナイフのようなものだ」

エネルギーは狭い範囲に集めた方が強い。ならば極端にバリアーを小さくすれば孝太郎の剣――シグナルティンの事だがエウレクシスはそれを知らない――を防げるかもしれない。そう考えて作り出されたのが問題の光る棒だった。

だがこれは普通の人間が使うには無理がある武器だ。光る棒――ナイフの刀身は短いので、剣を受け止めるのが難しい。また小さい分だけ軽いので、剣そのものの衝撃も殺し切れない。八機の機動兵器が孝太郎の動きを観測して適切な防御位置を算出し、機動兵器の絶大なパワーでナイフをその位置に保持するからこそ、可能な芸当だった。

「名付けてフィールドナイフ。我ながら素晴らしい出来だ。ビックリしたろう？」

「したよ！　でもそういうものがあるなら先に言え！」

孝太郎とエゥレクシスは軽口を叩き合いながらも、その身体は忙しく戦い続けている。孝太郎は敵の攻撃をかわしながら剣から雷の魔法を放ち、エゥレクシスは機動兵器が孝太郎に近付けないように正確な狙撃を続けている。二人の戦いぶりは歴戦の勇者のそれに勝るとも劣らないものだった。

――なんだか楽しそうじゃないの、エゥルの奴……。

特筆すべきは二人の見事な連携だろう。二人の動きは、まるで長年一緒に戦ってきた戦友同士を思わせる。そして二人が交わしている軽口が、その印象を強めていた。実際の所はお互いを倒そうとして見付けた隙を先回りして補ってやっている訳だが、そうした事情を差し引いてもなお、真耶にはエゥレクシスが楽しそうに感じられた。そして不機嫌になる。エゥレクシスが孝太郎に向けている感情は、真耶には向けた事がない種類のものだったから。

「すまんすまん、でもあれは君の二本目の剣には通用しないから、言わなくていいかと思って」

「だから！」

孝太郎は左右の手に一本ずつ剣を構えている。右手にはアライアのシグナルテイン、左手にはテイアのサグラテイン。孝太郎は再び機動兵器に斬りかかる際、今度は左のサグラテインを大きく振り被った。

「それを先に言えッ！」

振り下ろされたサグラティン自体は、空間歪曲場で作られたナイフによって受け止められた。だがサグラティンの刀身から飛び出した、霊力の刃までは受け止められない。霊力の刃はナイフを通り抜け、機動兵器の胴体に直撃した。

ザンッ

霊力の刃は機動兵器の胴体を切り裂き、大きなダメージを与えた。機体の内部で次々と誘爆が起こり、あっという間に行動不能に陥る。その様子を眺めていたエウレクシスは、予想通りの結果に繰り返し頷いていた。

「……やはりこの仕様ではこうなってしまうね」

魔法なら普通の科学的な手段である程度防ぐ事が出来るが、霊力は全く防げない。防ぐ

為には霊子力技術や魔法が必要だが、どちらも生産性が悪く、しかもエウレクシスとしてはヴァンダリオン達に対する切り札としてもうしばらく隠しておきたかった。その為、この結末は必然だった。孝太郎がこの敵を倒せる事は嬉しいが、自分で作ったものが負けるのは嬉しくない。エウレクシスとしては嬉しさ半分落胆半分といった所だった。

「……エウル、ボーッとしてると恋人が一人で行っちゃうわよ」

「本当だ、しまった！」

動きを止めて考え込んでいた所を真耶に諭され、エウレクシスは慌てて孝太郎の援護を再開した。孝太郎は既に二機目の機動兵器に向かって走り出している。放っておいては危険だろう。

――ホント、男ってのは……！

真耶としては最大限の皮肉を込めた言葉を投げつけたつもりだったが、結局エゥレクシスはそれに気付かず終い。自分が空回りしている事もプラスされて、真耶の機嫌は悪化の一途だった。

「遊んでないでちゃんとやれよ！」

「すまんすまん、もう大丈夫だよ」

森の中での戦いは、孝太郎達が有利で進行していた。孝太郎とエゥレクシス、ダークネスレインボウ同士の連携は強固で、徐々に敵の数を減らしつつある。だがここで思わぬ情報が飛び込んできた。

「コータロー、大変じゃ！　ユリカが苦戦しておるようじゃ！」

「なんだとっ!?」

遅れていたティアがゆりかが危機的状況にあるという情報を持ってやってきた。ティアは味方への命令や情報の伝達などで出遅れていた分だけ、孝太郎達よりも戦況全体の情報を把握していた。

「苦戦ってどんな!?」

「向こうにも敵が隠れていたようじゃ！　どうやら大型の敵らしい！」

エルファリア派の兵士達と共にトレーラーに向かったゆりかは、思わぬ伏兵に苦戦していた。それを同行している兵士達が後方に伝え、テイアが知る所となったのだ。

「エゥレクシス、ここは任せる！」

「仕方ない、行ってくれたまえ！」

「掴まれ、コータロー！」

孝太郎とティアの判断は早い。孝太郎がティアのコンバットドレスに手をかけると、ドレスに装備された大推力のブースターが火を噴き、あっという間に二人を空に舞い上がらせた。そしてまるでミサイルのような曲線の軌道を描いて、ゆりかがいるトレーラーの方向へ飛んでいった。

トレーラーに接近したゆりかを出迎えたのは、防御用の兵器の数々だった。民間用のトレーラーに偽装してはいても、そこはやはり軍事用。重マシンガンや小型ミサイルといった防御用の火器が装備されていた。今は距離があるので命中弾はないが、近付けばその限りではない。ゆりかもそのまま突撃するほど愚かではなかった。

「マルチプルエナジーボルト・ターゲットオプション・オートホーミング！」

いつものティアのやり方を参考にして、ゆりかは撃たれる前にトレーラーの武器を破壊しようと攻撃魔法を放った。ゆりかが放った魔法は多数のエネルギー弾を敵に撃ち込むもので、エネルギー弾はまるで誘導ミサイルのようにトレーラーの武器に向かって突っ込んでいった。

バンッ

「バリアー!?」

しかしゆりかの魔法はトレーラーの直前で霧散する。トレーラーにはバリアーが装備されていたのだ。

「私の力じゃ、あのバリアーを破るのは無理です!!　一体どうしたらっ!?」

個人用のバリアーならゆりかの魔法で十分に突破できる。だがこれほど大きな軍用の車両に取り付けられたバリアーは動力源が桁違いに強力な為、ゆりかの魔法では突破は困難

だった。エルファリア派の兵士が対大型兵器用の火器を持っているから、それで破るという方法はある。しかし威力があり過ぎれば積み荷に被害が出る。手を出しあぐねたゆりかは一旦トレーラーから距離を取った。このまま無策に接近を続ければ、ただの的でしかなかった。

「……こうなったら思い切って！」

ここで一度考え込んだゆりかだったが、早々に決断が必要な状況である事は忘れていない。素早く決断を下したゆりかは、再び指揮官と連絡を取った。

「すみませんっ、あのトレーラーの歪曲場発生装置の位置は!?」

『機体後部、半球状のドームです！』

「分かりましたっ！」

『どうなさるおつもりですかっ!?』

「考えがあります！　そのまま前進を続けて下さい！」

ゆりかは箒を反転させて再びトレーラーの方を向くと、呪文の詠唱を開始する。

「リコール・プレキャスト・テレポートッ！」

ゆりかのような高位の魔法使いは、発動に時間がかかり過ぎる魔法や、魔力の消耗が激し過ぎる魔法を、事前に詠唱し休眠状態で保持している。この時ゆりかが発動させた魔法は、そのうちの一つである瞬間移動の魔法だ。ごく短い距離であっても負担が大きいこの魔法は、休眠状態で保持しておくのが一般的な魔法の一つだった。

青い魔力は一旦箒の先端に集中してから、ゆりかの身体全体を包み込んでいく。

「いいけえええええっ!!」

そしてゆりかの身体を包み込んだ膨大な量の魔力が空間を歪め、球状の時空の穴へと変化する。すると次の瞬間ゆりかの姿は霧のように掻き消え、ほぼ同時にトレーラー後部に姿を現し、その天井部分に降り立った。ゆりかは瞬間移動に成功したのだ。

「これを壊してしまえばっ！」

ゆりかがトレーラーの上に降り立つのと同時に、彼女が乗っていた箒が魔法の杖に変化する。それを両手で構えたゆりかは、その先端を目の前にあるドーム状の装置へ向けた。それこそがバリアーの発生装置だった。

「テリブルサンダーランスッ！　モディファー・エンパワー！」

トレーラーの上に乗ってしまえば、マシンガンもミサイルもすぐには攻撃してこない。安全装置を外して手動で攻撃するしかないからだ。ゆりかはその隙を突いて、威力の高い魔法を発動させた。それは強烈な電撃を発生させる攻撃魔法だった。

「えええええええいいいっ!!」

ドコオオオオオオオオンンンンンッ

強烈な電撃は大気を大きく振動させる。おかげで魔法を発射した時の音はまるで大音量の太鼓のようだった。そして杖の先から放たれた強烈な電撃はトレーラーの装甲をいともたやすく貫通し、内側の電子回路を一瞬で焼き切った。これによりバリアーの発生装置は機能を停止し、トレーラーを守っていたバリアーは消滅した。この攻撃では部品が破裂するぐらいの事は起こったが、爆発を伴うような大規模な破壊は起こっていない。ゆりかの狙い通りの結果だった。

「はりゃ!?」

そしてゆりかは想定外の幸運にも恵まれた。電撃はバリアー発生装置を駆け巡った後、

トレーラーの電気系統にまで流れ込んだ。おかげでトレーラーは動力が止まって浮力を失い、数十センチ下の道路に落下した。

ドガッシャアアアンッ

「きゃあああぁぁぁぁっ!?」

その激しい衝撃に、ゆりかは自分が破壊したばかりのバリアー発生装置に力一杯しがみついた。トレーラーはそのまま道路をしばらく滑った後に、ようやく停止した。

「……と、止まった？」

ゆりかはきつく閉じていた両目を片方だけ開き、あたりの様子を確認する。トレーラーは道路の真ん中に停止しており、車体の各部から煙が上がっていた。だが見た感じでは大きな破損はないようだ。これは走行中に突然動力を失った場合にも、大事故にならないように設計されている為だった。

「そうだ、急がないと！」

ゆりかにはトレーラーが止まった真の理由が分からない。完全に壊れたならいいが、高電圧に晒された事で安全装置が働いただけなら、いずれ再始動する。その前にやらねばならない事が山積していた。

「指揮官さんっ、すぐに来てくださいっ！　今なら安全です！」

『お見事です、ユリカ殿！　急行致します！』

ゆりかは通信機で味方と連絡を取りながら、魔法でマシンガンやミサイルの発射装置を破壊していく。それが済むと大慌てでトレーラーの後部ハッチへ向かう。そしてそこで、エルファリア派の兵士達と合流する事が出来た。

「少々お待ち下さい、すぐに焼き切ります！」

工兵の一人がバーナーを手に後部ハッチに近付く。ロックの部分をバーナーで焼き切ろうというのだ。

シュゴオオオオオッ

バーナーは高温のプラズマを吐き出す方式なので、トレーラーの金属製のロックが見る見るうちに切断されていく。半分ほど切断するのに十秒もかかっていない。この調子ならもうすぐハッチが開く――そんな時の事だった。

ドゴォンッ

突然ハッチが内側から押し開かれた。ロックを焼き切ろうとしていた工兵は弾き飛ばされ、ゆりかに向かって飛んでくる。

「きゃあああぁぁぁぁぁぁっ!!」

ゆりかは工兵に押し倒されるような形で尻餅をついた。工兵は目を回していたが、幸い

ゆりかにも工兵にも怪我はない。その事に安堵したゆりかは、何が起こったのかと目を上げた。

「えっ……？」

ズシィイイン

するとゆりかの目の前に巨大な足が現れる。そのままゆりかが更に視線を上げると、そこには重厚な鎧を身にまとった、がっしりとした体形の巨人が立っていた。

ウィルスは毒物とは違い、誰かに感染すれば自己複製を繰り返して増殖していく。だからウィルスで攻撃する場合には、それほど沢山の量は必要ない。そこでヴァンダリオンは空いているトレーラーのスペースにこの身長数メートルの巨人を詰め込んだ。予定の場所へ辿り着く前に攻撃を受けた場合などの、様々なトラブルに備えての事だった。

「これは……一番初めの巨人！」

ゆりかにはその巨人に見覚えがあった。自分が直接見た訳ではないのだが、資料映像で見た事がある。エゥレクシスがルースの婚約者として現れた時に使っていた、人型の機動兵器だった。

エゥレクシスはこれまでにも何度か、自社製の巨人型ロボットを使って攻撃をしてきている。そのうち後の方で投入されたウォーロードシリーズに関しては機密が多く、皇国軍には提供されていない。だが一番初めに使った巨人に関しては、既にプロダクトモデルの製造と販売が行われている。この巨人は森で孝太郎達が戦っている機動兵器と同じで魔法や霊子力技術は使われていないが、現行の皇国軍の装備を大きく上回る力を持つ。非常に危険な存在だった。

「指揮官さんっ、すぐに後退して下さいっ！」

「ですが、ユリカ殿お一人では――」

「これはそんな生易しい相手ではないんです！」

ゆりかの勘では、この巨人が一体であれば、ゆりか一人でも十分に勝てるだろう。二体であっても、兵士達の支援があれば間違いなく勝てるだろう。三体なら五分五分。四体からは劣勢になる。そんな巨人が、全部で六体いた。ゆりかの目の前には一体だが、トレーラーの中で五体の巨人が身体を起こしつつあったのだ。

「すぐに後退して、ティアちゃん達を呼んで下さい!!　ティアちゃんと里見さんの力が必要なんですっ!!」

ゆりかはすぐに防御魔法の詠唱に入った。真正面から戦えば、ゆりかと兵士達はあっと

いう間に殲滅(せん)される。ここはゆりかが兵士達を守りつつ後退し、孝太郎達が援軍に来るのを待つ以外に手がなかった。

上空に舞い上がった時点で、テイアと孝太郎はゆりかが苦戦している姿を見る事が出来

た。距離は一キロ近く離れているが、それぞれのコンピューターが画像を拡大してゆりかの姿を見せてくれていた。

ゆりかは傷だらけ、泥だらけで必死に戦っていた。防御や幻影などの魔法を駆使して数体の巨人の猛攻をたった一人で支え続けている。その瞳の輝きと、決意に満ちた表情は、普段の彼女とは一線を画するものだった。

「ゆりかのやつ、大分やられてるぞ！　ティア！」

「分かっておる、耳をふさいでおれ！」

「トレーラーに当てるなよ!?」

「誰に向かって物を言うておるっ!!」

ティアは両肩に装備されている大型の対物砲を連射した。弾は目にも留まらぬ速さで空を駆け抜けると、先頭に立ってゆりかを攻撃しようとしている巨人に襲い掛かった。砲弾は爆発しない徹甲弾。バリアーを粉砕し、左腕を叩き折った。

「ティア、俺について来れるか!?」

ティアが攻撃した事で、巨人達の――正確にはそのパイロット達の――敵意が孝太郎達の方に向いた。孝太郎は敵意が霊力の線になって見えているので、そこを通らないようにする事で攻撃をかわす事が出来る。しかしティアにはそれが出来ない。自分の後について来いとは、ティアにも攻撃を回避させる為の言葉だった。

「だからっ、誰に向かって言うておるのじゃっ!!」

孝太郎が敵の攻撃をかわす為に描く複雑な軌道を、ティアはいとも簡単に追いかけてくる。おかげで全ての攻撃が二人の傍を通り抜けていく。例外は誘導ミサイルだが、これはティアが他の攻撃を回避する片手間に、手にした速射ビームライフルで次々と撃ち落としていった。

「……敬愛してやまない、我が皇女殿下に」

思わず孝太郎の口を突いて出たこの言葉は本心だ。それ程までにティアの動きは見事だった。ティアは身体能力と動体視力、反射神経が突出して優れている。この動きと射撃精度はそれらがもたらした、彼女だけの技術だった。

「まだまだこんなものではないぞぉっ!!」

「おい、調子に乗るなって、危ないだろ！」

やがてティアは孝太郎の動きから僅(わず)かに外れ始める。ティアはそうする事で攻撃する暇(ひま)を作り、ゆりかの援護を行っていた。だがそれは敵の攻撃がティアに当たる可能性が出るという事。孝太郎は心配だった。

「そなたは霊力だけを見ているから危なく感じるのじゃ！　攻撃の意思はどうあれ、戦術的にあり得ないタイミングでは攻撃は来ぬ！」

だが孝太郎の心配は杞憂だった。ティアはその抜群の戦闘(せん)センスによって、巨人の攻撃

パターンを読み取り、それを縫うようにして反撃を繰り出していたのだ。孝太郎もティアのこの言葉にはお手上げだった。

「……仰せのままに、マイプリンセス」

孝太郎は反論を諦めると、ティアの参考になるようにと、きちんと丁寧に攻撃をかわしていく。そんな孝太郎の様子に満足したティアは、嬉しそうに口の端を持ち上げた。

「ふふんっ、それでよいのじゃ、我が騎士よ♪」

ティアが攻撃を始めた事で、巨人の攻撃の頻度が減る。おかげで孝太郎達が回避に費やす時間も減り、二人は数百メートルの距離をほんの僅かな時間で駆け抜けていった。

「無事か、ゆりか!?」

ズシャアアッ

孝太郎は大地を削りながら勢いよく着地すると、推進用や姿勢制御用のブースターを器用に使って姿勢を入れ替え、ゆりかを背にして守るように立った。

『よく頑張ったのう、ユリカ！』

そしてティアの声は通信機から聞こえて来ている。彼女はコンバットドレスの機動性を最大限生かす為に上空に留まっていた。

「さ、さとみしゃん！　ティアちゃん！」

ティアの攻撃の恩恵はゆりかにもあった。攻撃を受けた事で巨人達は接近してくる孝太郎達も攻撃しなくてはならなくなった。おかげでゆりかへの攻撃が緩み、危うい所でゆりかは持ち堪える事が出来たのだった。

「なんとか無事です！　でも来てくれて良かった、そろそろ限界でしたから……」

ゆりかは満身創痍だった。瞬間移動で魔力を大量に消費した上、後退する兵士達を守る為に六体の巨人の攻撃を防ぎ続けていたのだ。ゆりかの身体は傷だらけで、疲労が蓄積して足元がふらついていた。

「だがもう大丈夫だ。後は俺とティアに任せろ――と言いたい所だが、お前にはやって貰わなくちゃいけない事がある」

「ウイルス兵器ですね？」

『そうじゃ！　わらわとコータローで巨人を相手にするから、そなたが中に入って探すのじゃ！』

ゆりかの健闘のおかげで、兵士達は無事に逃げ延びた。守る必要がなくなったので、孝太郎とティアの二人なら六体の巨人も相手に出来るだろう。そうして二人が戦っている間にゆりかが本題――ウイルス兵器を発見する。ゆりかの状態からして、これが一番効率のいい役割分担である筈だった。

「分かりました、すぐに始めて下さい！」

ゆりかは力強く頷くと、疲れた身体で再び杖を構える。これから孝太郎とティアが作ってくれる筈の隙を利用して、巨人達の群れを突破しなくてはならないのだ。

『参るッ！』

最初に動き出したのはやはりティアだった。ティアは両肩の大砲に装填した熱煙幕弾を巨人達の周辺に何発も撃ち込んだ。すると高熱の煙が巨人達を包み込み、その視界を奪い去る。高熱のせいで熱源センサーも使えない。人間を隠すには十分だった。

「行くぞ、ゆりか！」

「はいっ！」

孝太郎がゆりかを先導して走り始めた。鎧が電波妨害も開始しているので、巨人達には孝太郎が近付いている事が分からなくなっている。

――中央に一、右に三、左に二。真ん中の奴の左を抜ければベストか……。

しかし孝太郎には巨人達の位置が分かる。巨人は人が乗って操る兵器なので、その霊波が煙幕の外からでも丸見えだった。またそれだけではなく、大きな足音と作動音が巨人の位置を教えてくれていた。

「これぐらいはハンデがあってもいいよな！」

孝太郎は巨人と巨人の間を通り抜ける時、ついでにその巨大な脚に斬り付けた。巨人の脚には霊力は通っていないから、正確な位置が分からず、大きなダメージにはならない。だが二体の巨人が足を引き摺るようになった事には大きな意味があるだろう。

『いや、ハンデというのはこういう事じゃ!!』

巨人達に接近した孝太郎の鎧が拾った音声データは、上空にいるティアにも伝わっている。コンバットドレスの火器管制はそのデータを分析し、立体映像のモデルを作ってティアの視界に投影した。彼女にも巨人の姿は丸見えだった。

ドンドンドンドンッ

ティアはそのデータを参考にして連続して砲弾を撃ち込む。狙いは操縦席がある胴体中央から離れた部分。結果として肩や腕に砲弾が降り注ぐ事になった。

「よし、抜けたぞ！」

「やった!!」

ティアの砲撃が巨人達を足止めしている間に、孝太郎とゆりかは無事に巨人の群れを通り抜けた。幸い二人が巨人に攻撃される事はなく、煙幕の熱も防御魔法やバリアーが防いでくれていた。

「行け、ゆりか！　後ろは気にしなくていい、絶対に守る！」

孝太郎は巨人の群れを抜けた所で足を止めた。対するゆりかはそのまま走り続ける。二人の役割は同じではない。

「はいっ!!」

ゆりかは言われるままに全力で走り続けた。彼女の役割はトレーラーに入り、ウィルス兵器を見付け出す事。孝太郎とティアの役割は、巨人をここに足止めする事。そうやってそれぞれが役割を果たす事が勝利の条件だった。

「……そろそろ俺達の番だよな、ティア」

「いいや、わらわの番じゃ。そなたはその手伝いじゃ」

「やっぱり怒ってるんだな？」

「当然じゃろう!?　国民と国土をウィルスで汚染しようなどとっ!!」

「同感だ。ヴァンダリオンの思い通りになど、させてたまるか！」

ゆりかはこの時、後ろから攻撃を受ける事はないと確信していた。何故ならば、ゆりかの背後にいるのは、フォルトーゼ最強の皇女と、悠久の時を超えて蘇った伝説の騎士。だからゆりかは、後ろを気にする素振りすら見せなかった。

煙が晴れた時、巨人を操る兵士達の目に飛び込んできたのは、レーザー光で空に描き出された金色の旗だった。その旗に描き込まれている紋章は、豪華に美しく咲き誇る花。それが何者を示す旗なのかは、兵士達の誰もが良く知っていた。

『ティアミリス皇女殿下だ……』

『御自ら御出陣なさるという噂は本当だったのか……』

二千年もの長きに亘り、国を守り続けたフォルトーゼの皇族が戦闘旗を掲げる意味は重い。降伏か敗北かを選択せよ――そういう意味にしかならないからだ。そして旗の元にいる金髪の少女の瞳は強く輝いていて、実際にそう言っているかのようだった。

『お、落ち着けお前達！　皇家は不敗でも、エルファリア陛下は罪を犯し、皇権を停止されようとしている！　本物の皇族とは言えない！』

部隊長は通信機を介して部下に呼びかけ、彼らを鼓舞する言葉を必死に繰り返すが、彼自身がそれを信じていないのは明らかだ。声は震えているし、未だにエルファリアを陛下

と呼んでいる。建前を繰り返しているだけで、自分すら騙せなかった。

『それに既に戦いは始まっている！　今更許しを乞うても遅い！』

それでも部隊長は手にした大型のビームショットガンをティアミリス皇女に向ける。だがこれは勇気を出したというよりは、既に皇族を攻撃してしまっているから後には引けないという、追い詰められての行為だ。彼らには降伏の選択肢は存在していなかった。

『隊長に続けっ！　やられてしまう前に！』

『うおおおおおおおおおおっ！』

先行する部隊長に、五人の部下達が続く。彼らもよく分かっている。目の前にいる少女は可憐なだけではなく、生まれながらの獅子であると。突っ立っていればあっという間に噛み殺されてしまうと。

「……旗を出しても数秒しか時間は稼げなんだか」

ジャコ

ティアミリス皇女は不敵な笑みを浮かべて武器を構える。六体の巨人を前にしても、彼女の自信は揺らがない。巨人を操る兵士達の様子とは対照的だった。

「ゆりかはトレーラーに入った。十分だろう？」

シャキン

皇女の護衛の騎士は両手に一本ずつ剣を構えた。彼の鎧は動力を備えているが、巨人には遠く及ばない。だから本来は恐れるに足らない相手なのだが、ティアミリス皇女の様子と騎士の鎧のカラーリングが兵士達に漠然とした不安を抱かせる。そしてその不安は直後に現実のものとなった。

「ゆけいっ、コータロー！」

「仰せのままに、マイプリンセス！」

騎士は皇女から援護を受けながら突進して来た。皇女が撃ち込んだミサイルが土煙を巻

き上げ、それを突き抜けるようにして騎士の白刃が迫る。それに対し、先頭を行く部隊長は騎士にビームショットガンの銃口を向けた。騎士の剣がバリアーで弾き返された所をショットガンで倒すつもりだった。

ジャキィイイイン

『ばっ、馬鹿なぁっ!?』

だが予想に反し、バリアーは易々と騎士が振るった右の剣に両断されてしまう。鎧と巨人では動力の出力が桁違いなので、こんな事は決してあり得ない筈だった。そして騎士は続いて左の剣を振るう。すると重厚な巨人の装甲に大きな亀裂が入った。

『うわあああぁあぁあぁあぁあぁっ、くるなぁあぁあぁ!!』

この攻撃によってパニックに陥った部隊長は、ただただビームショットガンを乱射し始めた。だが騎士はショットガンが発射する拡散ビームを易々とかわしてしまう。

『当たらないっ、当たらないいいいっ!!』

弾が拡散するショットガンだから、高速で動き回る目標でも捉えられる筈だ。にもかかわらず騎士には命中してくれない。これは騎士が先読みしてかわしてしまう事が大きな原因だが、剣が届くほどの至近距離になるとビームが拡散し切れない事も影響していた。

『た、隊長っ!?』

『見てないでお前達も撃てっ！』

『分かりました！』

キュキュキュキュキュウウウン

部隊長が騎士を捉えられないと見るや、巨人達は一斉に攻撃を開始した。だが既に味方に近過ぎる事もあって、騎士に対する命中弾は僅かだった。そして拡散型のショットガンであるから、一部が当たっただけでは大きなダメージには繋がらない。全て騎士の鎧が発生させたバリアーによって掻き消されてしまった。

「大慌てじゃのう」

「六体もあるんだから、上手く使えば俺達を倒せなくもない筈なんだが……」

もちろん騎士もただ攻撃され続けた訳ではない。回避する動きの合間に、皇女の砲撃と連携して巨人の弱点である脚を攻撃していく。おかげで巨人の動きはみるみるうちに鈍くなっていった。

「エウレクシスが六人いる訳ではあるまい。初見じゃろうしの」

「機体の性能を引き出し切れていない状態で、慣れない敵が相手、か」

一方的な展開になりつつあったが、決して巨人が弱い訳ではない。騎士と皇女が強過ぎる訳でもない。未知の相手を前にした事、機体への習熟が完全ではない事、そして何より

皇族と戦っているという事に大きなプレッシャーを受けていたのが悪かったのだ。

「おい、ティア、無茶をするなって！」

「大丈夫じゃ。こうした方が――」

後方から騎士を支援していた皇女が、いつの間にか近くまでやってきていた。そして彼女は左腕に装備されている大型の杭打機を、目の前にいる巨人に突き付けた。

「――もっと慌てるじゃろうからのっ！」

ドコオオオオオオンンンッッッ

火薬の爆発によって前方に押し出されたハンマーヘッドは、巨人の頭をいとも簡単に吹き飛ばした。突然頭を吹き飛ばされた事で、胴体のコックピットにいる兵士は、自身の目で皇女の姿を見る事が出来るようになった。

――皇女殿下だ、間違いなく、ティアミリス皇女殿下だ……！

日の光を浴び、杭打機の排気の水蒸気を纏ったティアミリス皇女の姿は、ある種の神々しさすら感じられる。彼女はすぐにブースターを全開にして目の前から消えたが、その姿を見た兵士は勝てっこないという強い感情に囚われ、後悔し始めていた。

『うわあぁぁぁぁっ、うわぁぁっ、うわあああああぁぁぁぁぁぁぁっ!!』

やがてその混乱と後悔は、部隊全体に広がっていく。おかげで攻防共にその精度が大きく下がり、騎士と皇女が有利になっていった。皇女は多少の無茶はしたものの、全体としてはむしろ安全になったと言えるだろう。兵士達は完全に手玉に取られていた。

孝太郎とティアが巨人達と戦い始めた直後、ゆりかは後部のハッチからトレーラーの貨物室へ侵入する事に成功していた。フォルトーゼのトレーラーの貨物室は、地球の大型トレーラーの貨物室と比べると、縦横高さ全てが三倍以上ある。その為、内部には広大なスペースが存在していた。

「……ウィルスの格納容器……格納容器……」

ゆりかは貨物室の中を調べ始めた。ハッチから入ってすぐの位置には、六体の巨人が寝ていたと思われる金属製の固定具が並んでいる。巨人が出入りする都合上、その周辺にはないだろうと当たりを付け、ゆりかは貨物室の奥へと進んでいった。

「……これはきっと違うな……もっと頑丈そうな……それに『あぶない！』って感じのマークも入ってるだろうし……」

貨物室の奥には幾つか大きな箱が並んでいた。しかしどれもそれほど強度があるようには見えない。知識を持たないゆりかでも、木やプラスチックで出来た箱に病気の元をしまいたいとは思わない。念の為に中を覗いたが、やはり食べ物や生活用品といった、普通の補給物資ばかりだった。

「あっ、こっ、これっ!?」

だがそうした補給物資の箱を見て回るうち、ゆりかは他の箱で隠すようにして置かれていた大きな白い箱を発見した。その箱は他の箱とは大分様子が違っていた。箱は全体が金属で作られており、しかも何か機械の作動音がしている。また妙に刺々しいデザインの、黄色と赤を多用したマークが幾つも貼り付けられていた。

「これ！　きっとこの箱です！」

ゆりかには箱に貼られたマークに見覚えがあった。それはフォルトーゼ式の危険を伝えるマークで、テイアの『青騎士』の中でも何度か見た覚えがある、ゆりか風に言えば『あぶない！』って感じのマークだった。

「すぐに開け……る前に、一応……」

ゆりかは杖を構えると、その先端を箱に向ける。外からでは中がどうなっているのかが分からない。そこでゆりかはまず魔法で中を調べようと考えたのだ。

「クレアボヤンス！」

ゆりかが使ったのは透視の魔法だった。するとゆりかの視線は分厚い箱の外装を通り抜け、その向こう側にあるものをしっかりと捉えた。

「もしかして、この黒いのがウィルス兵器!?」

箱の中には金属製の台座があり、そこに円筒形の透明なケースが固定されていた。この台座は頑丈そうな作りで、多少の揺れや衝撃ではケースが落ちたり倒れたりはしないようになっている。実際、今もケースが破損している様子はない。そしてケースの中には何か黒い液体が詰め込まれており、外を走り回る巨人達が地面を揺らす度にその液面が僅かに揺れている。その動き方からして、粘り気が強そうな液体だった。

「なんだかドロドロして気持ち悪いです……でも、この感じなら開けても大丈夫かな。時間もないし、ここは思い切って！」

中を眺めて一通り安全を確認したゆりかは、箱に取り付けられた取っ手に手をかけた。そして思い切り引き下げる。

バシュウウウウウ

箱は取っ手が付いている面がドアになっており、角の蝶番を軽く軋ませながら開いていった。するとドアの隙間から大量に冷気が噴き出してくる。箱の作動音はこの冷気を作る為の物。箱は冷蔵庫の機能を備えていたのだ。

「……間違いない、これだ……」

魔法を使わずに自分の目で直接見てみると、ゆりかにはケースの中の黒い液体が禍々しい雰囲気を纏っているように見えた。それが彼女に感じさせる。これこそが問題のウィルス兵器に違いない、と。

「そ、そうだ、里見さん達に――――ってぇ、あれぇ？」

ゆりかがウィルス兵器発見を報告しようと通信機をオンにしようとした時。ゆりかは問題の円筒形のケースに、奇妙なものが付いている事に気が付いた。それは金属製の箱で、表面には何かの文字が表示されている。そしてその文字は、時間の変化に合わせて刻々と形を変えていた。

「なんだろう、これ……」

不思議に思ったゆりかは、身に着けている腕輪をケースに近付け、通信機の代わりに翻訳機を起動させた。すると腕輪から弱いレーザー光が飛び出して箱の表面の文字を読み取り、ゆりかにも分かる文字に置き換えて彼女の目の前に表示してくれた。

「五十九、五十八、五十七、五十六……なにかの、すうじ？」

箱の表面に表示されていたのは徐々に減っていく数字だった。それが何を意味するのかが分からず、ゆりかは首を傾げる。だがケースと箱の形から、あるものを連想した。彼女がこれまでに見てきたアニメや漫画には、時折こうしたものが登場していたのだ。

「こ、これってまさかっ……ま、まさかぁぁぁぁっ!?」

ゆりかは自分の連想が高い確率で正しいと感じていた。そしてもしその連想が正しいな

ら、このまま放っておくと大変まずい事になる。だからゆりかは今度こそ通信機をオンにして、あえて暗号化をせずに全部の通信波を使って叫んだ。

「ウイルス兵器を見付けましたぁぁっ!!　でも爆弾が仕掛けられてますぅぅっ!!　あと一分もしたら爆発しちゃいますぅぅぅぅぅぅぅっ!!」

表示されていた数字はカウントダウン。

小さな箱は爆弾。

トレーラーに積み込まれていたウィルス兵器は、時間が来れば爆発して中身を撒き散らすように、細工されていたのだった。

ヴァンダリオンはウィルス兵器を使って、エルファリア派を追い詰めようと画策した。だがものがものだけに、取り扱いには細心の注意が必要だった。適切な場所とタイミングで撒き散らさねば、窮地に陥るのはヴァンダリオンだったからだ。

最初の不安はきちんとエルファリア派が格納容器を破壊してくれるかどうかだった。この問題は、成り済ましの偽エルファリア派部隊を用意する事で解決した。偽物のエルファリア派の部隊がトレーラーを完膚なきまでに破壊すれば、確実にウィルスは散布されるだろう。

だがヴァンダリオンはそれだけでは安心せず、更なる安全対策を用意した。心配は一つだけではなかったから。もしどこかからトレーラーにウィルス兵器が積まれているという

情報が漏れたなら、エルファリア派が阻止を試みるかもしれない。場合によっては成り済まし部隊がやられてしまうかもしれない。仮に情報が洩れなくても、事前に成り済まし部隊に気付かれる場合もあるだろう。そうした問題を解決する為に用意されたのが、ウィルスの格納容器に組み込まれた爆弾だった。

この爆弾は非常に精巧に出来たもので、状況に合わせて二種類の爆発を引き起こす事が出来る。一つ目はウィルスを撒き散らす為の小さな爆発。もう一つは持ち去られた場合に備える証拠隠滅の為の大爆発だ。後者でもウィルスが完全に死滅する保証はないが、ウィルス兵器を運搬していた証拠は完全に破壊されるだろう。

現在カウントダウンが続いているのは、前者の爆発だ。孝太郎達の攻撃によって格納容器が破壊された事にするのだ。仮に爆発を見た者がいてもすぐにウィルスで死んでしまうので何も問題はない。そして兵力が劣るエルファリア派では、ウィルスが拡散した後にこの現場を確保する事が出来ないから、証拠の隠滅はエルファリア派が去ってからゆっくりやればいいという仕組みだった。

ゆりかの報告を聞いたティアは即座に信号弾を発射すると、通信機に向かって大声で叫んだ。

「この通信を聞いている者は、陣営に拘わらず即時撤退せよ！　トレーラーから可能な限り距離を取るのじゃ！　出来れば風上へ！」

通信機は全ての周波数帯を使ってティアの言葉を周囲に届けた。信号弾と彼女の言葉は同じ意味だ。ウィルスに爆弾が仕掛けられている以上、もはや戦っている余裕はない。エルフアリア派はティアの言葉に従い、即座に後退を開始した。だがやはりファンダリオンによって派遣された皇国軍は即座には動けなかった。

『ウィルス兵器だって!?』

『しかも時限爆弾だってよ!!』

『ど、どうしますか隊長！』

ゆりかとティアの言葉は彼らにも聞こえていた。しかし即座には信じられない。森の中の偽部隊は、エルファリア派がトレーラーで機動兵器を運んでいると聞かされていた。巨人の部隊はトレーラーで前線に移動していただけ。どちらもトレーラーの積み荷にウィルス兵器があるなどとは夢にも思っていない。もしティアとゆりかの言葉が真実なら、すぐに逃げるべきなのは分かる。だがこれがかく乱の為の嘘であったら、取り返しのつかないミスに繋がる。激しい叱責を受け、処罰されるだろう。皇国軍の部隊は身動きが取れなかった。

『運転士、聞こえるか!?』

ここで唯一冷静だったのが、巨人の部隊を率いている部隊長だった。彼は素早く通信機を作動させると、トレーラーの運転士を呼び出した。

『は、はい！』

『貨物室のカメラで確認しろ!!　それらしいものは映っているか!?』

『ちょっと待って下さい……あります！　危険を警告するマークが付いた冷却器付きのコンテナ、ドアが開放されていて、女の子が中を覗き込んでいます！』

すぐにカメラの映像が巨人のコックピットに送られてくる。そこには確かに開放されたコンテナと中を覗き込む少女の姿――これはゆりかだ――が映っていた。

『ええいっ！』

ドムッ

部隊長は緊急用レバーを引いてコックピットのハッチを吹き飛ばすと、大慌てで機体の外へ飛び降りた。そして武器も持たずにトレーラーに向かって走っていく。

『隊長、どちらへ!?』

『お前達は後退しろ！　俺は事実を確認する！』

それは兵士としての使命感がさせた事だった。ティアとゆりかの言葉は恐らく事実だろうが、証拠を確認せずにはいそうですかと撤退してしまう訳にはいかない。どうしてもウ

イルスと爆弾、双方の存在を確認せねばならなかった。

『分かりました、隊長！』

『後退信号！　それと全周波数帯を使って住民と友軍に近付かないよう呼びかけろ！』

巨人の部隊は戦闘を中止し、整然と後退していった。損傷が大きい機体は放棄され、パイロットだけが仲間の機体へ乗り移った。その様子からすると彼らが本気で撤退しているのは間違いない様子だった。

「ティア、俺達も行くぞ！」

「ユリカ、待っておれ！　すぐに参る！」

皇国軍が戦いを止めてくれた事で、孝太郎とティアは自由に動けるようになった。二人は巨人達に背を向け、トレーラーの貨物室へ向かう。そして二人が貨物室のハッチに辿り着いた時、丁度ゆりかが中から姿を現した所だった。ゆりかの両腕には問題の格納容器が抱えられており、その重さで足元がおぼつかなくなっていた。

「お嬢さん、それをこちらに！」

「あ、ありがとうございますぅ！」

ゆりかがもたついている事に気付いた部隊長が格納容器を受け取る。そして受け取った格納容器を一瞥し、表情が険しくなった。

――ウィルスらしきもののケース、取り付けられた爆弾……彼女達の言葉に間違いはない!!　という事は、俺達は最初から捨て駒だったって事か!?

ウィルスが本物かどうかは分からない。だがこれがトレーラーに納められていた事や、ゆりかとティアが嘘を言っていなかった事だけは確かだった。おかげで部隊長は完全に戦う意思を失くしていた。流石に捨て駒にされてしまっては、戦う気力は湧かない。むしろ軍の上層部への怒りが湧き上がっていた。

「どんな様子じゃ!?」

「殿下、カウントダウンは残り三十秒！」

部隊長はティアに従って素直に報告する。それはまるでエルファリア派の兵士であるかのような姿だった。内在する軍部への怒りが、彼にそうさせるのだろう。

「解体できんのか!?」

「その為の時間がありません！　五分前に見付けていれば……」

格納容器に取り付けられた爆破装置自体は、別段特殊なものではない。時間さえあれば部隊長にも解体できただろう。だが三十秒では短過ぎる。解体は不可能だった。

「爆弾だけ外して、捨てられないじゃろうか？」

「無理に外そうとすれば起爆します！　爆発が早まるだけです！」

「となると、手は一つだな」

話を聞いていた孝太郎は鎧の正面装甲を展開し、素早く鎧の中から抜け出した。

「どうするつもりじゃ、コータロー!?」

「爆発しそうなものを全部集めて爆発を大きくするんだ。それでウィルスを焼き尽くしてしまおう」

「……なるほど、賭けになるじゃろうが、この状況ではそれしかなかろうのぅ」

孝太郎のアイデアはウィルスを焼くというものだった。このままただ爆発を待てば大惨事になる。解体出来ず、宇宙へ捨てる暇もない。そうなると爆発の規模を大きくして、ウィルスを焼却するぐらいしか手が残っていなかった。鎧の動力を爆発させたり、弾薬を誘爆させたりして、爆発時の温度を上げる訳だ。だがそれをやってもウィルスが全て焼き尽くされる保証はない。非常に分の悪い賭けだった。

「ではすぐに――」

「……待って下さい。私が何とかします！」

しかしいざ実行に移そうとした時、ゆりかが孝太郎達を止めた。その瞳には強い光が宿っ

ている。追い詰められた事で、再び魔法少女の彼女が戻って来ていた。

「出来るのか、ゆりか!?」

「保証はありませんけど、ただ爆発を大きくするよりはいいと思うんです！」

「そなたに任せる！　見事にやってみせよ、ユリカ！」

ゆりかの様子を見て、ティアは即座に決断した。今のゆりかになら任せられる。ティアはそれを良く知っていた。

「はいっ！」

ゆりかはしっかりと頷くと、両手で杖を構える。残り時間は少ない。即座に始める必要があった。

「皆さん、念の為に私を囲むようにバリアーを張っておいて下さい。失敗してもそれで何とかなるかもしれません」

残り時間は僅かに十秒。やり直しは利かない。これが最初で最後の勝負だった。だがゆりかは怖気付いたりはしていない。決意に満ちた瞳と声とで、呪文の詠唱を開始した。

「パーフェクトフォースフィールド・モディファー・マキシマイズ」

ゆりかが詠唱したのは何故か防御魔法だった。しかも彼女はそこに、残るすべての魔力を注ぎ込んでしまった。更に不思議だったのは、その魔法が地面に置かれたままになっている格納容器に対して使われた事だった。

「この魔法で爆発を抑え込もうというのか!?　しかしこれでは結局――」

「いいえ！　勝負はここからです！」

ゆりかはティアの言葉を遮ると、杖を大きく振りかざした。

「フィールド・クローズッ!!」

ゆりかの魔法には続きがあった。ゆりかが使った防御魔法は、格納容器を中心として直径十メートル程の球状に展開されている。それがゆりかの更なる呪文を合図にして縮み始めた。十メートルが八メートルへ、やがては六メートルへ。急激にそのサイズを縮めていった。

「ゆりか、爆発するぞ！」

「いいいいいいいけえええええええっ!!」

格納容器に取り付けられた爆弾が爆発したのは、ゆりかの防御魔法の直径が二メートルを切った時だった。爆発はその小さな空間の中で起こり、さながら小さな太陽のように光り輝いた。そんな状況にあってもゆりかは防御魔法の縮小を止めない。更にその範囲を狭めていった。

「そうかっ、ユリカよ、そんな事を考えておったのか!!」

ここでティアはゆりかが何をしているのかという事に思い至った。まずゆりかは防御魔法で直径十メートルの球体を作り、その中に大量の空気を閉じ込めた。続いてその空気を思い切り圧縮し、今やその直径は一メートルもない。爆発はその僅かな空間で起こった。爆発は決して大きな規模ではない。だが圧縮された分だけ、圧力と温度は大きく上昇していく。つまりゆりかは空気の圧縮と爆発を利用して、大気圏に突入した時に経験した悪夢のような状況を作り出そうとしていたのだ。

「ぬぅうあああぁぁぁぁぁっ、あああぁぁぁぁぁっ、うわあああぁぁぁぁぁぁっ!!」

もちろんそんな事をすれば防御魔法に大きな負荷がかかり、ゆりかの負担が急激に増える。実際、縮小した空気を包んでいる防御魔法は、繰り返し明滅して今にも消えてしまい

そうだった。

「シグナルティンッ、ゆりかに力を貸してやれぇっ!!」

そんなゆりかの危機を救ったのが孝太郎だった。孝太郎はシグナルティンから大量の魔力を引き出し、ゆりかに注ぎ込んでいく。シグナルティンの白い魔力はゆりかに触れた瞬(しゅん)間から黄色い光に変化し、防御魔法の輝(かがや)きを強化していった。

「これでぇぇぇぇぇぇっ、どうだぁぁぁぁぁっ!!」

ゆりかは孝太郎の助けを借りながら、最後の力を振り絞って空間を更に圧縮した。球状の空間は、最終的にほんの数十センチというサイズにまで圧縮された。格納容器の残骸(ざん)が内側に存在しているから、実際に残されている空間はごく僅かだ。その僅かな空間に直径

十メートル分の空気と、爆弾の爆発力が丸ごと押し込まれた。これにより内部の圧力と温度は飛躍的に上昇、ほんの短い時間ではあったが、大気圏突入時のそれを遥かに上回る高温高圧の環境が発生した。そしてこの地獄のような過酷な環境下では、ウィルスが生き残れる筈もなかった。

全てが終わった時、ゆりかは両手に杖を握り締めたまま意識を失っていた。最後の最後まで全力で頑張って、文字通りの意味で力尽きたのだ。力尽きてなお杖を離さないのは、きっと彼女が愛と勇気の魔法少女だからなのだろう。

「……お前はよくやったよ、ゆりか」

孝太郎はそんなゆりかを抱き寄せると、背中に背負った。ゆりかは抱き寄せられた時点から身体の力が抜け、だらりと孝太郎に身体を預けている。意識はない筈なのに、不思議とその姿はだらけている時の彼女に似ていた。

「ウィルスは完全に燃え尽きたようじゃのう。……よくやってくれたのう、ユリカ」

ゆりかが杖を向けていた先には、一握りの灰と溶けて変形した格納容器の残骸が転がっ

ている。何が入っていたにせよ、完全に焼き尽くされたのは間違いない。誰が見ても一目で分かる状況だった。

「礼はゆりかが起きた後にちゃんと言ってやれよ」

「分かっておる。そなたと一緒にするでない」

孝太郎とティアの間の空気も大分緩んでいる。最大の危機を乗り切った直後なので、仕方のない事だろう。これは一緒にいた部隊長も同じで、彼は少し離れた場所で大の字になって寝ころんでいた。

「……やれやれ、無事に片付いたようだね」

そんな時、孝太郎の頭上から声がかかった。

「エウレクシスか」

見上げると、そこにはエウレクシスと真耶、六人の魔法少女の姿があった。彼らはエウレクシスを先頭にして、順番に孝太郎達の前に降り立つ。彼らも疲労(ひ)している様子はあったが、八人全員が無事だった。

「さてコータロー君、我々には一つ共通の問題があると思うんだが」

「分かってる。俺達(たち)の決着を付けるかどうか、だろう？」

ヴァンダリオンによるウィルス兵器の問題は解決した。すると孝太郎達とエウレクシス達は本来の関係に戻る事になる。両者の本来の関係は敵同士なので、相対すれば戦わねばならないのだった。

「正直な所、我々がここで戦うのは得策ではない。他人の目が多いからね」

エウレクシスは飄々とした様子でそう語り、肩を竦める。少し離れた場所には部隊長が寝転がったままだし、恐らくヴァンダリオンが意図的に配置した報道関係者が撮影を行っている可能性が高い。また、軍の衛星もこの場所を監視しているだろう。下手に戦ってエウレクシス達がここにいる事がヴァンダリオン達に知られてしまえば、彼らは大変な立場に追い込まれる。魔法を分解する力があるシグナルティンは、変装している今のエウレクシス達に致命傷を与え得る武器だった。

「……そして、俺達の方は人数で劣る訳だな」

孝太郎達の方の問題は、単純に戦力の問題だった。ゆりかが気絶しているので、兵力比は二対八。戦えば、孝太郎達は確実に負ける。一人か二人くらいなら道連れに出来るかもしれないが、そこが限界だろう。

「そこで提案なんだが……今日は最後まで仲良くしないかい？　お互いの未来を潰してしまわない為に」

エウレクシスは戦いの回避を提案した。エウレクシス達と孝太郎達には、双方に戦えない事情がある。意地を張って決着を付ければ、お互いの未来が閉ざされるだろう。どちらにとっても無意味な戦いだった。

「どうする、ティア？」

「ぬぅ……」

エウレクシスの提案を聞いて、ティアは額にしわを寄せる。ティアの性格からすると、ここで戦いを避けるのは気に入らない。堂々と正面から打ち破るのが皇族たる者だと信じているのだ。

「お姫様、早く仲良くするって決めた方がいいよ。クリムちゃんは戦いたくてウズウズしてるんだから」

「失礼ね、アタシだって先の事ぐらい考えるわよ」

だがこのオレンジとクリムゾンの言葉がティアを冷静にさせた。戦うのは簡単だが、先の事――つまり国の事や国民の事を思えば、この場所で戦うのは愚(おろ)かな行為だろう。伝説のアライア皇女も、国や国民の為にプライドを捨てて、戦うのを止めようとした事があったのだから。

「分かった。その条件を呑もう」

「助かったわ、皇女殿下(でん)」

真耶が意味ありげな微笑みを浮かべる。本当の事を言うと、真耶も戦いたいと感じていた。しかし彼女(かの)もそれをあえて呑み込んだ。フォルサリアの人間をフォルトーゼに帰還(き)させたい真耶の気持ちは、ティアのそれとよく似ている。ティアに共感していた、というのがこの時の真耶の微笑みの意味に最も近いだろう。

「じゃが、明日からは元通りの敵同士じゃ。必ずそなたらを倒す！」

「望む所だわ。そして私達は必ず勝利する」

そしてティアと真耶は不敵な笑みを浮かべて向かい合う。こんな部分でも共感している二人だった。そんな二人の様子を見ていたエウレクシスは、小さく笑いながら孝太郎の耳元にそっと囁いた。

「……お互い、女性には苦労しているようだね？」

「……そのようだな」

エゥレクシスは紛れもなく敵で、感情的なすれ違いも多く、何度も酷い目に遭わされている。だが孝太郎はそうした事を忘れて頷いていた。それは本当にそう感じていた事と、しばらくは戦いの事を忘れたくなるほどの危機を乗り越えた影響だった。

「聞こえておるぞ！　この不忠者めぇっ!!」

「エゥル!!　どういう意味なのソレは!?」

地獄耳も同じなら、怒る時の調子まで同じ。孝太郎とエゥレクシスは一度顔を見合わせて苦笑すると、同時に肩を落として溜め息をついた。

白銀の剣　十一月二十四日（水）

グラナードから報告を受けた時、ヴァンダリオンは初め信じなかった。それ程までに自信がある策だったのだ。

「まことかグラナード!?　本当にウィルスの拡散を防がれたというのかっ!?」

「間違いございません。ティアミリス皇女自ら事態の収拾に当たり、ウィルスも拡散前に処分されてしまったようです」

「まさかあれだけの仕掛けを見破られるとは……ええいっ！」

ガンッ

ヴァンダリオンは苛立ちを隠せず、その大きな拳でソファのひじ掛けを殴り付けた。上質な材木を使い、丁寧に作られた高級なソファなのだが、その力の強さに大きく軋む。それだけ拳には強い苛立ちが込められていたのだ。

「何処から作戦の情報が漏れたのか、早急に調査しろ！」

「既にそのように命令を出してあります。ですがヴァンダリオン様、それよりも重大な問題がございます」

「なんだ!?」

ヴァンダリオンの機嫌は悪く、その声は攻撃的だ。だが付き合いの長いクラナードは別段慌てるような様子もなく、落ち着いて手元のパネルを操作し始めた。グラナードにはヴァンダリオンが自分に怒りをぶつけているのではない事が分かっているのだ。

「こちらをご覧下さい」

ヴァンダリオンとグラナードがいるのは、ヴァンダリオンの私室だ。豪華な家具が取り揃えられ、ヴァンダリオンがプライベートな時間を過ごす部屋だった。だがこの部屋で密談が行われる事も少なくなく、広い立体映像の表示領域を持つコンピューターが設置されていた。そのコンピューターが、ある映像を立体映像として表示し始めた。

「これは……」

「先程配信されたニュースの映像です。意図的に報道関係者の近くで事件を起こした事が裏目に出ました。問題の『アライア』での戦闘がリアルタイムで報道されてしまったのです」

表示された立体映像は、ティアミリス皇女とその護衛を務める青い鎧の騎士が、巨大な人型機動兵器と交戦している映像だった。皇女と騎士の装備は巨人型の機動兵器には及ばない。しかし協力し合って巧みに戦う二人は、二対六という数的な不利をものともせず、

少しずつ巨人達を追い詰めていった。それはいかにも国民が喜びそうな、皇女と騎士の姿だった。

この映像を撮影したのは、別件の取材でやって来ていたエルファリア派を擁護している報道機関だった。エルファリア派を罠に嵌め、その様子をエルファリア派を擁護するメディアに報道させる。そうすれば報道に信憑性が高まってエルファリア派を追い詰める事が出来、しかもメディアのスタンスまで変えさせる事が出来る筈だった。

しかし何重にも安全策を盛り込んだ筈の罠が破られてしまった為、報道された事がエルファリア派にとって有利に働いてしまった。皇女と騎士が大活躍する映像が大々的に報道され、しかもこの戦いにヴァンダリオン側がウィルス兵器を持ち出そうとした疑惑までが取り沙汰されている。戦いに気付いた報道機関が通信に聞き耳を立てていたので、通信妨害が成されていても、戦いの終盤におけるゆりかやティアの警告は部分的には傍受されていたのだ。

結果的に、多くの事が裏目に出た。報道機関の誤算はもちろん、ウイルス兵器の爆破が防がれた以上、証拠となりそうな記録映像や爆破装置のような物証がエルファリア派に渡ったと考えた方がいいだろう。恐らく、今後は世論の風向きが変わってくる筈だ。場合によっては、これまでのような世論を追い風にした強気の戦略は通用しなくなるかもしれない。非常に大きな失策と言わざるを得なかった。

――あの小僧の台頭に焦ったのが失敗の原因か……くそっ!!

ヴァンダリオンは失敗の原因を把握している。エウレクシスが頭角を現してきている事に危機感を持ち、強引に状況を進めようとしたのが失敗の原因だった。その結果、手痛い授業料を支払わされる事となった。

「……下手なプライドに足元をすくわれたか」

「今回は根本的な所で問題が発生しております。プライドどうこうは、きっかけに過ぎないでしょう」

「俺がプライドを出さなくても、情報漏れを起こす土壌はあった。結局はいずれどこかで同じ失敗が起こった、という事か。……お前は冷静だな、グラナード」

「その意味においては、失敗したのがこのタイミングで良かったのかもしれません。この失敗は、まだ取り返しが利きます」

世論の風向きは変わるかもしれないが、兵力では圧倒している。またエルファリアが裁判から逃げているという事情は変わっていない。非常に大きな失策ではあるが、決定的な失敗とは言えない。グラナードの言うように、まだ挽回出来る状況だった。

「早急に態勢を立て直す。しばらくは正攻法のみに絞ろう」

「それが宜しいかと思います。正攻法は隙も少なくなります」

この時、グラナードはヴァンダリオンが冷静さを取り戻した事に満足すると、一度大きく頷いた。グラナードはあまり感情を出さない男だが、この時は明らかに満足げだった。それはつまり、グラナードがその部分を特別重要視していたという事。それを感じ取ったヴァンダリオンは、他人にはなかなか見せない笑顔を覗かせた。

「……グラナード、お前が居てくれてよかった」

「もったいないお言葉です」

「その氷のような冷静さ、少し分けて欲しいものだ」

「しかし私にはヴァンダリオン様のような炎の如き意志の力がございません。ならば炎と氷が力を合わせるのは天命でありましょう」

「よく言った！　それが天命であるなら、我らの覇道は必ずや成就するだろう！」

一時は冷静さを欠き、我を失っていたヴァンダリオン。しかし信頼できる同志であり、古くからの友人でもあるグラナードの存在が、彼に平静さを取り戻させた。この二人の協調が崩れぬ限り、エルファリアとティアの勝利は遠いものとなるに違いないだろう。

戦いが終結した日の夜。孝太郎とテイア、ゆりかの三人は無事に仲間達と再会する事が出来た。場所はパルドムシーハ卿が管理している拠点。そこには孝太郎達だけでなく、捕虜となった皇国軍の兵士も連れて来られていた。そして捕虜となった皇国軍の兵士達から事情を聞いた結果、ヴァンダリオンが講じた罠の全貌が明らかになった。

トレーラーの兵士には前線へ巨人型の機動兵器を輸送するとしか伝えられておらず、ウイルスの格納容器が入っていた金属製の箱に関しては整備用の化学薬品だと教えられていた。だから攻撃を受けた時、彼らは単純にエルファリア派の兵士の攻撃を受けたとしか思わず、巨人を使って反撃に出た。だから彼らはトレーラーを守ろうとは考えない。彼らは何も知らない捨て駒だったのだ。

森の中にいた偽エルファリア派兵士達も状況は似たようなものだった。彼らはエルファリア派がトレーラーで機動兵器を運搬するから、エルファリア派に成り済まして接近し、トレーラーを完膚なきまで破壊するように命令を受けていた。もちろんウイルスが積まれている事は知らないし、トレーラーが友軍である事も知らなかった。もしティア達が情報を掴まなければ、彼らは捨て駒よりも遥かに残酷な運命を辿っただろう。ウイルス兵器を撒き散らしたエルファリア派兵士として汚名を着せられ、しかもウイルスで死ぬ。彼らは生物テロを行ったエルファリア派として死ぬ為に送り込まれたのだった。

幸い彼らはヴァンダリオンの邪悪な陰謀から抜け出る事が出来た。そんな彼らがもたらした証言と数々の物証が、ヴァンダリオンの陰謀の存在を裏付けてくれている。エルファリアはこの陰謀を白日の下に晒し、ヴァンダリオンと対決する為の武器の一つとする事を考えていた。

「おのれヴァンダリオンッ!!　よもやここまで非道な策を巡らせていようとは……仲間の、国民の命をなんだと思っておるのじゃっ!!　それが人間のやる事かぁっ!!」

報告を受けて事情を完全に理解したティアは激怒した。その大きな声が司令室に響き渡り、同席していた孝太郎達は目を丸くした。

「落ち着きなさいってティア！　よく言うじゃない、怒った方が負けるって！」

「負けるものかぁぁっ！　負けてなるものかぁっ！　あのような非道極まる男に、フォルトーゼとそこに住む国民を渡してなるものかぁっ!!」

怒りながらも冷静さを失わないでいるエルファリアとは対照的に、娘のティアは烈火の如く怒った。人の命をゲームの駒ぐらいにしか思っていないヴァンダリオンのやり口には我慢ならなかった。ヴァンダリオンが踏みにじろうとしていたのは、ティア達皇家が必死に守ってきた大事な国民の命なのだ。おかげで興奮したティアは完全に我を忘れており、仲間の言葉すら耳に届かない状態だった。

「やっぱりティアちゃんはお姫様なんですねぇ……キリハさんの時もぉ、胸の中はあんな感じだったんですかぁ？」

「そうだな。故郷が戦場になって、大地の民の命が奪われ……心中穏やかではなかった。

だからティア殿の気持ちはよく分かる」

「私もです。アライア様も、あんな風に思って立ち上がったんです。感情表現は、もう少し穏やかでしたけれど……」

六畳間の少女達はティアの気持ちを察する事は出来ても、声をかけあぐねていた。やはり違う国、違う星の事なので、上手い言葉が見付からなかった。歴史や文化、政治形態から来る微妙な考え方の違いが、結果的に少女達の言葉を安易な同情にまで引き下げてしまうのだ。思い遣るが故の難しい問題だった。

「クランさんは落ち着いていらっしゃいますね？　性格の違いですか？」

誰もが手を出しあぐねている状況だが、真希は一人だけティアに言葉をかけられる人間

がいるかもしれないと思っている。それはティアと同じ皇女であるクラン。だがクランは真希に話を向けられた途端、恥ずかしそうに顔を赤らめた。

「確かに性格の違いはありますけれど、わたくしの場合はその……一年ちょっと前には自分がそのぅ……ですから怒りよりも我が身の後悔というか、羞恥というか……」

「よく分かります。私もダークネスレインボウに関してはそういう風に感じますから」

クランの場合、かつては彼女自身が陰謀を巡らせる側だった。だからヴァンダリオンの悪行を見ていると激しい怒りが湧き上がる反面、自分がやっていた事を客観視させられる事になり、怒りに反省と後悔が同居するようになる。そしてティアに言葉をかけようとすると自分の過去を棚上げせねばならず、どうにも空々しい言葉になってしまう。これは元ダークネスレインボウの真希にも、似たような感覚があった。

「そうなると、里見君の出番なんじゃない？」

「え、俺ですか？」

「唯一の当事者でしょう、二千年前と今、両方の」

静香は孝太郎だけがティアに単純な同情ではない言葉をかけられると思っている。かつて孝太郎はアライアと共にフォルトーゼを救い、今また国難に際して立ち上がった。同時に二千年の長きに亘る、フォルトーゼ人の生き方の手本でもある。孝太郎に無理なら他の誰にも出来まい、それが静香の結論だった。

「大家さん、俺はそんな大人物じゃありませんよ。第一、地球人ですし」

「うるさーい！　いってこーい！」

どんっ

「うわっ!?」

反論に聞く耳を持たず、静香は強引に孝太郎を突き飛ばした。それは格闘技の達人が適切に加減してやった事なので、孝太郎は綺麗にティアの前に追いやられていた。

「そなたもそう思うじゃろう、コータロー!!」

「あー、ええと……」

ティアは目の前に現れた孝太郎に同意を求める。話の繋(つな)がりが見えていない孝太郎はそれに答える事が出来ない。するとティアの怒りが孝太郎の方へ向いた。

「なんじゃ、違うというのか!?」

「まずは落ち着け、な？」

「そなた騎士なら何故(なぜ)ヴァンダリオンを倒すと言わぬ!!　誇(ほこ)りはないのか!?」

「まあまあ……」

「このたわけものおおおおおおおっ!!」

これまでティアの怒りはヴァンダリオンへ向けられており、そのやり場がなくて膨らむ一方だった。だが今、ティアは孝太郎という明確な怒りのやり場を得た。孝太郎が適切にティアを説得できるかどうかは分からないが、なんであれもう少ししたらティアは落ち着くだろう。少女達はそれを良く知っているから、笑顔で成り行きを見守った。

ティアの激しい八つ当たりに対し、孝太郎は最初彼女をなだめようとした。だが数分後には我慢の限界に達し、孝太郎とティアは激しい罵り合いを始めた。それはやがて物理的な攻撃を伴うようになり、そこから二人は殴り合いの大喧嘩に突入していった。

最初パルドムシーハ卿はそんな二人を止めようと考えた。しかし実際に止める前に、娘のルースが彼を引き留めた。最初はルースが引き留めた理由が分からなかったのだが、二人の大喧嘩を見ているうちに段々その理由が分かってきた。

「死ねぇぇぇっ！　死んでしまえぇぇぇっ！　この不忠者がぁぁぁぁっ!!」

「ポンコツ皇女めっ、今日という今日は許さんっ！」

「やれるものならやってみるがよいわぁっ!!」

「ボッコボコにして、その鉄板胸を膨らませてやるぅッ!!」

「言うたなヘッポコ騎士め！　わらわの胸が成長している事も知らん癖(くせ)にいっ！」

激しい言葉と攻撃の応酬であるにもかかわらず、致命的な言葉や攻撃が一つもない。またいつの間にかヴァンダリオンに対する怒りが霧散し、テイアは孝太郎に対してひたすら

に感情をぶつけている。経験豊富な大人の目線でしばらくそんな二人の戦いを眺めた結果、パルドムシーハ卿はこう結論した。

「……恋敵はティアミリス皇女殿下という訳か。強敵だな、ルース」

お互いに傷付け合うつもりなど毛頭ない。ティアは孝太郎に甘えているだけ。だからエルファリアも友人達も放置している。そもそも一国の皇女が平気で殴り合いの喧嘩が出来る相手という時点で、特別な相手であるのは間違いなかった。

「お父様……いいえ、強敵ではありません」

パルドムシーハ卿が呟いた言葉に一瞬目を丸くしたルースだったが、やがて僅かに顔を赤らめて首を横に振った。

「お前にしては随分な自信だな？」

パルドムシーハ卿はそれを娘の自信の表れと取った。いつも真面目で奥手な娘なので、この反応にはむしろ感心していた。だが当のルースは苦笑しながら、もう一度首を横に振った。

「その逆です。むしろ全然自信がないんです」

「なに？」

「あの方を振り向かせるには、殿下と協力し合わなくてはならないでしょう」

「それ程の難物なのか？　あまりそういう印象はないが……」

ルースは一人の力で孝太郎を振り向かせるのは難しいと言う。だがパルドムシーハ卿がこれまでの孝太郎の様子から感じたのは、ごく普通の少年という印象だ。口に出せば親馬鹿だと笑われてしまうだろうが、ルースの魅力で振り向かせられないとは思えなかった。

「わたくし以上に真面目で、固く道理を守り、相手が皇族であっても平気で間違いを正そうとする……そんな騎士の手本のようなお方です。そして、それゆえに誰の手も届かないのです」

ルースが孝太郎の事を語る時、その瞳には絶大な信頼と深い愛情が垣間見える。パルドムシーハ卿は、ルースが好きになった男なのだから、むしろ真面目で当然だろうと感じて

いた。だが誰の手も届かないという点に関しては異論があった。

「あの年頃なら、お色気の一つも繰り出せば引っ掛かりそうなものだが……」

「不可能です」

ルースはなおも首を横に振った。その程度で心を動かせる相手なら、逆にルースはここまで孝太郎に拘らない。動かせないからこそ、募った想いなのだ。

「なにしろ……伝説のアライア皇女でさえ、一人ではあの方を引き留められなかったのですから」

伝説で語られるアライア皇女ですら、孝太郎が騎士である事を止めさせる事が出来なかった。ルースはアライアに出来なかった事を、自分が一人で出来ると思う程に自信家ではなかった。

「アライア皇女？　お前、一体何を言って――ハッ!?」

パルドムシーハ卿はある事に気付き、大慌てで孝太郎を見た。腰に下がっている金と銀の剣、そこに刻まれた紋章、身体を覆う鮮やかな青い鎧。それが単なる趣味でなく、必然の産物であるというのなら――身体全体を揺さぶる様な衝撃が、パルドムシーハ卿に襲い掛かった。

「馬鹿なっ、ルース、それは本気で言っているのかっ!?　もしそれが本当だというのならあの少年はっ!?」

ルースが何を言っているのか、パルドムシーハ卿は理解しつつあった。だがそれは容易に信じられるような事ではない。それを信じるよりも、娘の正気を疑う方がよっぽど簡単な事なのだ。

「はい、そのまさかです」

「なっ、なんだとぉっ!?　では彼は……あの方は――」

「あの方はサトミ・コータロー様。目の覚めるような青く美しい鎧を身に纏い、まばゆく輝く白銀の剣を携え、地獄の炎を操る巨竜を討ち倒し、クーデターの渦中にあった皇国を救った伝説の騎士――」

混乱するパルドムシーハ卿とは対照的に、ルースは至極冷静にきっぱりと言い切った。ティアと殴り合いの喧嘩をしている人物が、一体何者であるのかという事を。

「――わたくし達が古来より、レイオス・ファトラ・ベルトリオンと呼び、親しんでいるお方です」

ルースは誇らしかった。自分の想い人の事を、きちんと父親に紹介出来た事が。だから彼女は堂々と胸を張り、嬉しそうに微笑(ほほえ)んでいた。

「――青騎士だというのかぁっ!?」

だがそれはパルドムシーハ卿にとっては大きな災難だった。パルドムシーハ卿はルースのこの言葉で、冗談(じょう)や誇張抜きに心臓が止まりそうになった。

独自の輸送ルートとダークネスレインボウの魔法を駆使すれば、惑星『アライア』から抜け出す事はそう難しくはない。ＤＫＩは別段警戒されている企業ではないからだ。むしろ軍との協力関係にある分だけ警戒は緩い。だから戦いが終わった翌日の午後には、エウレクシスはフォルトーゼ本星にある本社ビルへ戻っていた。

「自分の出ているニュースを見るだなんて……すっかりタレント気取りね？」

「真耶、昨日から妙に絡むね。何か気に入らない事でもあったのかい？」

「別に。いつも通りよ」

本社ビルの中にある自室へ戻ったエウレクシスは、帰ってくるなりコンピューターとにらめっこを始めていた。彼がコンピューターでやっているのは情報収集。特に昨日の戦いに関する情報を集中的に集めていた。世論の動きや、自分達の正体がバレていないかどうかなど、知っておかなければならない事は多い。ネットワーク上のニュースを読んだり、知り合いの情報通から情報を買ったりと、様々な方法で情報収集を続けていた。

「好きにやればいいじゃない、私なんか気にせずに。私も勝手にやってるわ」

真耶は部屋のソファーに座り、一人で不機嫌そうに酒を飲んでいる。エウレクシスは彼女が昨日から不機嫌である事に気付いていたが、理由はよく分かっていない。だが不機嫌な原因がエウレクシスであるなら彼女は部屋を出る筈なので、何か嫌な事があっての自棄

酒だろうと思っていた。そこでエゥレクシスは、今の用事が済んだら彼女の自棄酒に付き合ってやろうと考え始めていた。

「まあまあ、私も酒に付き合うから、もう少し待ってくれないかい？　ちょっと気になる事があってね」

「気になる事？」

エゥレクシスの言葉に満足したのか、それとも気になる事という言葉に興味を惹かれたのか、真耶は酒瓶とグラスを手にエゥレクシスの方へやってきた。

「この映像だよ」

エウレクシスは真耶に見えるように立体映像の位置を動かすと、最初から映像を再生してやった。それはフォルトーゼの情報ネットワーク上に配信されていた、ニュースの映像だった。

「昨日の戦いの映像よね？」

真耶は横目で映像を見ながらグラスをエウレクシスに手渡し、そこへ酒を注いでいく。それはフォルトーゼ原産の果実を使った発酵酒で、芳醇な香りが辺りに漂った。

「そうなんだが、注目はむしろこっちだね」

エウレクシスは右手で酒を飲みながら、左手でパネルを操作する。すると立体映像を取

り囲むようにして文字のメッセージが現れた。フォルトーゼの情報ネットワークでは、映像の注目した部分に直接メッセージが付けられる仕組みになっているのだ。

「なぁにこれ？　坊やが字で埋まっちゃってるじゃない」

「そうなんだ。みんなコータロー君に注目しているんだよ」

孝太郎が登場するとその周りに多くの文字が現れ、まるでミノムシのような状態になってしまう。おかげで孝太郎の姿は殆ど見えない。鎧の青い色が時折覗く程度だった。

「気持ちはよく分かる。この映像を見たら誰だって思い出すんだよ、私達の歴史に登場する、ある人物の名前をね」

エウレクシスは再びパネルを操作して文字を消す。すると丁度孝太郎が巨人型兵器を蹴散らす所だった。そこで映像はスタジオのキャスターに戻り、戦闘の経緯の解説などが始まった。エウレクシスは経緯を知っているので、ニュースの映像を消して次の映像を再生した。

「そして今の映像から多くのリンクが張られていたのが、この映像だ」

「あら……これも坊やよね？　しかもプライベート？　どこからこんな映像が？」

「カメラの高さや周囲の映像からすると、子供がカメラで撮影したものらしいね」

「それが何らかの理由で漏れた？」

「そんな所だろうね。見ていてごらん、人間離れした動きが幾つも見られるから」

フォルトーゼ全土を繋ぐ銀河規模の情報ネットワーク、そこに幼い子供が撮影したと思われる『あおきしはっけん』と題した映像が投稿されたのは、数日前の事だった。そこには一人の少年の映像が飛び飛びで記録されていた。そのどれもが、問題の少年が人間とは思えないような神技を見せる映像だった。

この『あおきしはっけん』の映像は、最初取るに足らないものだと思われていた。あまりに人間離れした動きばかりが記録されていたので、トリックや合成である事を疑われていたのだ。だが惑星『アライア』での戦闘が報道されると、この映像が急激に注目される

ようになった。惑星『アライア』での戦闘は、複数の報道カメラが青い鎧の騎士の戦いぶりを撮影していた。おかげで彼が実際にそういう事が出来る人間だと証明されたのだ。

「そして極めつけはこれだ」

この『あおきしはっけん』の映像には、報道の映像では遠くてよく分からなかった少年の表情や細かな動きがはっきりと映っている。おかげでこの映像には多くの人間が興味を持った。その中で特に人々の興味を惹いていたのが、彼の持ち物だった。

「坊やの……剣？」

「そうなんだ。この銀色に輝く剣……これまであまり深くは考えて来なかったんだが、もしこの剣が『あの剣』であるなら、事態は少々ややこしい事になる」

エゥレクシスが改めて考えてみれば、ヒントはこれまでに数多く存在していた。

青い鎧、少年と皇女達の関係、巨大な赤い竜、少年がフォルサリアはヴレバナスの魔術師団の子孫だと知っていた事。そして今、立体映像として大写しになっている銀色の剣。その剣の凄まじい力は、エゥレクシス自身が体験していた。

他にも沢山の状況証拠があった。それらは遠回しにだが、問題の少年が何者であるのかという事を示している。だがそれは非常に大胆な考えであったから、合理主義者のエゥレクシスはその考えを排除してきたのだ。

「『あの剣』って？」

「……神託の宝剣、シグナルティン。二千年前に失われたとされている、フォルトーゼの王権を示す神器だよ」

少年が手にしているのは、宝剣シグナルティンかもしれない。剣に刻まれた紋章がアライアのものであるから、映像を見た多くの人々がそんな風に想像し始めている。そしてエウレクシスもまた、そう考え始めていた。

「……まさかコータロー君は青騎士の子孫なのか……？　それとも……」

もし剣が本当にシグナルティンであるのなら、青い鎧の少年は青騎士そのものではないにせよ、その子孫である可能性が高くなる。それはつまり、フォルトーゼの国政を大きく左右しかねない人物が、現れたという事なのだった。

ころな陸戦規定

NEW! 2010/11/25

第二十五条

ころな陸戦条約に批准した者は、笠置静香（ころな荘２０６号室在住）の真の体重を積極的に広報する義務を有する。

あとがき

皆さんお久しぶりです、作者の健速（たけはや）です。今回お届けしたのは二十二巻。皆さんのお宅の本棚には外伝二冊と併せて合計二十四冊（アニメ版の特典を持っている方は二十五冊ですけれども）並んでいる格好になるでしょうか。そして一巻の発売が二〇〇九年の二月で

すので、この巻で丸七年が経過した計算になります。中学でこの本の一巻を買って下さった方が、もう社会人になっているんだなぁと考えると不思議な気分です。八年目に突入した本作ですが、今後も皆さんが楽しめるよう努めて参りますので、今後もよろしくお願い致します。

さてこの巻の内容ですが、前巻のラストで惑星『アライア』へ落ちていった孝太郎達のその後が描かれます。地上では敵が待ち構えていますので、孝太郎達は何とかその包囲網を抜け出さねばなりません。そしてその途中で思わぬ出会いや事件に遭遇し、物語は混迷を深めていきます。

この巻で多少問題だったのが、フォルトーゼのペット事情です。果たしてフォルトーゼには地球と同じく犬や猫が居るのでしょうか？　既にほぼ同じ人間がいると分かっていますから、哺乳類が存在しているのは間違いありません。そうなると後は、犬や猫のように進化しているかどうかという点が問題となります。

今回はティアが悩んでいた人間という種の問題とは違って、完全に同一の犬や猫である必要はありません。大まかに同じように見えれば構わないのです。例えばブルドッグと柴犬では同一種でありながら見た目に大きな開きがありますから、あの程度までは許容範囲です。交配に関しても可能である必要がありません。ティアの悩みと比べると、条件は緩いと言えるでしょう。

地球とフォルトーゼが似た環境の星である事は間違いありません。あとは似た環境であ

れば似た生物が発生し得るのか、という点が問題でしょう。これに関しては地球で既に確認された事例があります。ずっと昔に二つの大陸に分かれ、独自の進化を辿ってきた筈の生物が、不思議とよく似た姿をしている事が確認されているのです。哺乳類と有袋類がそうです。両者は進化の系統樹では全く別の生き物ですが、同じような姿をしている生物が幾つも見付かっています。生活環境がもたらす必然としての生物の形というものが存在しているのかもしれませんね。

地球とフォルトーゼでは生活環境が似ています。従って似たような生物が多数存在している事が想像されます。もちろん例外は存在するでしょうが、似たような生物が居る事は問題がないと考えて差支えがないと思います。そこで犬や猫は普通に存在しているという事に決めました。もしかしたらお腹に子育て用の袋が付いていたりとか、毛皮の色や模様に劇的な違いがあったりするかもしれませんが。加えてペット用に品種改良していくうちに、かなり似てくるんでしょうね。

またあの人物の再登場などもありまして、この巻を読み終えた辺りでほんやりとフォルトーゼ編の全体的なシルエットが見えてくる方もいらっしゃるのかもしれません。今後はその答え合わせをしながら読んでいただくのも一興かと思います。次の巻以降の展開にご期待下さい。

そうそう、実は先日台湾版が何冊かまとめて手元に届きました。一番嬉しいのは二十巻でした。台湾版が既に二十巻まで来ている事にも驚いたのですが、それがなんとドラマCD付きで、とても驚きました。それもオリジナルそのままの日本語音声CDと、翻訳した台本を入れた仕様。『それで大丈夫なの!?』と思いましたが、担当編集のS君が言う事には

向こうのサブカルファンは日本語が分かる人が少なくないとの事でした。それはそれで驚いたんですけれども。という事は、この日本語版を直接読んでいる方もいるのかもしれません。こんにちは、台湾の皆さん（笑）ちなみにS君の話によると、韓国語版は台湾版に追い付きそう、タイ語版も九巻まで来ているとの事。そんな訳でこんにちは韓国の皆さん、タイの皆さんはいかがお過ごしでしょうか（笑）

こうして自分の作品が他の国でも読まれているというのは、とても得難い経験だと思います。気になるのが、この作品の何処が気に入ったのかというあたり。国や文化圏が変われば色々と違いそうですよね。国ごとの人気キャラとかに興味があります。季節ネタの感じ方とかも少し違うかもしれません。面白そうな題材なので、何とかその辺りを知る方法はないものか。とりあえずS君を突っついてみようかな？（笑）そして今後も、各国のファンの皆さんに楽しんで頂けるよう頑張っていこうと思っています。

ドラマＣＤ関連でもう一点お伝えする事がありました。以前ＢＯＯＫ☆ＷＡＬＫＥＲさんから配信した、電子書籍版のドラマＣＤ付き特装版についてです。電子版にドラマＣＤの音声を付けるのは世界初の試みだったようで、どの程度の売り上げが見込めるかが分からず、事業として成り立つのかという不安を抱えたままのスタートでした。ですが幸いな事に『これくらい売れたら助かる』というラインを大きく超えたようで、今後も続けていく方向で話が進んでいます。

私がこのあとがきを書いている三月末の時点では、この二十二巻の電子版に、現物の本の方の十八巻に付いたドラマＣＤの音声が付く特装版が出る事が決まっています。その先の詳細な部分はこのあとがきではお伝えする事が出来ませんので、ホビージャパンさんやＢＯＯＫ☆ＷＡＬＫＥＲさんの公式サイトをご覧頂ければと思います。

個人的にはこのままドラマＣＤを四つ全部配信できるといいなぁと思っています。現物

の本の方の特装版を買い逃したという声を結構聞くので、そういう方達のお手元に届ける方法としては優れた方法なんじゃないかと思っています。

今後ラノベというか、サブカル全体の動きとしてはどうなんでしょう。こういうドラマCDの提供形態は広がっていくのでしょうか。広がってくれると地方格差が軽減されていいのかもしれません。とはいえCDそのものが欲しいという人も多いでしょうから、それで現物の方がなくなるという事はないでしょうけれども。

最近ちょっと悩んでいるのが、世の中の変化が早過ぎて我々が少し対応が遅れている部分が現れ始めた、という事です。その最たる例が、読者の声を正しい割合で聞く事が出来ないという問題です。

ライトノベルの読者はやはり中高生が最多で大半を占め、それ以降は徐々に低下して三十台では数パーセント。二十代後半から三十代で多くが卒業していく構図にあるらしい事が、関連商品のアンケート等から分かっています。しかし我々はその声を上手く拾い上げる事が出来ていません。本に挟んでいる読者カードの利用は低迷し、かといってインターネットから聞こえてくる声は二十代以上のものが多くを占めるからです。

例えばネット書店はクレジットカードの利用に絡んで、利用者が二十代以上になる所が多くなっています。その場合、自然と利用者のレビューは二十代以上の声という事になります。ＳＮＳや書評サイトでは個人情報の保護という観点から、多くの人が年齢の情報を伏せて利用しています。また積極的に読んだ本の情報をネットに乗せている人は本が沢山買えるという事でもありますから、年齢層が高くなるという事情もあります。

こうした事から、インターネットからは読者の皆さんの声は聞こえても、正しい割合で

声を聞く事が出来ません。どういう割合で、どの世代が、どんな声を上げているのかを、正確に知る事が困難なのです。

こちらでも何らかの対応をする必要があると考えておりますが、そういう仕組みをすぐに作り出すのは難しい事です。どうしたら正しい割合の声を聞けるようにできるのかは、議論の余地があるからです。そこで対応が済むまでは、やはり読者カードに頼らざるを得ない、という事になります。

この高度に情報化した時代において、未だに本に挟んだ読者カードに頼らざるを得ないというのは皮肉な話なのですが、現状では我々の命綱だと言えるでしょう。この作品に限らず、お手元に読者カードがあるという皆さんはご記入の上で送って頂けると、レーベル全体、そして業界全体の力になります。特に若い層の声からは、ラノベを読むきっかけが何だったのかを知る事が出来ます。それは今後もラノベ文化を継続していく為に必要な、大変貴重な手掛かりです。ご協力をお願い致します。

そうだ、個人的なお知らせを一つだけ。実は最近、別の出版社のライトノベルレーベルでやっていた作品がレーベルそのものが云々する問題で終わってしまったので、相当時間が空きました。もちろん仕事がなくなっている状態は良くありませんので、新しい企画を作り始めました。言える範囲で大まかに言うと、冒険ものです。主人公は定められた今の生活に満足せず、住み慣れた故郷を離れ、旅に出るのです。技術的なやり口としてはこの六畳間と同じ感じになると思います。単純な話のように始めて、実は色々とややこしい話でした、という。そうしておかないと大人の事情で長い話は作れないのです（笑）詳細はどこかのタイミングで皆さんにお伝え出来るかと思いますので、もうしばらくお待ち下さい。

上手い具合にページがなくなってきましたので、今回はここで終わりにしようと思います。最後はいつもの御挨拶を。この作品の執筆でいつもご尽力頂いている編集部の皆様、色々なイラストを描いて下さるポコさん、そして八年目に突入してもお付き合いして下さっている読者の皆様に深く御礼を申し上げます。

それでは二十三巻のあとがきでお会いしましょう。

二〇一六年　三月

健速